勇者進化論

虎次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勇者進化論

【Ｎコード】
Ｎ１９６０Ｌ

【作者名】
虎次郎

【あらすじ】
高校生・朝倉隆雄は目覚めると魔法使いの老人に勇者として異世界へ召喚されていた。だが、話を聞けばどうもおかしい。勇者を召喚するのは本来この老人ではなく、お隣の帝国の宮廷魔術師の役目だという。わけもわからぬまま異世界で暮らし始める隆雄、しかし遂には２人目の勇者が召喚され、勇者として発表される。「おいおい、それならいったい何のために俺は召喚されたんだ……え、ひょっとして予備？」。突如として異世界に放り出された仮勇者の物語。異世界長編ファンタジーです。

プロローグ　召喚された仮勇者（前書き）

処女作の長編ファンタジーです。
なんとか定期的に更新していきたいと思っていますので、
よろしくお願いします。

プロローグ　召喚された仮勇者

朝倉隆雄はまだ寝ぼけていた。

数学の宿題やってなかったなぁ、と宿題を忘れるのはいつものことなげやりに寝床に入ったのが昨晩のこと。

背中に痛みを感じて目が覚めたら、そこは住み慣れた自分の部屋ではなく、床一面に奇怪な模様の書かれた薄暗い部屋だった。

身体を起こしたところで目が合ったのが、全身を覆う真っ白なローブを着た人影。

手には何やらいかにも魔法使いです、といったこれまたおかしな形状の杖を持っている。

そして、いきなり――

「ついに成功だ！　わしは遂に勇者召喚をやってのけたぞ！　ざまぁみろ、帝国の腐れ魔術師どもめッ！」

頭を覆うフードを取り払うや、これまた真っ白な髪の老人が気でも狂ったかの様子で笑い始めた。

隆雄はそれをただ茫然と見ていた、というより、見ているしかなかった。

なにせ状況がさっぱり分からないのである。

（夢にしてはなんだか質感がリアルだな……）

寝起きということもあってか、いまいち回転しない頭でぼんやりと考え始めた頃、
さすがに疲れたのか笑い終えた老人が、今度はゆっくりと隆雄に歩み寄ってきた。

「少年、名前は？」

そう聞かれても、隆雄は反応できずにいた。
間の抜けたことに口を半開きにして、ただただ冷たい床にへたりこむばかり。

「これ、何を放心しておる？　わしは名前はなんというのか、と聞いておるのだ。言葉が通じておらんのか？」

「――朝倉、隆雄、です」

老人が少し苛立たしげに再度質問してやっと、搾り出すように自らの名前を告げる。
といっても、非常にか細い声であったが。

「アサクラ、タカオ、か。
……ふん、確か異世界人は家名を先に持ってくるんじゃったかな？」

「はぁ……？」

（イセカイジン？）

徐々にエンジンのかかりはじめた隆人の頭に、不穏当な言葉が反芻される。

（――おいおい、まさか……）

脳裏に浮かび始める嫌な答え。

しかし、隆人が思考の整理を終える前に、老人は更に言葉を続ける。

「わしの名前は、ホムレウス・オルノアン。

そして、ここはヴァルゴアン王国が王都サンエストル。

世界は今、魔王の脅威に瀕している。故にお前を歓迎するぞ！

異世界へようこそ、勇者タカオよ！」

「はいッ！？」

会心の笑みの老人の言葉に、完全に起動した孝雄はようやく認識した。

自分が、とんでもない異常事態に遭遇してしまったのだと。

「つまり……俺に、魔王を倒せと？」

そうじゃ、と当然のこととばかりに頷く老人――ホムレウス。

あの薄暗い部屋からわけも分からないまま連れ出されたのは、いかにもファンタジーにありそうな中世的な室内で。座らされたのは木彫りの椅子。テーブルを挟んで向かいに座るのがホムレウスだ。

夢なら早いところ醒めてくれと現実逃避気味の隆雄に、ホムレウスは淡々と状況を説明した。

曰く

《勇者召喚》なる儀式により、自分が異世界に召喚されたのだということ。

この世界は現在危機に直面しており、それは魔王による侵攻であるということ。

過去、魔王による侵攻は度々あったが、それを打ち払ったのはいずれも異世界より召喚された勇者達であったこと。

そして、自分がその勇者であるということ……。

あまりにも空想染みた話に、隆雄は話に食らい突いていくだけで必死だった。

「俺はありふれた高校3年生、学生なんですよ？　そんなこといきなり言われても……」

「歴史上、勇者召喚によって召喚された者はいずれも異世界人であったが、最初はみな似たようなことを言っておったそうだ。だが、いずれの勇者も立派に成長し、魔王を見事討ち倒した。同じ儀式によって召喚されたお前に同じことができない道理はあるまいに？」

「そんな無茶苦茶な理屈……！」

「無茶苦茶でも、お前はやらねばならん。……あらかじめ、言っておこう。お前が元の世界に帰還する方法はただひとつ。魔王を倒すことのみ。それが目的で召喚された故に、目的が達成されぬ限り、お前は元の世界には戻れぬ！」

改めて、隆雄は茫然とする。否も応もない、つまり勇者になるしかないということだ。

では、元の世界での生活はどうなる？

家族は？　友達は？　学校は？　苦労して、嫌々やった受験勉強は？

それでもホムレウスは更に続ける。

「なに、案ずることはない。知識や技能、この世界で生きて、闘っていく上で必要となるモノはできうる限り、わしが与えて――って、おい、聞いておるのか？」

と言っても、現実に進行しているこの異常事態に隆雄は何ら反応できなかった。頭の中を整理するだけで精一杯なのだ。

自失している隆雄の様子に、ホムレウスはやれやれとばかりに溜息一つ。

「……まぁ、無理もなし。頭を整理する時間は必要か。……もう日暮れか。これ、タカオ。話はまた明日だ。今日はもう休め」

そう言うや、ホムレウスはなお茫然とするタカオを半ば無理やり立たせると、寝室らしき部屋へと促した。そこにあるのは、真っ白なシーツの大きなベッドが１つ。

トン、と背中を押されたタカオはまるで亡霊のような足取りでベッドに向かい、そのまま倒れこんだ。

先程寝て起きたばかりだ。眠いはずがない――と瞬間暢気にも考えたが、どうしたことか眠気はすぐに襲ってきた。

「すべてはここから始まるのじゃ……。おのれオーラキア帝国め、宮廷魔術師め。

《勇者召喚》はもはやお前達だけのものではない

わしの召喚したあの少年こそが、真なる勇者となるのだ……ククク」

次に目を醒ました時、そこは住み慣れた自分の部屋であるはず。

そう期待しながら、隆雄は眠りに落ちた。

薄気味悪い、この世のものとは思えぬ不気味な笑い声が響くなか……。

第1話　仮勇者、とりあえず傭兵になる

「やれやれ、どうしてこうなるんだか……」

射るようにぶつけられる凶暴な視線に、俺は気が滅入りそうだった。

今朝方、ギルドで受けた護衛任務。

とある商人が隣町まで商品を馬車に積んで移動するのでそれを護衛する――言葉面だけなら実に簡単な任務であったし、報酬も同類の仕事に良かったので受けることにした。本来、隣町までの距離は徒歩で4日程度、馬車であれば更に短期間で踏破できる行程なのだが、依頼者はどうやらかなりの小心者らしい。万が一、ということに備えてギルドに護衛を依頼したのだそうだ。報酬にしたところで決して安価ではないというのに、それほど商品が大事なのか。

いずれにせよ、のんびりできそうな任務だと思っていた。――当初は。

今の状況としては、非常によろしくない。

地理的には、隣町への行程も８割方過ぎ、本日中には目的地に到着すると思われる地点。

まずは背後。

依頼主の商人は腰を抜かして動けない、馬車馬は怯えきって身動きできず役立たず。

そして周囲。

視界に広がる、リトルオークと呼ばれる魔物の群れ。

その特徴的な細長い腕は、先端で土やら血やらで薄汚れた爪を持ち、体長は１メートル半といったところ。どす黒い肌、額から伸びる太く短い角、そして瞳孔の開ききった白く濁った瞳。そこに理性というものはまったく感じられず、いわゆる鬼というものはこういう連中のことをいうのではないかと思う。

リトルオークはいわゆるポピュラーな魔物だ。今回のように商人の馬車であったりとか、旅人が襲われるというのもままあることであるし、護衛の傭兵に撃退されるということも非常によくあること。

だが、それはあくまでも数匹単位での話。

今回のように、５０匹近いリトルオークがたがたが馬車１つ襲撃するというのは、異常だ。

「き、君ッ！　早く、なんとかしてくれ、よ……！　こういうときの為に――」

４０代ぐらいの小太りの商人は怯えきった声を上げていた。
情けないほどに震えた声を絞り出すその姿は、先日初めて顔を合わせた際の居丈高な様子が見る影もなくなっている。

「分かっていますよ。ただ、お願いですから下手に動いたりしないで、じっとしててくださいね？」

腰の抜けた男にそんなことを言う必要もないかとも思ったが、念押しの為に注意すると、改めて剣を構えなおす。
武器は、細長い剣１本である。余計な装飾はなく、ただただシンプルな拵えの剣だ。これを選んだ理由は唯１つ、安価だったからだ。

「こいつは何か別口で手当てでも貰わないと割に合わないな……」

溜息混じりにそう呟くと、勢いよくリトルオークの群れへと駆け出した。

☆
☆
☆

「はい、どうもお疲れ様。これが今回の報酬」

「……どうも割に合わない気がする」

そう言ってブツブツと文句を垂れている男に、私は銀貨3枚の入った皮袋を手渡した。

ヴァルゴアン王国、王都サンエストル。ここは王都唯一のギルド窓口である。

私の名前は、ライド・アルム。王都サンエストルのギルド職員。
ちなみに年齢は今年で３４で、妻帯者だ。

私の来歴を語るには、ギルドという組織について説明するところから始めなければならないのだが、生憎と私は説明が上手でない。である故に、簡潔に説明するに留めたい。

ギルド――正式名称、傭兵互助組合の歴史は深い。気の遠くなるような昔に創立されたらしいが、細々とした歴史などどうでもいいだろう。

現在ギルドは、傭兵達の仕事受注窓口となっている。

仕事の内容は実に多種多様で、例えば魔物討伐、旅の護衛、レアな物品の探索から、果ては近所の引越し作業の手伝い、土木工事などなど、はっきり言えばなんでもあり。要は、人手が足りないと考える人々が正当と思われる報酬を用意してギルドに依頼し、仲介者となるギルドが傭兵に仕事を紹介し、依頼が達成されれば依頼主から預けられた報酬を傭兵に渡す、という仕組みだ。

それゆえに、傭兵、という言い方は少し語弊がある。
その内実はいわゆる冒険者と呼ばれるような連中で、戦士や魔法使い、盗賊紛いのろくでなしまで様々だ。

そして私は、このギルドの事務員というわけだ。

働き始めてからこれまで、ずっとギルドで働いてきた。おそらく生涯ギルドで働き続けるのだと思う。日々舞い込む人々からのギルドへの依頼の整理、傭兵達の依頼受託手続き、任務完了報告に対する報酬の支払いなどなど、なかなかに忙しい日々を送っている。

そして、既に顔馴染みとなったこの青年――タカオ・アサクラも、当ギルドの会員だ。

「なんだい、若い男がぶつぶつと文句が多いね。望んで受けた任務だろうに」

「依頼文通りの任務だったんなら、それは文句なしなんですが。リトルオークの群れに襲われるなんて、予想外もいいところです」

「あぁ、そのあたりの話は依頼主さんから聞いたよ。随分と活躍したそうじゃないか。そりゃあリトルオーク４０匹を斬り倒すというのは大変だったろうけど。怪我人もなし、商品も無事に送り届けることができた。いいことづくめじゃないか」

「おかげで剣は買い替えですよ。汚れてしまって使い物にならない」

はぁ、と沈み込む溜息とともに、タカオは肩を落とした様子でギルドから出て行った。

「なんだか今日はお疲れですねぇ、タカオさん」

と言って、横から話しかけてきたのは、同じく事務員で、後輩のレイナ・フォノス。

まだまだ幼さ残る童顔、赤毛の目立つ少女である。綺麗、というよりは可愛らしいという言葉が似合う、まだ若い１８歳の新人だ。仕事を覚えたてで危なっかしさ残る彼女をフォローをする私は、さながら彼女の指導係といったところか。

確か彼女がこのギルドに事務員として配属された同時期に、彼、タカオ・アサクラもギルドに入会したのではなかったろうか。

「ん、ああ……今回の依頼、護衛任務というよりは、結果的には討伐任務も兼ねることになってしまったからね、疲れているんだろう」

「でも凄いですよねぇ。リトルオークとはいえ、４０匹ですよ！　それもたった1人で！　ランクCだなんて不釣合いもいいところじゃないですか」

そう言って目を輝かせている彼女の様子は、彼、タカオ・アサクラを贔屓目に見ていることが丸分かりで。

「まぁ彼はギルドでの仕事は小遣い稼ぎ程度にしか考えてないみたいだからねぇ。いずれは本業に戻らないといけないって、以前に聞いたことがあるような、ないような……？」

「あれ、タカオさんってギルドで生計立てているんじゃないんですか。本業って……？」

さぁ、とだけ言って、私は窓口に向かってきた次なるギルド会員の応対に移った。

それにしても、最近は治安が良くない。

街中が、というよりは、街の外がというべきか。数年前であれば、たかが隣街に行くだけのこと、いくら大事な商品だからといって、ギルドに護衛を依頼するだなんてことはなかった。突発的に出没する盗賊はともかくとしても、魔物の心配はなかったからだ。

ところがどうしたことか、ここのところ旅人や冒険者、商人が魔物に襲撃された、という話をよく耳にする。

遂には王宮の騎士団の隊列まで襲われたというのだから、相当だ。

魔物の活性化の原因。それは、魔王の復活――――らしい。

魔王が数百年の眠りから復活した――そういった噂話が人々の間に回り巡るようになった頃と、魔物の活性化とは時期的に一致する。御伽噺程度にしか私も知らないのだが、魔王は独特の魔力、瘴気というものを持つらしい。ここのところの魔物の活性化は魔王復活による瘴気が原因ではないのか――これも噂話としてよく出回っている。伝承や御伽噺でも、魔王降臨の折は、魔物が人々を襲い、苦しめていたらしい。

魔王復活の真偽の程はともかくとして、勿論、それ以前に魔物による襲撃事件がなかったわけではない。

よくあること、といってしまえば、よくあることだった。

だからこそ傭兵がいて、ギルドがあるのだ。

だが、ここのところは少し異常だと私は感じている。
魔物の討伐依頼は以前に比べてその依頼件数が格段に増加している。それはとりもなおさず、人々の生活圏に対し、魔物が侵食しているということで。
おかげで各都市のギルドは血気盛んな傭兵達で大賑わいらしく、ここ、サンエストル・ギルドもその１つだ。

「ライド君、君もやはりそう思うか」
「はぁ……少し異常でしょう、ここのところ。最悪、魔物が街の中まで押し寄せてきかねない勢いだ。風の噂では、小さな街ではそういうところもあって、手痛い目に遭っているとか……」
「おいおい、さすがにそこまで酷くないよ。そりゃたちの悪い嘘だな」
そう言って、人懐こい笑顔を浮かべるのはサンエストル・ギルドの長だ。
真っ白な髪に皺の出始めた柔らかな顔つき、そして特徴的な大きな眼鏡。本人はここのところよく、そろそろ隠居して静かに暮らしたいなんて言っているが、冗談ではない、ただでさえ忙しくなってき

たというのに、このギルドを取り仕切る長の交代だなんて、内部事務が立ち行かなくなってしまう。

大口依頼主との折衝、処理困難事案の王国ないし他ギルドへの協力要請、逆に王国・他ギルドから協力要請があった場合の傭兵の選定など、挙げていけばきりがないが、内外渡っての連絡調整をこなすのがギルド長の役目だ。

柔らかな眩しい日光が照らす、明るいギルド長の執務室内で私は本日の依頼処理結果を報告していた。

「魔王の復活、か。こうして魔物が跋扈するようになると信じざるをえなくなるねぇ。王国からそんな話は聞かないが……」

まぁ教えてもらえないだけかもしれないけどね、とギルド長は苦笑混じりに話す。

ヴァルゴアン王国。

大陸の東南部に位置する、海に面した温暖な気候を有する国家である。

国土は狭く、隣国のオーラキア帝国に比べれば弱小国家であるが、由緒ある国だ。

ギルドは独立的に運営されているが、王国とは協力関係にあり、ギ

ルド長は定期的に国王と会合の場を設けている。個人的にも親交が深いらしく、世間話をするのがほとんどということだが、やはり会談の場、様々な情報のやり取りがあるらしい。

「ここだけの話だがね……どうもお隣の帝国では、あの《勇者召喚》の儀式を行うらしい。懇意にしている帝国の大臣からこっそり教えてもらったんだが、ね」

「ほぉ。それは初耳ですよ。そうなると魔王復活も噂話ではなく、真実、というわけですか」

《勇者召喚》。

伝承によれば、魔王打倒のために異世界から勇者を召喚するための魔法なのだという。
勇者は大いなる光の力を持ち、魔王の瘴気・闇を打ち払う力を持っているそうだ。
魔王を倒した勇者は、役目を果たした後に、異世界へと帰還するという……。

この《勇者召喚》の儀式、帝国の宮廷魔術師たちのみに伝えられる究極の魔法、と言われている。

これが行われるということは、いよいよ今代の勇者が召喚されるということで、やはり魔王は復活したということ。

「こういう世界になってくると、ギルドが忙しくなるのも当然といえば当然だよ。そもそもこの傭兵ギルドというのは、魔王討伐の際に時の皇帝が世界の冒険者を集めたのが始まりというからね」

「《勇者召喚》があるのに？　それは少し話としておかしくはないですか？」

「まぁまぁ、そこは伝承や御伽噺がもとだからね。ギルド設立の理由はもっと別にあるのかもしれないけど……なにせ数百年も前のこと、誰にも真実は分からないよ」

☆

☆

☆

「……勇者、ねぇ」

「お、信じてねぇな、タカオ。本当さ。いつの時代も魔王が現れりゃあ、勇者が倒すってな。そりゃあ、絶対よ。神々が世界をそういう仕組みにしてくれてんのさ」

鼻息荒く我が事のように話すのは、武器屋の主人だ。

店内のカウンター内の椅子に座って、カウンターから身を乗り出さんばかりに熱く語っている。我知らず訝しげな表情になっていたのか、主人は更に語り続けた。

リトルオークの血や体液で薄汚れた剣を新調するために馴染みの武器屋に足を運んだのだが、街中で頻繁に語られる噂話――すなわち、

魔王復活の話をよくある世間話として振ったのが運のツキ。自分以外に客がいないということもあってか、この主人、熱く語り始めたのである。

「そりゃあ、生き証人なんかいねぇ。だがな、数々の伝承・寓話・御伽噺、これらはいずれも勇者の存在を認めてるんだぜ？」

「いや、別に信じてないわけじゃないんだけど」

「じゃあ、いいじゃねぇか。お前さんも聞いているだろ、魔王復活の噂は。くわえて魔物の活性化。こいつはもう間違いない、北方大地で魔王が復活したんだ。今頃、お隣のオーラキア帝国では《勇者召喚》が準備されているはずさ。いずれお披露目されるだろうよ」

この主人が言う伝承・寓話・御伽噺は、それこそ星の数ほどあるが、内容に大した差はない。いずれも、大筋としては同じだ。

すなわち――

魔王が降臨し、平和に暮らす人々を苦しめる。

時の為政者――国王であったり、皇帝であったり、高名な魔法使いであったり、ばらつきがある――が《勇者召喚》の儀式により、異世界より勇者を召喚する。

勇者は大いなる光の力をもって勇敢に戦い、苦難の末に魔王を討伐、世界に平和をもたらす。その後、勇者は元いた異世界へと帰還する。

――といった具合だ。

現在では《勇者召喚》の魔法は、隣国のオーラキア帝国にのみ伝えられるとされている。

「大いなる光を以って、魔王の闇を振り払わん――そんな一節が何かの伝承にあったかな」

「そうだろ、光の勇者だ。　帝国には《白の騎士団》《蒼の騎士団》《紅の騎士団》ってなとんでもなく強い騎士様たちがいるらしいが、そんなお人たちであっても倒せねぇ魔王を、大いなる力を持った勇者は討つことができるのさ」

勇者はすべてを断ち切る光り輝く剣、あらゆる攻撃・魔法を跳ね除ける光の盾・鎧を装備し、あらゆる魔法を使いこなし、魔物にやられた傷に苦しむ人々をたちどころに治癒したという。

これは、いつぞや聞いたことのある御伽噺の一節だったか。
何にしても、これが全て真実だというなら、確かにその勇者というのは神にも等しい力を持った異世界人、というわけだ。

（……それじゃあ、俺はいったい何なんだ……？）

俺、タカオ・アサクラ――朝倉隆雄とて、２年前に《勇者召喚》によって召喚された異世界人なのだ。

――そう、魔王復活の前に。

「――――おぉっと、すまねぇ。つい熱くなっちまった。えぇっと新しい剣だったな。安い奴でもいいのかい？」

「ああ、構わないよ。とりあえず、そこらの魔物が斬れれば十分だ」

「それぐらいの剣なら吐いて捨てるほどあるが……なぁ、タカオよぉ。
もう少しばかりいい武器を持ったらどうなんだよ？　さっきの勇者の話じゃないが、ギルドの傭兵の噂話だってよく耳にするんだ。ここサンエストルにだ、ランクＢ以上の腕前を持ってるってのに、討伐任務を受けたがらねぇ、やっと２０歳になったばかりの小生意気な小僧がいるってな。

どう考えてもお前のことじゃねぇか！」

「確かに俺のことかもしれないけどさ……いや、それはいくらなんでも買い被りすぎだよ。俺なんかランクCが精一杯だし、護衛や雑事任務の方が性に合ってる」

傭兵ギルド。

そこに俺が入会したのは2年前のことだ。まだまだこの世界のことについて右も左も分からない状態だったというのに、無理やりにあの爺さん――ホムレウス・オノアンに連れてこられたのをよく覚えている。

このギルドだが、傭兵達はそれぞれランクを付けられて登録されている。
具体的にはランクE、D、C、B、A、S、そしてSSまでだ。

ランクEというのは、要はギルドで登録して間もない者。
ランクDはその後一定期間を過ぎた者で、要はここがスタート地点、誰もが通る道だ。

その後、様々な依頼を受けて後、ランクC、B、Aへとギルドより認定される。
ランクDにはまだまだ駆け出しで危なっかしい者も含まれるので、ランクCに認められてやっと一端の傭兵として認められるという具

合だ。

そして、俺はこのランクC、というわけだ。自身を顧みても、分相応である。

ランクAなどは一流の戦士、魔法使い、狩人だし、ランクS以上になると超一流である。残念なことにサンエストル・ギルドにはランクA以上の傭兵は1人もいないので、俺は一度もランクA以上にはお目にかかったことがない。だが、噂だけはよく聞く。傭兵ギルドに登録される者としては、まさに憧れの対象なのだ。

「それこそ帝国内にあるギルドにでも行って、本格的に腕を磨いたらどうなんだ？
俺はお前さんならランクBより上だって夢じゃないと思うんだがなぁ。王都サンエストル、とはいったものの、帝国内に数多くある都市に比べたら、やっぱり小せえ。そんなところのギルドに居たって、いつまでたっても上は目指せねぇと思うぜ」

「だから、買い被りすぎ！　それに、そこまで上を目指そうとは思わないよ」

「……ったく、若者が夢のないことを言うなよ。ランクSになって、二つ名で呼ばれるようになりたい、ぐらい言ったらどうなんだ？
もっとこう、上を目指そうって心意気を持ったらどうだい？」

「あのね……」

ギルド内の昔からの慣習として、ランクＳ以上の傭兵には二つ名を用意するということがあるが……。

冗談じゃない。ランクＳなど夢のまた夢だ。

話に聞くと、ランクＳに認定された者は、言い方は悪いが人間離れした化け物染みた連中と聞く。ランクＳでそれなのだから、ランクＳＳなど何をいわんやだ。それこそ、伝承に語り継がれる勇者みたいな人間なのではないだろうか。

「まったく惜しいもんだ。……ほれ、この剣なんかどうだ？　安価だし、何より軽くて使いやすい。耐久性にちょっと不安があるが、斬れ味はそこそこだぜ。銅貨２枚でいい」

そう言って、主人が放りなげてきたのは鈍く光る、今までのものより少し剣身が太めのものだった。

……十分十分。財布代わりの皮袋から、手早く銅貨２枚を主人に手渡した。

「ふぅ……なんだか疲れた」

つい先程購入したばかりの剣を乱雑に棚に立てかけ、俺は倒れこむようにベッドに寝転んだ。

ここは異世界より召喚された俺が、まず最初に目にした風景、ホムレウス・オルノアンの家である。

いわゆる一軒家というやつで、俺風に言えば、リビングにキッチン、それに寝室、あとちょっとした地下室があるだけの、簡素な家だ。

俺が召喚されるまではホムレウス1人で暮らしていたというのだから、これで十分だったのだろう。

俺が召喚されてから後はしばらく2人で暮らしていたので、少し手狭ではあったが、今となってはホムレウスも音信不通で1年以上戻らず、ここは事実上、俺の家のような状態だ。

この家だが、王都サンエストルより少し離れた小高い丘に建っている。

国王の住まう城、そして王都を一望できる景観は中々に壮観である

が、なにしろ街から遠い。
近いうちに、サンエストル内に一室――言ってみればワンルームマンションか――を借りて引越しを考えているほどだ。

「とはいえ、あの爺さんがいつ戻ってくるか分からないしな……」

それにしても、ホムレウスが旅立ったのは突然だった。
ようやくこの異世界に、勝手の違う生活に、ギルドでの仕事に慣れ始めた矢先のこと。
何の前触れもなく、ホムレウスはこの家から出て行った。
理由は実に簡潔、「調べたいことがあるから」で、いつ戻るのかと問えば、「分からん」、の一言だった。

当時は、勝手にこちらの世界に呼んでおいて無責任すぎると、随分と憤慨した。

確かあの爺さんは最初に「こちらの世界で生き抜いていくうえでの知識、技能は与えてやる」と言った筈である。
だというのに、あの爺さんから教えてもらったことなど、そう多くはない。
こちらの世界におけるいわゆる一般常識と、簡単な魔法の使い方ぐらいである。
そのほかのことについては、結果的にすべて自力で習得することになったのだ。

幸い、文字は読めたし、言葉は通じた。

これで文字は読めず言葉も通じずだったら、八方ふさがりだったが、この家にあった本から、様々なことを学んでいった。

そして、確信した。

この世界は、自分がいわゆるファンタジーと呼ぶ世界そのものなのだということを。

まるで漫画やゲーム、小説の中のような世界。

モンスターがいて、剣で戦って、魔法があって、王様がいて……。

科学技術にどっぷりと浸かり、それを少しも不自然に思わない現代っ子である自分としては、とんでもなく戸惑ったものだ。

そんな迷子も同然の状況の俺を、世界を知るためと称してサンエストルのギルドに連れて行き、ここで日中仕事をしろと言われて放置されたのだから、たまったものではなかった。

なにせ俺は、この世界においてはとんでもない世間知らずなのだ。おかげで何もかもがまず実践から始まったので、大変だったが、随分と勉強させられ、そして同じ分だけ恥ずかしい思いをした。道徳・倫理感覚の違いから荒っぽい事態になったこともある。

だが、何かをしなければ生きていけなかった。
生きていくために、死に物狂いで学習していった。
雑用的な依頼から始まり、少しずつこの世界を知り、剣の使い方を我流で覚え、魔物とも闘えるようになった。
――盗賊の討伐ということで、人間を斬ったこともある。
正直、これには悩まされた。
魔物を殺すのはまだよかったが、人間となるととてつもない抵抗があった。
これを乗り越えるのにはかなり苦労したし、悩みに悩んだもののだが――……。

1つ言えることは、ホムレウスは何一つ助けてくれなかったということだ。

あの爺さんは1日中地下室――俺が召喚された部屋に篭もりっぱなしで、何やら怪しげな、というと少し語弊があるが、ともかく外から見て明らかにおかしいと思えるほどの様子でいろいろと研究している様子だった。俺にいろいろ――といっても微々たるものだが――教えてくれたのは召喚されてからのほんの数日、後はずっと地下に篭もりきりだった。

俺は俺でこの世界に慣れるのに必死で、ホムレウスに関心を寄せる余裕などなかった。
助言を請う、といった事も最初はあったが、完全に無視を決め込まれたとあって、早々に諦めたのである。

なので、よく考えてみればホムレウスが突如として出奔した時は、俺は久しぶりに彼と会話したと言える。

「《勇者召喚》……。ホムレウスは確かにその儀式で俺を召喚したと言っていたけど」

様々な伝聞によれば、《勇者召喚》の儀式はオーラキア帝国の宮廷魔術師にしか伝えられていないという……。

だとすれば、その宮廷魔術師以外に召喚された俺は、本当に勇者なのか……。

さらにいえば、俺が呼ばれたのは魔王復活なんて人々の間に取りざたされる前で、加えて今になって帝国では《勇者召喚》が行われるのではと噂されていて……。

「う～ん……やめた。堂々巡りだな」

こんなことは、少し物事を考える余裕ができた頃に散々考えたことだが、答えなんて決して出ない。今でもふと頭に思いつくが、ただただ悩むだけなので、このあたりはもう考えないようにしている。

今の自分にできることは、少しでも早く元の世界へと帰る方法を探すことだ。

魔王を倒すなどと、そんな無理はない。
ホムレウスは魔王を倒さなければ元の世界には帰れないと言っていたが、そんなはずがないのだ。
異世界から異世界への道があるのだから、それを逆に進むということもできるはずだ。
その道を押し開く手段が、魔王討伐以外にも何かあるはずだ……と思う。

もうこの世界にも慣れてきたのだし、そろそろ帰還の術を捜し求めてもいいと思う。

本当にそういった方法があれば、の話だが……。

「あぁ、もうッ！　だから考えるなっての！」

不安ばかり押し寄せる厄介な思考に見切りをつけるべく、俺は無理やりにでも眠ることにして目をきつく閉じた。

第2話　カマキリ嫌いな仮勇者（前書き）

今回は戦闘中心にしてみました。

試行錯誤しながらなんで、読みづらいかも……。

第2話　カマキリ嫌いな仮勇者

本日は魔物討伐任務である。

ヴァルゴアン王都南西部、オーラキア帝国との国境を跨ぐようにして広がる大森林。

通称《夜の森》。

この森にここ2、3日魔物が多く現れるようになったので退治してほしい、というわけだ。

「――フンッ！」

真上から振り下ろした一閃は、逆三角形の魔物の頭を両断した。

その魔物の名前はマンティス。

言ってみれば昆虫のカマキリをそのまま巨大化させたような魔物である。

前脚である大きな鎌は振るえば大木すら軽々と切り倒し、触れれば刃部分に生える鋭利な棘が容赦なく肌に突き刺さる。また、その特徴的な大顎は、鎌で捕らえた獲物に向けられ、かじられれば人間などひとたまりもない。

ちなみに、肉食だ。

初めて遭遇した時は――

「いや魔物って……ただでっかいカマキリだよね、これ。名前からしてカマキリだからね」

とばかりに舐めてかかってしまい、危うく頭をかじられそうに――

……否、手痛い目に遭った事は苦い思い出だ。

頭を両断されてもなお身動ぎするマンティスに対し、トドメとばかりに回り込んで胴体を両断する。

「ふぅ……これで最後、か？」

剣を鞘に戻して辺りを見回すと、頭を両断され、あるいは胴を両断

され、さらには原形を留めぬほどに斬り刻まれたマンティスが多数転がっていた。
数は――……面倒になったので途中でカウントするのをやめている。
とにかく、いっぱいだ。

マンティスは凶暴で攻撃的な魔物だが、そこまで脅威となるような強さではない。
その大きな前脚にさえ気をつければ、別段どうということはない。
それでも、一般の人々からすれば脅威であることに変わりはないのだが。

ここ《夜の森》は王都サンエストルから徒歩で半日もあれば辿り着ける場所とあって、傭兵以外の人々もよく訪れる。
何故かといえば希少な植物の宝庫でもあるからだ。
市場に出せばそれなりの値段で売れるレアな植物が、平気で植生している。
王都にはここからの採集物を頼りに生計を立てている者もいるほどだ。

（なんというか、マツタケの生えるアカマツ林ってところか？）

だが、この森を気味悪がって近づかない者も多い。というよりそちらが多数派なのだ。

巨木がこれでもかというほど密集して植生し、日光は地面まで届かず。
昼間でもまるで夜のように暗く、そこにいるだけでも息が詰まりそうな雰囲気。

それが《夜の森》と呼ばれる所以である。
加えて、オーラキア帝国との国境を跨る、とてつもなく広い大森林だ。

一度深部まで迷い込んでしまえば、日中でもまったく日が届かず、常闇の空間になる場所もあるといわれ、そこにはとてつもなく凶暴な魔物、あるいは邪悪な魔女が住むと言い伝えられ、二度と森から脱出することはできないという……。

真相は誰にも分からない。まさに、闇の中、というわけだ。

俺にしても、この大森林の入り口から少し入ったところまでしか進んだことがない。

ただ、１つ言える事は、この大森林、魔物ですら気味が悪いと感じるところがあるのか。
そうそう魔物が出没するような場所ではなかったということだ。

それが急に魔物が現れるように、ということで、ギルドに依頼が舞い込んだわけである。

（これも魔物を活性化させる魔王の影響ってやつかね……）

そんな益体もないことを考えながら、疲れを吐き出すように溜息1つ。

「アホらし……これだけ間引けば大丈夫だろ、念のため少し見回ってから帰るか。

……んッ！？」

瞬間、首筋にチリチリとした焦げ付くような感触が襲った。

咄嗟、ほぼ反射的に素早く身体を伏せて中腰になる。

その刹那――

――ヒュッ……

と風を切る音が耳に届く。

音がした方向に目を向ければ、背後にあるのは巨木の幹。

俺の胴回りの一回りも二回りも太い幹が、ゆっくりと、やがて左右にずれる光景があった。

（まずい……！）

俺は素早く剣を引き抜き、その巨木から飛び跳ねるように離れた。

ゆっくりと巨木が斜めに倒れていき、その後ろ――この所業を行ったであろう巨大な鎌を持つ、マンティスの姿が現れる。

今の今まで狩ってきた同種のそれと大きさに比べると2倍はある、巨大マンティス。

その複眼は明らかに俺に向けられていた。

「雄を食らう雌カマキリのご登場、か？」

誰に対してというわけでもなく軽口を叩くが、すぐにそんな余裕はなくなった。

その胴長の身体の後部にあるこれまた巨大な翅、それが獲物を威嚇するかのように広がったと見えるや、この大カマキリがまるでトンボのように飛び跳ねて突進してきたのだ。

中空で振りかぶられる2つの巨大鎌。

その巨体に反して素早く距離を詰めてくるマンティスに、身体を投

げ出すようにして跳ねて距離を取る。

振り下ろされた鎌はまさに目前を通過した。

足元には先程までに叩き斬ったマンティスの死体が多数で足場悪く、周囲にはあちらこちら不規則に巨木が並んで障害物だらけ、対して敵の得物はこの巨木を易々と両断してくる――。

状況は良くない。即座に迎撃に移る。

横合いから一足跳びに距離を詰め、まずはその中脚を狙い、付け根から一気に斬り落とす。

だが、片方の中脚を失ったぐらいどうということはないのか、マンティスは俊敏に身体を動かすや、その体勢のまま体当たりを仕掛けてきた。

間合いに入りすぎたか、予想外の行動に、数瞬反応が遅れる。

剣を盾にする体勢で身構えるが、回避は間に合わない。

直接ではないとはいえ、鈍重なる衝撃が全身を襲い、身体がふわりと浮かび上がる。

吹き飛ばされるように数メートルは弾かれた俺は、しかしながら巨木の幹に叩きつけられ、今度は背中からの衝撃に呻くこととなった。

幸いにして剣は手放していなかったが、痛みに耐える暇などない。

俊敏な大カマキリは直後に身体を旋回させ、瞬時に距離を詰めてくるや、その２つの巨大鎌を横薙ぎに振り切ってきた。

両側から迫る死神の鎌。

避けきれない――瞬時にそう悟った俺は、真正面から迎え撃つことを選択。

背中の巨木の幹を蹴るようにして跳躍、狙いは左側の鎌――左前脚の根元だ。

交錯は一瞬で――――……速かったのは俺の方。

左前脚を根元から斬りおとされたマンティスは苦悶と思しき悲鳴を上げる。

立て直す時間など与えず、続けてマンティスの胴体に剣を突き入れる。

体液らしき気味の悪い液体で服が汚れるのも厭わず、一気に剣の根元まで力任せに突き入れると、渾身の力を込めてそのまま真下へと

叩き落とす。

片方の中脚、左前脚、そして胴体を抉り斬られたマンティスはもはや満身創痍だ。

それでもふらふらと動き出す大カマキリに、力任せにトドメの一閃を放つ。

その一撃は巨大マンティスの頭部をボトリと地面に落とし、数秒遅れて胴体も力なく崩れ落ちた。

「……よし、死んだな」

念のため、というより驚かせてくれた礼に、転がり落ちた頭部を一突きしてから、剣を鞘に納める。

「いや、見事なもんだ！」

「！！？」

突如として背後よりかけられた野太い声に、咄嗟に再度剣を引き抜いて振り向く。

「ああ、驚かせてしまったか！　すまない、タカオ！」

「……なんだ、先生か。びっくりさせないでください」

そこに立っていたのは大柄の大男だった。

見慣れた知り合いということで、一息ついて警戒を解く。

眩しいほどに精悍な顔つきと、それに見合う朗らかな雰囲気。
上半身をすっぽり覆う銀色の鎧は鈍く輝き、背中には俺の身の丈ほどはありそうな巨大な長柄両刃斧を背負っている。身長は俺より頭1つ分大きく、その腕回り、胴回りの太さや、俺の倍以上はあるのではなかろうか。

名前はゲオルグ。

傭兵仕事はこういうものだということ、そして闘い方を教えてくれた先生である。

「先生も人が悪い。その口振りだと今まで覗き見していたということですか」

「なぁに、久しく会っていない弟子がどれだけ成長したか、木陰で

じっくりと観戦させてもらおうと思ってな。……危なくなったら助けに入ろうかと思ったんだが。それにしても、あの巨大マンティスをたった1人で仕留めるとは大したもんだ。若い奴はやはり成長が早いな」

朗らかに笑うゲオルグ先生。
その大柄な身体に見合う豪快な精神と、そして悪く言えば大雑把なやり方で以って、色々と指導してくれたことが思い起こされる。

ギルドに入った当初、俺は我流で闘い方を覚えていった。
剣を武器として選んだのも、ファンタジー世界では一番それらしかったから、という単なる先入観からに過ぎない。だが、俺は剣道を習ったことがあるわけでも、何らかの武道の心得があるわけでもない。独学で習得していくには、どうしても無理があった。
頼ることができるのはホムレウスぐらいだったが、これが地下室に引き篭もり。
こいつは拙い、と考えていた頃に出会ったのが、ゲオルグ先生だった。
剣技を始めとする戦闘技術、これらは全て彼から学んだものである。
ちなみにゲオルグ先生もギルド会員であり、ランクとしてはBだ。

「で？　なんでこんなところで先生と出会うんです？」

「ああ、それなんだが実はな――と、その前にやることをやってしまうか。マンティスの討伐だろ？　俺も手伝うから、さっさと辺りを見回ってこの鬱陶しい森から出よう」

了解、と返事を返して今更ながらに剣を鞘に戻した。

周囲にもはやマンティスの姿が見えないこと、気配がないことを確認し、俺はゲオルグ先生と帰り道を歩いていた。

話を聞けば、ゲオルグ先生は俺に手伝ってほしい仕事があるのだという。

それで朝から俺を捜していたようで、ギルドで確認したら《夜の森》で魔物討伐任務を行っている。ちょうど時間が空いて暇だったこともあり、散歩がてら、様子を見がてら、迎えに来たのだそうだ。

「タカオにとっては簡単な仕事だ、退屈しているだろうと思ってな。

油断したところをちょっと驚かせてやろうと思ったんだが、上手い具合に強敵との戦闘の真っ最中だ。まったく、わざわざ足を運んで正解だった。おかげで弟子の成長ぶりがじっくりと堪能することができたからな」

「そりゃよかった。で、仕事というのは？」

「ああ、それなんだがな……なぁ、タカオ。お前に色々と教えるようになってまだ日が浅いから、そんなに偉そうなことは言える立場じゃないんだがな。それでも俺は出来る限りのことをお前に伝えたつもりだし、お前は呑み込みが恐ろしく早いからこうやって殆ど一人前で仕事をしている。

そこで、だ。そろそろお前に見聞を広めてもらおうと思ってな。

今度、ギルドの護衛任務でオーラキア帝国の帝都まで向かう。それにお前を連れて行きたい、ってわけだ。よくよく考えてみればお前とは王国内は方々歩き回ったが、国境を越えたことはなかったからな」

勿論ただの付き添いではなく、あくまでも一端の傭兵としてだぜ、とゲオルグは続けた。

……誘ってくれるのは嬉しいんだが、すぐに脳裏に浮かんだ不安がある。

それをそのまま口にした。

「俺が行っても足手まといにならないか？　帝都までとなると、かなりの長距離だし、俺はランクCだ。帝国内では王国内じゃ出遭わないような強力な魔物が出没するって話も聞く。正直、護衛といってもどこまで役に立てるか分からない」

オーラキア帝国に比べて、ヴァルゴアン王国は弱小だ。
それは、魔物の質という意味でも同様で、帝国内は凶暴な魔物が多いらしい。

それに比してか、帝国内のギルドで活動する傭兵達もかなりレベルが高いと聞く。
また、それがなくともオーラキア帝国の3大騎士団、《白の騎士団》《蒼の騎士団》《紅の騎士団》が強固に魔物を押さえつけているといわれているのだ。

「なに、役に立たなくたってそれも経験だ。伝聞だけでしか知らないというのは、やっぱり頼りないもんだからな。大事なのは自身の肌で感じることだと俺は考えている。でなきゃ本質は分からない。お前の心配もよく分かるつもりだ。実際王国と帝国の魔物を比べると、帝国内の魔物の方が数段と強力だからな。

だがな、俺はさっきのお前の闘いっぷりを見て確信した。お前は帝国内の魔物とも十分張り合える。正直お前の成長速度を見誤っていた。もっと経験を積ませてから帝国へ、と考えていたんだがな。も

う遅いぐらいだ。」

とゲオルグ先生は自身ありげ言うが、俺はなんとも答えようがなかった。

正直、自分がそこまで強くなったのかなんて、まったく実感として湧かない。

行きたい、という気持ちはあるが……いまいち、乗り気がしない。

思い悩む俺に、ゲオルグは軽い調子で肩に手を置いた。

「ま、出発はまだ2週間ほど先だからな。それまでに決めてくれればいいさ。お前の師匠役としては、いい機会だと思ったんでな。俺としては、お勧めだ。ただ、なにも無理強いするわけじゃないからな。ひとつ考えてみてくれたらいい」

帝国行き。

乗り気はしないが、大いに興味はある。

というのも、《勇者召喚》のことがあるからだ。

《勇者召喚》の儀式は帝国の宮廷魔術師によってのみ行われる、という。

そして、魔王復活の噂と、近々《勇者召喚》が行われるのではないかという噂。

同じく《勇者召喚》によって召喚された身だ、興味を持たないはずがない。

オーラキア帝国に行けば、魔王のこと勇者のこと、もっと具体的な情報が得られるかもしれない。

いずれチャンスがあれば帝国へ行って……と考えたことは幾度もある。

だが、先程考えたような懸念もある。

王国内でも魔物が活性化して治安面で不安が出てきているのだ、帝国内でも当然同じような問題が出ているだろう。杞憂かもしれないが、傭兵の身だ、運悪く命を落とすことだってあるかもしれない。

……冗談じゃない。

こんな異世界で死ぬなんて、絶対にごめんだ。

俺は元いた世界に必ずや帰ってみせる。

帰還の方法を発見し、いずれ掴み取るその日が来るまで、俺は死ぬわけにはいかないのだ。

（……さて、どうしたものか）

思案しつつ、俺はゲオルグ先生と王都への道をゆっくりと歩き続けた。

第3話　選り好みする仮勇者

さて、本日は魔物討伐――ではなく、雑事任務である。

雑事任務というのは、言うならば雑用。

簡潔に表現するならば――人手が足りないよ、そこの兄ちゃん、力を貸しとくれ――と、いうわけだ。

で、この雑事任務なのだが、ギルド内ではどうにも不人気らしく……。

☆　☆　☆

「これなんてどうでしょう？　王都南部の憩いの公園にある噴水の大掃除」

「……いや、レイナさん？　あの馬鹿みたいに大きい噴水の掃除なんて短期間に終わるはずないから。というより誰、そんな依頼をギルドに持ち込んだの。ひょっとして王国関係者――え、ただの一般人？　馬鹿なの？　どれだけ掃除好き？」

赤毛の若いギルド事務員レイナは「それなら次は……」と嬉々とした様子で依頼の整理票をぺらぺらとめくる。

彼女に応対されるのは、これまた若き傭兵、タカオ・アサクラだ。

黒髪黒瞳、涼しげで身軽な服装に、剣1本だけを装備し、防具を何一つ身に付けないこの青年は、当サンエストル・ギルドでは色々な意味で有名である。

屈強な身体を持つ者の多い傭兵の中、上背だけはある痩せぎすの青年。

どんな任務であれ剣一本のみを持ち、盾・鎧といった防具は装備せず、普段着に近い軽装で魔物討伐にすら臨む。

その剣技はサンエストル・ギルド屈指の傭兵にして彼の師、ゲオルグ・ジョルテのお墨付き。

ギルドのランク上昇に興味を持たず、魔法を苦手とするのは師匠譲りという似たもの師弟。

加えて、その若さと秀目美麗とまでは言えないまでもなかなかに端整な顔つきは、当ギルドの某女性事務員を悩ましてならず――。

……

まぁ、色々と有名なのだ。

そして私は、ライド・アルム。

当ギルドの上席事務員であり、ギルド長への日々の報告担当であり、新人の指導担当であり、窓口担当でもある。

今日も今日とて、窓口カウンターで依頼を受けに、あるいは依頼の

完了報告に訪れる傭兵達の相手をしている。

日々の定型業務ということもあり、手は動かしながらも耳は若い2人の会話に傾ける。

「では、これは？　商品の棚卸をしたいのだが、人手が足りない、助けてくれ……王都西にある《黒星雑貨屋》さんからですねぇ」

「そこって確か、王国治安隊が規制している怪しい物品を仕入れたとかいって、結構きつい処罰受けたところじゃなかったか？　懲りもせずにまだ商売続けてたの？」

「はぁ……話に聞くと、今は真っ当な雑貨ばかり扱う店になったそうです。噂によれば怪しい客層と店構えは変わってないそうですけど……」

「ってことは、いずれまた自警団が手入れに動くんじゃない？　運悪く店主と一緒に治安隊に突き出されるのはごめんだ。というより……ギルドももう少し依頼主を選んだらどうなの。そんな怪しい依頼まで引き受けて」

「まぁそう言わずに。来るもの拒まずのギルドですから」

エへへ、とまるで子供のように暢気に笑うレイナ。

まぁ、ギルドは基本的にどのような依頼であっても受託してしまうから、中には怪しい依頼が出てくるのも仕方ない。下手すれば王国治安隊に突き出されるような仕事の片棒担がされることもある。こ

れについてはギルドでも厳しくチェックするようにはしているが、細部までは管理しきれない部分もあるのだ。

「じゃあ次は〜〜……と」

「……レイナさん。別に無理して雑事任務ばかり選ばなくてもいいから。何なら採集でも護衛でも、なければ討伐でも……」

そんなタカオの進言を聞いているのかいないのか、レイナは再び依頼整理票をぺらぺらとめくり始める。

それにしても、甲斐甲斐しい。

彼女達は窓口横の応接席で向かい合って、あれでもないこれでもないと話し合っているが、通常事務員がわざわざ一傭兵の為にそこまでして仕事を選んでやる義理はない。

ギルドでは日々舞い込む依頼を、要点だけ簡潔に紙に書き出して整理している。

それを傭兵達には自由に閲覧できるようにしているし、緊急事案であれば目立つように掲示し、傭兵達に声を掛けて急募する。

つまり、傭兵達はそこから自由に依頼を選び出し、窓口で正規に受け付けるのだ。

希望に合致する依頼はないか、個別に相談する。そんな面倒なこと、わざわざする必要もないのだが、彼女、レイナ・フォノスはタカオ・アサクラに対してだけは、そういうことをしている。

つまるところ、それだけ彼女にとってタカオは特別なのだ。

まぁ、私もこれについては目を瞑ることにしている。

彼女が窓口を外すので私の負担が多くなるのだが、それを差し引いてもタカオが雑事任務を消化してくれるのは大きい。

傭兵達は所詮は冒険者達が大部分だ。

全員がそうであるとは言わないが、実に血の気の多い連中で、討伐任務で魔物を倒して腕を上げたい、ランクを上げたいとか、そういう者達が多い。何故に大して評価されない雑事任務など、というわけだ。

実際、雑事任務などはランク最下位のランクEの連中にやろせろとばかりに、見下している輩もいる。

達成しても、例えばランク上昇のための評価にはあまり考慮されないというのは事実だから、どうしても雑事任務の消化率は悪い。

依頼を長期間放置するというのはやはりあまり良くないことであり、度々どうしたものか各ギルドでは悩みの種になる。

面倒なもの、時間のかかるもの、関わったらややこしいことに巻き込まれそうなもの――そういった依頼整理票からどんどんと棚の奥へと追いやられ、まるで埃のように鬱積し、いずれ誰かに清掃されるのを待つ、というわけだ。

なればこそ、こうして雑事任務を積極的に消化してくれる傭兵の存在は非常にありがたいのだ。

レイナもこの仕事を始めて日が浅いとはいえ、その辺りを心得始めたのか、雑事任務にあたっても嫌な顔１つしないでくれているタカオに積極的に雑事任務を勧めている。

「疎遠になってしまった恋人との仲を修復したい、助けてくれ、っていうのもありますね。……う～、重いし、かなり痛いですね。……試しにやってみます？　何なら私も手伝って――」

「なにが悲しくてそんなことやらなきゃいけないの？」

単に少しでも長くタカオと話をしたいからだけではないのか――そんな気が、しないでもないが。

☆
☆
☆

結局、ギルドで受けた依頼は、簡単な運搬作業となった。
帝国から遠路遥々商品を仕入れてきたので、それを倉庫まで運んでほしい、というわけだ。

「はじめまして、ギルドから派遣されました、タカオ・アサクラです」

「いやあ、すまないね、傭兵の兄ちゃん！　もともと手伝いはいるんだが、こいつが怪我して療養してるもんでね。１人だと時間がか

かって難儀してたのさ」

そう言って朗らかに微笑するのは、恰幅のいい中年の女性。

取り扱うのは薬品で、いわゆる回復薬とか解毒剤と呼ばれるものだ。それも品質的にかなり上等な高級品である。

ひとつひとつは軽いのだが、繊細に扱う必要があるので、1人で運び込むとどうしても時間がかかるのだという。

最初、ギルドに頼んでも柄の悪い傭兵が寄越されるかもしれず、少し迷ったというが、結局依頼することにしたらしい。

俺のような青年が来てくれて安心した、とのことだ。

早速、作業を開始する。

「そういや知ってるかい兄ちゃん。最近このあたりもなんだか物騒になってきてねぇ。魔物に襲われる人が急に増えてきてるってんだよ。やだやだ、怖い話だねぇ」

「そうですね」

「どこもかしこも、北方大地で魔王が復活したって噂で持ちきりだし、怖い世の中になってきたよ。御伽噺に出てくる勇者様ってのが、いよいよ来てくださるのかねぇ」

そうですね、と再び生返事で応じる。

それにしても、最近の人々の話題は皆同じだ。

王国中、いや帝国も含め世界中が同じなのかもしれないが、人々の話題といえば魔王復活の話題だ。

魔物の出没が多くなっているものだから、噂が噂でとどまらなくなってしまい、次第にではあるが得体のしれない恐怖が覆い始めている。

それでも、王国にせよ帝国にせよ、根も葉もない噂として切って捨てているようだし、実際具体的な動きを見せていないから、あくまでも市井の噂にとどまっている。

だからなのか、人々にもそれほどの危機感はなく――。

「そういやアンタ、聞いたかい？　王国の近衛騎士団、エイゼル様の噂をさ――」

と、次なる話題、いわゆるゴシップネタに移る、という具合だ。

「はい、お疲れ様でしたタカオさん。こちら、今回の報酬です」
窓口のレイナより報酬の入った皮袋を受け取る。
討伐任務に比べれば少ないが、簡単な仕事だったし、これぐらいが相場だろう。

「はい、どうも……何か、騒がしい、ね。何かあったの？」

騒々しいのはいつものことではいえ、今日は一段と騒がしい。
朝はそうでもなかったはずなのだが。

傭兵達がいくつものグループを作って、お互いに顔を付き合わせて何やら相談している様子で、熱気と、加えて慌ただしい雰囲気が立ち込めていた。

断片的に「報酬が……」「帝国の……」「北方……」「魔物が……」といった声があちらこちらから漏れ聞こえてくる。

「はぁ……それがですねぇ。先程（ライトアロー）で、オーラキア帝国・帝国ギルド・ギルド長の名前で緊急事案が送られてきたんです」

「珍しい。ギルド長任務か」

通常、ギルドは人々からの依頼を仲介するだけだから、ギルド自体の名前で依頼を起こすことはない。

だが稀に、それぞれの都市のギルド長から直接依頼が起こされる。それは大概の場合、極めて緊急性が高いものであり、放置されれば人々の安全に支障を来す恐れがあるものだ。

こういう事態となれば国家騎士団も当然出動するのだが、どうしても初動が遅れる場合がある。

少しの時間でも惜しい、というような場合、国からギルド長へ依頼し、傭兵を動かしてもらう。

すなわち、依頼者は国家といえるのだが、ギルド長の名前で依頼が起こされるのが通例だ。

まぁ、例外もあるようだが……。

ちなみに《ライトアロー》とは、この異世界における魔法の1つで、言うならば異世界版の超高速通信方法だ。

この魔法、名前そのままの代物で文書を光の矢で相手に届けることができる。

さながら、時代劇にありそうな矢文といったところだろうか。

かなりの高等魔法ということで、魔法使いの中でも一部の者しか行使できないという。

「ええ、まったく。で、内容なんですが、全世界のギルドに同一のモノが発信されているようです。要約すると、帝国の北方砦《白の要塞》に多数の傭兵を招集し、警備任務に当たってもらいたい、というものです。期間は2ヶ月。さらに報酬が1人に対して、なんと金貨5枚」

「それはまた……！」

その報酬金額に思わず息を呑む。内容からして帝国からの依頼なのだろうが、随分と豪気だ。

金貨5枚あれば、1人なら少なくとも5年は遊んで暮らせるほどの金額である。まさに破格の報酬。

なるほど、傭兵達が目の色変えて相談するのも当然だった。

「というわけで、先程からこの騒動なんです。……えっと……タカオさんはどうします？」

「俺？　俺はやめとくよ」

「あ、そうなんですか。え、でも……」

俺の返答を聞くや、おかしなことにレイナは嬉しげな表情になった

り不審そうな表情になったり悲しげな表情になったりと、百面相になっていた。

レイナがあれやこれやと考えを巡らせて表情をコロコロ変えるのはよくあることなので、あえて放置。

傍目から見る分には面白い。

（まだゲオルグ先生への返事すら考えてないからな……）

３日前、《夜の森》でゲオルグ先生より帝国行きを誘われた一件。俺はそれに対してまだ答えを出していない。期限は一応あと１１日ある。必然的にこの王都サンエストルをしばらく離れることになるし、ゆっくり考えたい、と思う。

（……それにしてもこの一件、何だかきな臭い）

近頃の魔王が復活したという噂。

活性化する魔物。

伝承に謳われるところによれば、魔王復活の際は魔物が人々を大いに苦しめる。

古の時代より、魔王が降臨するとされる大陸北にある不毛の地、北方大地。

北方大地との国境近くあるとされている、帝国擁する3大砦の1つ、通称《白の要塞》。

この北方大地への最前線に、今になって集められる傭兵……。

素人考えだが、これらの符号から単純に予想されることといえば――

……

……

……

戦争？

第４話　仮勇者の家族

ゲオルグ先生より帝国行きを誘われてより、早１週間。

期限まで後１週間あるとはいえ、俺は一向に答えを出せずにいた。

あくまでも慎重に行動するべきか、それとも収穫があるかどうかはともかくとしても果敢に前に進むべきか……。

空が青い。

これは当然のように思われるかもしれないが、ここは異世界だ。
世界構造から何から異なるのだから、空の色が違っていても別段おかしくはない。

だが、幸いにしてこの異世界も元いた世界と同じように空模様が移り変わる。
雲ひとつない快晴となることもあれば、逆にどす黒い厚い雲を出して大雨を降らすこととてある。

残念なことに天気予報なんてものはこの世界にはないので、その日その日の天気への対策はいきあたりばったりとなる。

本日は小さな雲が素早く流れていくなかなかの晴天であった。

さて、ここは王都サンエストルより少し離れた小高い丘の頂上。
王都を一眸のもとに見渡せ、俺の生活拠点ホムレウスの家よりも更に丘を登った場所である。

絨毯のように敷き詰められた緑の草原。
柔らかでちくちくしたところがなく、澄み切った晴天のおかげで日

光が当たって暖かい。
そんな絶好の環境の中、俺は1人腰を下ろしていた。

本日は休日である。

ギルドは年中開かれているが、だからといって俺も年中働いているわけではない。
依頼のために働くのも傭兵の自由ならば、適当に余暇を作って休日を楽しむのも自由だ。
傭兵仕事も慣れてくるといわゆる自由業になるので、随分と気が楽である。

とはいえ、この異世界といえど生活するには当然お金がいる。
それは異世界といえど元いた世界とまったく変わらない。

ここのところの魔物の活性化の影響か、討伐依頼が多くなり、おかげで実入りも増えた。
金銭的な余裕もあるし、先の考え事もあるしで、2日程休むことにしたのである。

俺は服の胸ポケットから懐中時計を取り出すと、既に正午近くになっていることを確認した。

この世界においても時間の概念は変わらない。
さすがにデジタル時計や腕時計なんて洒落たものはないが、懐中時

計ぐらいならばあった。
まだ駆け出しの傭兵だった頃に、ゲオルグ先生より譲ってもらったものだ。

そろそろ昼食にでも……と思い立ったが、やめた。

なんだか今日は何もかも億劫だ。

腰にある剣を横手に置き、そのまま寝転ぶ。

こうして1日中空を見上げて過ごすのも、時には悪くない。

だが、そんな穏やかな時間を狙いすましたかのように、用件は舞い込んでくるもので……。

「――――お～～い、タカオ！」

極ゆるやかな勾配とはいえ、小高い丘のてっぺんだ。魔物はいないし、わざわざこんなところに寄り付く人は俺ぐらいだろうと考えて、居眠りに突入しかけたその矢先である。

俺は自分でも分かる程にうんざりした表情で、身体を起こした。

「……先生に……あれ、またどうして……」

ゆるやかな坂をゆっくりと上ってくるのは、2人。

まずは相変わらずの大男。

《夜の森》のような辛気臭い場所でなく、こういう晴天の草原が絵になる、俺の師、ゲオルグ先生だ。

本日は防具こそ装備しているが、あの巨大な長柄両刃斧は持っていないらしい。

そしてもう1人。

ゲオルグ先生ほどではないがこちらもかなりの長身の、壮年の男である。

黒を基調とした装飾の多いロングコートに、黒いズボン。そして、背中に縦に背負われている男の身の丈ほどある黒い大剣――全身黒尽くめである。

白というよりは灰色の入り混じった髪に、皺の見え隠れする柔らかな顔。目元も垂れ気味で、口元には手入れされた鼻髭があり、どこか気品がある。

すぐ傍まで歩いてきた2人。相手が相手だけに、座ったままとはいかず立ち上がる。

「やあ、久しぶりだな、タカオ君」

「お久しぶりです、アイスラー団長」

手を上げて軽い調子で挨拶してきた男に対し、俺は深く頭を下げて返した。

ヴァルゴアン王国・王立騎士団・騎士団長、ユリウス・アイスラー。服装のセンスこそ少し疑わしいが、その柔和な雰囲気からは想像できない実力を持つ、王立騎士団史上最強とも言われる男である。その優れた剣技、数々の魔法、戦略眼、さらに温厚篤実な人柄は人望を集めている。

俺はとある事情からこの騎士団長と知り合い、それがきっかけとなってゲオルグ先生とも知り合うことになった。あまり細かく聞いたことはないが、どうやら2人は個人的に親交が深いらしい。

「ほらね、言ったでしょう団長。こいつがギルドで仕事してないとしたら、家で寝ているか、丘のてっぺんにいるかのどちらかだって」

「おいおいゲオルグ。それは彼に対して失礼だろう」

まるで俺の狭い行動範囲などお見通しとばかりに話すゲオルグ先生に、アイスラー団長は諌めるように言った。

……悔しいが、ゲオルグ先生の言うことも確かだ。

「え～と、それで騎士団長がどうしてまた？　わざわざお足を運んでいただいたんです、何か特別な用事があるかと思うんですが」

「ああいや、タカオ君。君と私の仲だ、そうしゃちほこばらないでくれ。ちょっと話があるだけだよ」

「そういうことさ、タカオ。俺はただ案内しただけだから。今日も仕事で行かなきゃならん。……団長、すいませんが、俺はこれで失礼しますよ」

「手間をかけたな、ゲオルグ」

「なぁに、お安い御用ですよ」

そう言うや、ゲオルグは慌ただしい様子で丘を駆け下りていった。

「で、話というのは……？」

「うむ、実は――……少し長くなる、座ろうか」

アイスラー団長が背中の大剣を横たえるようにして置いて座り込むと、俺も隣に座り込んだ。

「――ホムレウス氏に関することだ」

「！　あの爺さんの居場所が分かったんですかッ！？」

その名前を聞くや、俺はたった今腰を落としたというのに、反射的に腰を上げそうになった。

ホムレウス・オルノアン。

俺をこの異世界に召喚した張本人。

「否、八方手を尽くしているが、居場所の特定にまでは至っていない。すまないね」

「あ、いえ……団長の手を煩わせて申し訳ありません」

「なに、あの老人は私にとっては魔法の師匠でもあるからね。突然旅に出て戻らず、音信不通というんだ。居場所が気になるのは私も同じさ」

あの爺――ホムレウスは俺をとんでもないことに巻き込んでくれた上に、わずかばかりのことしか教えてくれなかったが、それでもいくらかは与えてくれた。

その１つが、このアイスラー団長と個人的に知り合えたことだ。

わしの不肖の弟子だ、と言って紹介されたのは、この異世界に召喚されて間もない時期。
ギルドに連れて行かれ、わけもわからぬままに仕事を始める前だったか。

最初は、この人が王国の騎士団長だということは知らなかった。
あくまでも一個人として知り合い、そしてアイスラー団長も自分がどういった仕事をしているかまでは語らなかったからだ。

以来、俺はこの団長からも様々なことを教えてもらった。
独学では学び難いもの――現在の世界情勢や様々な魔法、一般常識に至るまでだ。

その過程で戦闘技術の師として、俺をゲオルグ先生とも引き合わせてくれた。
その時やっと、ゲオルグ先生から騎士団長であることを聞いて、非常に驚愕させられたものである。

俺が異世界人であり、ホムレウスの《勇者召喚》によって召喚された人間であるということも、団長は知っている。
最初は驚いた様子だったが、ホムレウスの奇天烈さは団長も重々承知していたらしい。
団長自身の人柄もあったのだろうが、奇異な目で見ることもなく、

家族同然に親身になって世話をしてくれた。
この世界のことは何一つ知らない人間の世話は赤子の世話をするようで大変だったろうと思う。事実、俺の世間知らずな行動は幾度も団長の手を煩わせた。

ちなみに、団長は数年前に妻子を失っているらしく、以来独身で暮らしてきたらしい。
息子も小さかったというから、再び息子ができたようで嬉しい、とぽつりと漏らしたことがあった。

騎士団長という職務で忙しい合間を縫って俺の面倒を見てくれた団長はまさに恩人で、感謝してもしたりない。

ホムレウスはろくでもない爺だが、団長と引き合わせてくれたことだけは感謝していた。

さて、団長の話だが、２つのことが判明したからとのことだった。

「まず１つ、《勇者召喚》のことだ。《勇者召喚》が帝国の宮廷魔術師によってのみ行われるということはもはや説明するまでもない。その儀式を、私の知る限り帝国とは何ら関係ないはずの老人がやってのけたということも、当事者の君に言うまでもないことだ。判明したというのは、《勇者召喚》が約１ヵ月後に帝国で行われるということだ」

「！　ついに……！」

その時が来るのか。言ってしまえば、正式な方法で《勇者召喚》が行われる時が。

（……その時に判明するのかもしれないな。ホムレウスに召喚された俺がなんなのか）

「今更だが、これは超極秘情報だ。《黒い牙》、と言えば分かるな？」

王国騎士団特殊任務実行部隊、通称《黒い牙》。

いわゆるスパイを専門とする特殊部隊で、その存在は極秘裏にされているが、俺はかつてその存在だけは教えられた。

「ええ、分かります。ということは、魔王復活という噂は……？」

「事実だ。現在のところ、魔王は具体的な動きを見せてはいないが、その瘴気は君も知ってのとおり魔物を活性化させている。帝国では、勇者の力で以って内々に討伐を進める腹積もりのようだが、もはや全世界的に広がる魔王復活の噂を留めることはできず、全てを公にして全世界一丸となって魔王に備えるべしとする一派もいる」

「では、先日ギルドに届けられた緊急事案は……」

「傭兵達を《白の要塞》に集めて警備させる、というやつのことだな。あれについては、まだ詳細は判明していない。これは私個人の見解だが、おそらく帝国宰相パウルの仕事だろう。あの宰相は軍と密接に繋がっているし、魔王に対しても全世界の力を結集すべしという考え方のようだからな」

「……そう、ですか」

あの緊急事案、やはりきな臭かった。

結局、サンエストル・ギルドから帝国へと発った傭兵はかなりの数にのぼった。

やはり報酬額が破格だ、多少の危険を冒す価値はあると判断した者が多かった。

王都サンエストルのギルドでこれなのだから、他の各所ギルドでも多数の傭兵が参加しているはず。

おそらく、相当数の傭兵が《白の要塞》に集結するものと考えられる。

魔王復活は事実となると、古き伝承のとおり、北方大地に魔王が降臨し、侵攻してくるだろう。

北方大地と国境を接しており、且つ地理的に最も近いのは帝国である。

そして、その最前線に位置するのが《白の要塞》。

間違いなく、傭兵の召集はこれに備えるためだ。

「これについては今後も事態を注意深く観察するしかない、というのが国王陛下の意見だ。今はそうするのが賢明だろうと、私も思う。……では、もう1つ判明したことだ。これは少し不確かなんだが……。

ドラングース王国の商業都市ベネット。最近のことだが、そこの街外れに変わった老人が1人暮らし始めたという。当初は近隣の市民に丁寧な挨拶をして回ったというが、それも数日、後は家に篭りきりで一切姿を見せないそうだ。その老人は風変わりなことに純白のローブで全身を覆い、変わった形状の杖を持っていたという」

「それって……！？」

「風の噂だ、当てにはならんが、な」

ホムレウスによく似ている。そう、団長は言いたいのだろう。

やはり、元いた世界への帰還方法を知るにはホムレウスを一度探し出すのが第一だ。

ホムレウスは魔王を倒す以外に帰還できないと言ったが、それでも詳しい話は聞かねばならない。

ちなみに、ドラングース王国とは、帝国南部の温暖な地域の国家で

ある。
年中温暖な気候に覆われ、豊かな大地を持つが、国土自体は極めて小さく、人口も少ない。
軍事力も低く、同じく弱小国家であるヴァルゴアン王国とは同盟関係を結んでいる。

（確かめてみる価値はあるかもしれない……しかし、ドラングース王国か。かなり遠いな）

「以上、２つが私が君に話したかった事だ。内容が内容だからな、このような人目のつきにくい場所に君がいてくれたのは僥倖だった。あまり参考にはならなかったかもしれないが……」

「とんでもない、非常に有益な情報です。……申し訳ありません、アイスラー団長。結局、俺は貴方に頼りきってしまっている」

「気にするな」

言うや、団長は俺の頭に優しく手を置いた。

「いくらでも頼ればいい。私と君はもう家族も同然。血の繋がりも、同じ世界に生まれたという繋がりすらないが、家族を助けるのは当然のことなのだから。私も騎士団長の職務さえなければ、もう少し君を手伝うことができるのだが……」

「ありがとう、ございます……」

その言葉だけでも俺には十分だった。深く、頭を下げる。

「だから、気にするな。……おお、そういえばゲオルグの奴から聞いたぞ。帝国行きを考えているそうだな。まだ迷っていると聞くが……」

「ええ、ですが――」

今回の話で、もう腹積もりは決まった。明日にでも、ゲオルグ先生に返事をせねばなるまい。

「それにもう1つ奴から聞いた話だが、しばらく会わないうちに随分と剣の腕を上げたそうじゃないか。ゲオルグも弟子の成長を嬉しそうにしていた。サンエストル・ギルドでもトップレベルの腕前だとな」

「いや、それはいくらなんでも先生の贔屓目のような……」

「そうか？　……ふむ」

突然、団長は大剣を携えて立ち上がった。

「どうだ、タカオ。私と剣で手合わせしてみないか。お互い仕事で次はいつ会えるのか分からない身だ。私も君の成長振りを見てみたい」

「え！？　そんな、団長と勝負だなんて……」

世界最強とも謳われる帝国の３大騎士団の団長達にも勝るとも劣らないと噂される、ユリウス・アイスラー王国騎士団長である。

俺程度の腕前で、太刀打ちできるはずがない。

「考えてみれば君とは一度も勝負したことがなかったな。いいから、１つやってみよう。それとも、私では役者が不足しているかな……？」

そう言われてしまえば、こちらとしてもやるしかない。

同様にして俺も剣を携えて立ち上がると、２人して距離を取る。

向き合ったとき、既に団長は大剣を両手持ちにして身構えていた。

俺も剣を片手に構える。

「さぁ、遠慮せずにかかってこい」

その言葉の後、団長が急激に威圧感を発し始めた。

遠慮せず、と言われても、力を抜いてかかれるような雰囲気ではない。

（結果はわかりきっているが……当たって砕けろだッ！）

第5話　仮勇者、微弱な光を発す

久しく顔を会わせていなかった、この異世界での保護者代わりともいえるアイスラー騎士団長。

有益な情報と、王国騎士団史上最強とも言われる男の実力を身をもって体感させられた翌日、俺はゲオルグ先生と会っていた。

かねてより誘われていた帝国行きの護衛任務への参加について俺は是非連れて行ってほしいと頼み込んだ。

ゲオルグ先生は快諾してくれ、俺の帝国行きは決まる。出立は1週間後である。

だが……そう、1つだけ問題があった。

金が、ない。

王都サンエストルより徒歩で半日、王都を中心にして《夜の森》のちょうど反対側に位置する、とある建物。
小高い山々にそろそろ差し掛かる手前に、その建物はあった。
古にうち捨てられ、もはや廃墟同然となってしまった建物――通称《知性の塔》である。
気の遠くなるほどの遥か古代、この塔の頂上部には絶大なる力を持

った賢者が住んでいたという。
この賢者は人々の生活に役立つ様々なモノを与え、大変感謝されていた。
しかしこの賢者、矛盾したことに大変な人間嫌いでもあり、人前に姿を現すことは滅多になかった。
極一部の親しい子供達だけが賢者に会うことができたとされ、その子供達が賢者から与えられ、塔から持ち帰った様々なモノが、人々の間に広まっていったらしい。

このモノが何なのかは、現在では判然としない。
当時の人々の誰もが考えつかなかった道具とも、魔法とも、あるいは考え方とも言われている。

いずれにせよ、勇者の伝承や言い伝えと同系列の、一種の御伽噺なのであるが、この話から《知性の塔》と呼ばれているようだ。

この石造りの塔は、元いた世界の感覚でいえば、１０階建てのビルに相当するほどの大きさであり、その威容は王都サンエストルからも遠目ながらでも見えるほどである。

一度王国の騎士団が立ち入ったことがあるが、目ぼしい物は見当たらず、魔物すらいない寂しげな廃墟だったという……。

そんな《知性の塔》に、俺は1人の傭兵仲間と訪れていた。

「なぁるほど、それで路銀稼ぎが必要になったってわけかい。何ならオレがまとまった金を貸してやろうか？」

「遠慮しておく。後が怖い」

異世界であれ、元いた世界であれ、何をするにもお金がいるのは変わりはない。
悪貨1枚でも、元の世界で言えば1円玉1つでもなければ、何一つとして買えない。

そして、多少の例外はあるだろうが、基本的にお金というものは労働という対価なしには得られない。

俺達傭兵で言えば、ギルドで仕事をこなすことである。

「しかし、情けない奴だぁね。旅に必要なのは、勇気や冒険心、使命感なんて安っぽいものじゃない。――金なんだぜ？」

「……」

あまりにも身も蓋もない言い方に一瞬呆気にとられたが、俺達傭兵にとってはある意味で真実である。

この異世界に来て依頼、王都以外の国へ長旅をしたことのなかった

俺は、そこを見落としていたのだ。

すなわち、ギルドで請け負った仕事をする間の諸々の経費――例えば、宿代や回復薬などの常備品の購入費。

それらは基本的に全て持ち出し、自腹ということだ。

依頼従事中に発生すると思われる経費は成功報酬に上乗せされている。つまり、精算できるのは達成後だ。この上乗せ部分はギルドが負担することもあれば、依頼者が負担することもある。

いずれにせよ、このことも検討しつつ、傭兵は仕事を選ばなければならない。

苦労して依頼を達成しても、結局足が出てしまったでは目も当てられない。それは傭兵として一人前とはいえない。

このことは、とりわけ国境を越えるような長距離を移動する護衛任務などで問題となる。

俺にはその視点が欠けていたと、悔しいが認めざるをえない。

俺がこれまで受けてきた依頼など、大抵が1日で終わり、長くかかっても3日以内がそこそこ、宿代などの経費がかかることなど滅多になかったからだ。

翻って、1週間後の帝国への旅、それには当然金が必要になる。

別に金がないというわけではないのだ。我ながら、十分な資金の蓄

えがあると思っている。
ただ、それはあくまでも王都サンエストルで、金のかからぬホムレウスの家で暮らしていくに当たっては、の話である。
帝国へ旅するための諸々の路銀――それを考慮すると、若干、心許なかった。

だから、この傭兵仲間――ハンス・アグリールに好き勝手に語られても、俺は反論の術を持たない。

「ったく、どうとでも言え。どうせ俺は世間知らずだ」
「おいおい、むくれるなよ。何も馬鹿にしているわけじゃない。長旅を何度も経験しているこのオレが、親切にも旅の心得を教えてやろうっていうんだぜ？　感謝されこそすれってやつさ、これは」

肩を竦めるハンスに、俺は若干憤然としながら廃墟となった塔へと足を踏み入れていた。

ハンス・アグリール。俺と同じサンエストル・ギルドの傭兵であり、ランクはC。
おさまりの悪いくせ毛の茶髪に、ひょろひょろとした痩せぎすの身体の、俺と同年代の魔法使いである。
まさに魔法使いとも言うべき杖を持ち、しかしながら頭髪と同色の

皮のローブは、若干俺のイメージしていた魔法使いとは異なっている。

こいつとは、ギルドの任務で幾度も組んだことがあった。口は悪いが、その魔法の腕前は攻撃・補助系統両方を器用に使ってみせる。

「《知性の塔》か……しかし、寂しい場所だぁね」

「これだけ荒れ果てた場所なら、確かに魔物ぐらい住みつくかもしれないな」

帝国行きまで後1週間足らず、どうやって短期間で十分な路銀を用意するか――ということで俺が選んだのが、《知性の塔》に住みついたという魔物の討伐であった。

この荒れ果てた廃墟に最近になって正体不明の魔物が居ついてしまった、伝説の賢者が住んだ塔を魔物に踏み荒らされるのは忍びないので退治してほしい、そういう依頼である。

この依頼、実は既に別の傭兵が請け負っていたのだが、どうやら返り討ちにあってしまったようで、満身創痍の様相で王都に逃げ帰ってきた。

この傭兵が、これまたそれなりの実力を持つランクBの傭兵だっということもあり、ギルドも事態を重くてみてギルド負担で報酬を引き上げた。

一気に跳ね上がった報酬。そこに、いち早く話を聞きつけた俺が食いつき、更に2番手のハンスが食らいついたというわけだ。

1人では多少心許なかったので、報酬が頭割りになるとはいえ、心安い仲間が協力してくれることは有難かった。

「頂上手前で、巨人に襲われた、ってかぁ？　夢でも見てたんじゃねぇのかね、返り討ちにされたって馬鹿は」

――――心安いが、やはり口が悪いのがいただけない。

《知性の塔》は見た目こそ廃墟であったが、内部はそれほど寂れていなかった。

建物の形状が円柱のため、それぞれのフロアは円状になっており、端に上階へと上る石造りの階段が壁に沿って据え付けられている。あるのは石ころや崩れた外壁くらいで、本当に魔物なんているのか、と疑わしい思いを徐々に深めつつ、2階、3階へと上っていく。

変化があったのは、４階からだった。正確には、５階へと続く階段にさしかかってから。

階段の上、５階から何かの気配を感じる。

「……こりゃあ、魔物か？　まだ頂上はずっと上だと思うんだがな」

言いつつ、杖を構えるように身体の前に持ってくるハンスに習うように、俺も腰の剣に手を携えた。

俺が先導し、警戒しつつ階段を上る。

静かに5階のフロアが覗き込むと、すぐにその気配の正体は知れた。

数段下にいるハンスに合図し、５階フロアを見てみるように伝える。

俺の横手からフロアを覗いたハンスは、あからさまに落胆したような表情で溜息を吐く。

「なんだよ、トカゲ野郎か」

そこでは、数匹のトカゲ人間がまるで夢遊病者のようにフロアを歩

き回っていた。
トカゲが人間に進化すればこうなるのではないかと思われる形状に、しかしながら人間とはあまりにかけ離れたその緑の鱗で覆われた身体。
知性など存在しないと考えられるも、どこから調達したの短い剣や石斧など武器を持つトカゲ、リザードマンだ。
やはり肉食であり、人間と見ればその肉を食らわんと襲い掛かってくる獰猛な魔物である。

「――2、3……はん、6匹か。巨人が出てくるまでの肩慣らしだ」

ああ、と一言応答すると、俺は跳ねるようにして5階フロアへ飛び出した。
石造りの床ゆえに響いた足音に、リザードマンの視線が一斉に集まり、意味不明な野生の唸り声を上げるや、牙を剥く。

「速攻で片付けるぞ、ハンス」

返事を聞くよりも先に、俺は床を蹴って手近のリザードマンへと疾走していた。素早く剣を抜く。
そのリザードマンは得物の石斧を構えて上段に振り上げるが、遅い。

駆け抜けざまに、胴体を横に剣を奔らせる。
一瞬後には、不気味な緑色の液体を切り口から噴出させたリザードマンが胴から2つに分かれていた。

仲間を殺された事に憤激したか、リザードマン2匹が両側から、片や短剣を、片や硬い棍棒を手に猛然と襲い掛かってくる。
回避して身をかわせば、どちらか片方に追撃される。

まず、棍棒を持つ方だ。
突進しながら振り下ろされる棍棒を半身になって避けると、その棍棒は石床に激突してへし折れた。
なんとも空恐ろしい威力、直撃していれば頭など粉々にされるだろう。

おそらく避けられるとは考えてもいなかったのだろう、一瞬硬直してしまったリザードマンに、俺は横手から渾身の力を込めて蹴り入れた。
棍棒がへし折れ、余った力に脱力した腕を襲った衝撃に、リザードマンは奇声を上げ、大きくバランスを崩して床に転がる。
蹴りを放った足が着地した瞬間、横手に映るのは短剣を突き入れる

ようにしてくる、もう片方のリザードマン。

だが、生憎と遅い。

すくい上げる様にして剣を斬り上げ、天井に放り投げる勢いで一挙に振りぬく。

放り投げられたのは、リザードマンの腕の方――短剣を持った腕が宙を舞った。

肘から先を失ったリザードマンが悲鳴を上げ、斬り口から滝のように流れ落ちる緑色の液体を逃がすまいと押さえつける。

斬りおとされた腕がようやく床に落下してくる前に、追撃。

振り上げていた体勢のままに両手持ちにし、今度は逆に剣をやや斜めに上段から斬りつける。

狙ったのは首筋。

一瞬後には、剣先にやや鈍い感触が訪れたが、力任せにそのまま剣を走らせる。

振り切ると、リザードマンの首がぼとりと床に落ちていた。

胴体から緑の液体をさながら噴水の如く盛大に噴出し、身体が後ろ

へと崩れるのに合わせて首がぼとりと床に落ちる。

今度は先程蹴り飛ばした方だ。

振り向くと、既に体勢を立て直したリザードマンが憤激に身を震わせて、開いた大口から牙を覗かせて突進してくる。

だが――

「《フレイムランス》」

その声が耳に届くや、リザードマンの身体――顔、首筋、胴から炎が突き出た。

しかしながら、その炎は固形物のように蠢くことなく、先端には槍の穂先。

リザードマンはもはや声にならぬ呻きを発している、自分に何が起こったのか、このトカゲに理性があるとすればそう考えただろう。

だが、もう遅い。絶命の時だ。

先程まで固まっていたはずの炎の槍の先端が急に溶解するように蠢くと、数瞬後にはそれは正しく炎となった。

リザードマンの鱗に包まれた身体を、一気に炎で覆いつくす。
猛烈な炎の勢い、肉を焼く嫌な臭いが漂い始め、俺がわずかに顔を顰めた頃には、リザードマンは黒焦げになって崩れ落ちた。

見渡せば、残り3匹いたはずのリザードマンも所々で同様に黒焦げになっている。

そして、その中心にいるのは、杖の先端に炎を灯らせているハンス・アグレール。

《フレイムランス》。

炎の槍を任意の数で発射し、魔物を貫き、その後に内部から身体を焼き尽くす魔法である。ハンスの得意とする攻撃魔法だ。

「すまんな、アサクラ。獲物を取っちまったか？」

「いや……いい。今回はリザードマンの討伐が目的じゃないからな」

殊勝な様子で詫びるハンスに、俺は苦笑いしつつ剣を鞘に納めた。
そうか、と言ってハンスも杖の炎を消す。

口の悪いハンスだが、戦闘となれば違う。少しでも仲間が危ないと見えるや、時に前に出て援護してくれる。

こういうところがあるから、俺はハンスを信頼していた。

「……しっかし、どういうつもりなんだ、このトカゲ野郎どもは。なんだってこんな廃墟に群れてるんだろうなぁ？」

「分からない。餌があるようにも思えないんだが、な」

若干、腑に落ちないものを感じつつ、俺たちは塔の上階――6階への階段を上った。

別段、魔物の気配はないが、警戒しつつ6階フロアに入ると、今度は何かおかしなものに遭遇することとなった。

「なんだ……？」

横でハンスが唖然として声を上げる。

フロアの中心、そこに甲冑が鎮座していた。
さながら王国騎士団が装備していそうな、銀色のフルプレートアーマー。決して珍しい形状のものではない。

問題なのは、まずその大きさだ。
片膝をついた体勢だというのに、それでも2メートル程の高さがある。これが立ち上がれば、おそらく3メートルを超えるだろう。
通常の人間が装備するにしては、あまりにも規格外の大きさだ

そして、もう1つ――明らかに魔物特有の嫌な雰囲気が漂ってくるということ。

しかし、これは明らかに唯の甲冑だ。こんな魔物が存在するなんて話は聞いたことが……？

ハンスも同様らしく、全身甲冑を注意深く眺めながら、ゆっくりと近づいていく。

だが――

「おい、こいつ……動くぞ……！？」

ゆっくりと、本当にゆっくりと立ち上がる全身甲冑。背中の赤いマントが靡き、ガチャガチャと奇怪な音がフロアに響く。

やはり、でかい。3メートルを優に超えている。

フルフェイスの兜は、わずかに目の部分だけが空いていたが、そこは暗闇で何も覗けない。

だが、分かる。コイツは間違いなく――魔物だ！

同じ結論に達したか、俺が剣を抜くと同時にハンスが後退すると杖に炎を灯し、戦闘態勢に突入する。

「なぁるほど、巨人ってのはコイツのこと……！　気をつけろ、アサクラ！　どんな能力を持っているか分からんぜ、コイツはッ！」

巨人が足を踏み出すのと、ハンスが《フレイムランス》を発射するのはほぼ同時だった。

杖から生じた3本の炎槍、それが凄まじい速度で巨人に向かっていく。

見かけからして鈍重と考えられるこの巨人だから、まず間違いなく

直撃する。

しかし――

――ブンッ！

巨人が腕を振るって――！？

「なんだとッ！？　炎が――ッ！」

巨人がその甲冑と同質の籠手で覆われた腕を横薙ぎに素早く振るうと、一瞬で炎槍は始めから何もなかったかのように消滅する。

――力任せにかき消したのか！？　それに今の動きは――！

「散れ、ハンス！　コイツ、思ったよりも素早――！！」

ドン、という地響きとともに巨人が床を蹴った。その巨体からは想

像もつかないスピードでまっすぐに突進してくる！

反射的に俺は横合いに跳んで、投げ出すようにして巨人の直線上から身体をそらした。

背後を見れば、ハンスも魔法使いにしては素早い動きで同じように動いている。

俺の半身以上はある拳を巨人が振りぬき、そのまま壁に激突。轟音を上げて壁が破壊されて風穴が空く。

「おいおい、冗談じゃねぇぞ、こいつは！」

あんな拳、まともに食らえば骨折どころじゃすまない。最悪、身体がバラバラになる！

「ハンス、とにかく動いて他の魔法を試せ！　俺が牽制する！」

「わ、分かった！」

巨人が拳を振り抜いた体勢から立ち直るよりも早く、俺は反撃に転じていた。

危険を承知で巨人に接近し、背後から腰部分に剣を突き入れる。

しかし――硬い！　切っ先が弾かれる！

生半可な攻撃では、こんな安物の剣では鎧を貫けない。
そのうちに巨人が素早い動きで反転、至近で見るともはや頭が見えない。

巨人はまるでサッカーボールでも蹴るかのように、爪先を振り上げてくる。
だが、俺にとってはそれは大槌で打たれるのも同然、必死の思いで後ろに身体を投げ出す。

「――ぐぅッ！」

できたのは少しでも後ろに飛び跳ねること。

その直後、胴体を強烈な衝撃が襲い、俺はまさにボールのように蹴り飛ばされた。
宙を飛んでいる感覚とともに、塔の壁に激突する。肩口から襲う強烈な衝撃と激痛に俺は声を上げることすらできず、そのまま床に落ちた。

「くそったれがッ！　《ライトニングスモッグ》！

片膝をつき肩口を押さえてなおも激痛に耐える俺の耳に、ハンスが魔法を唱える声が届く。

なんとか頭を上げると、ハンスの方を向いている巨人が大きな薄黒い球体に包まれていた。

あれが雷雲だ――そして――！

薄黒い球体内部が放電し始める。バチバチと静電気のような音が断続的に発生し、青白い線が球体の中を縦横無尽に駆け巡る！

《ライトニングスモッグ》。

擬似的な雷雲で包み込み、本物に比べたら威力は格段に小さいが、雷で魔物を討つ魔法である。

全身甲冑が金属なら伝導するのが道理。やはり雷は効果があるのか、巨人の甲冑が震える。

やがて薄黒い球体が消えると、巨人が脱力したように片膝をついた。

さすがに雷は効果が――いやッ！！？

「これはさすがに効いた、かよ……？」

「逃げろ！」

「――なに！？」

駄目だ、遅い！

巨人は脱力したのは演技だったかのような俊敏な動きで身体を起こすと、ハンスに向かって突進した。

腕を下から振り上げるアッパー。拳はまっすぐにハンスを捉えていた。

ようやく体勢を立て直したばかりのハンスにそれを避けることはできなかった。咄嗟に両腕で身体を庇うが――！

「ガッ……！？」

刹那、ハンスの身体はまるで先程の俺のように宙を舞っていた。
壁に激突する前に地面に落下し、ボールが弾むように何度もバウンドして転がり、やがて停止する。

――まずい！　今の食らい方は――！！？

ハンスの身体は床に転がったままピクリとも動かなかった。最悪の結末が脳裏に去来する。

しかし、その思考すら巨人は許してくれない。

トドメだと言わんばかりに、巨人はゆっくりと転がるハンスに接近していく。

瞬間、頭が真っ白になる。

一切の逡巡もなく、俺は力強く剣を握って駆け出していた。

――後にして思えば、この時、俺は反対方向へと、下階へと通じる階段に向かうこともできたはずだ。

――退却。それができない状況だったわけじゃない。

――極めて利己的だが、ハンス・アグリールを見殺しにして、自分だけは逃げ出す。そういう選択肢もあったはずだ。

――何故ならば、俺はここで死ぬわけにはいかなかった。何をおいても、元の世界に帰らなければならなかったから。

――こんな異世界で、玉砕するわけにはいかない。

――だが……。

俺は飛び掛るように巨人に接近し、腕めがけて斬りつけた。

弾かれることは分かりきっているのに、それでも直感的に行動してしまった俺は自身の動作を止めることができず、突っ込んでいた。

「……え？」

やがて、俺は自らの行動とその結果に疑問の声を上げることとなっ

た。

俺は剣を振り抜き――そして、巨人の甲冑には明らかな斬撃の痕がついていたのだ。

そして、剣は何か白い光で包まれていて――。

茫然としている暇はない。

巨人は傷をつけられたことに脅威を感じたか、即座に反転して俺目掛けて拳を振り上げてくる。

――斬れる！

それは何の根拠もない、しかし絶対の確信。

猛然と襲い掛かる巨大な拳に、俺は体勢をずらしつつ、白光に包まれている剣をそのまま正面からぶつける。

今度は間違いない、剣は正面から激突した拳を見事に切り裂き、肘先まで走った。

瞬間、今まで無言だった巨人が野太い唸り声を上げる。

しかし、その特徴的な唸り声は度々聞いたことのあるもので――！

「「トロルだッ！！」」

俺の声と、ハンスの声が重なる。

一瞬だけそちらに視線を向ければ、床に片手をつきながらも、起き上がっているハンスの姿があった。

であれば、やるべきことは１つ！

「頼む、ハンス！」

「了解だ！」

何をするのか――までは必要などない。巨人の中身がトロルであれば、やることは決まっている。

片腕を押さえて悶絶しているようにも見える巨人は動きが止まっている。

そのだらしなく垂れ下がっている腕を足場に、頭部目掛けて跳び上がる。

横薙ぎの一閃は巨人頭部の兜を刎ね飛ばす。

そして、現れたのは予想通りの顔。

暗い青色の体皮に、飛び出てくるような大きな一つ目。首はなく、身体から出っ張りのように生えている頭だ。

顔にあるのはその一つ目と小さな口だけという醜悪な魔物、トロル。

「《フレイムランス》！」

俺が着地するよりも先に、間髪入れずハンスの魔法が発動する。今度は3本ではない、1本だけだが極太の炎の槍。

発射された炎槍は猛スピードでトロルの頭――その大きな一つ目を刺し貫いた。

トロルがつんのめるようによろめき、そして声にならない悲鳴を上げる。

すぐに炎槍は融解し、正しく炎へと化した。

トロルの頭で炎が燃え上がり、そしてその炎は上半身から全身へと伝播しているようだった。

あちらこちの甲冑のほんのわずかな隙間から、わずかに炎の先が覗く。

「……手間ぁかけさせるんじゃねぇよ、木偶の坊め」

やがて、俺の目の前で巨人は倒れた。

後に残るのは、内側から発生した炎程度ではびくともしない甲冑と、先程よりも酷い肉の焼ける臭いだった。

「はあぁぁぁ……やばかったな。咄嗟に《身体強化》を使ってなけりゃ死んでたぜ、これは」

よろよろと立ち上がるハンスに、俺は冷や冷やさせるなとだけ言っておいた。

《身体強化》。

文字通り、身体への外部的な衝撃を緩和する補助魔法である。
どこにそんな暇があったのか、あの巨人に殴られる瞬間に、そんな魔法を使っていたらしい。

足元の巨人の甲冑を眺めながら、剣を鞘に納める。

「しっかし、蓋を開けて見ればまさかトロルたぁね。道理で《ライトニングスモッグ》が効果がないはずだ。この一つ目入道は雷には強いからな」

「ああ。……ったく、どこからこんな上等なアーマーを手に入れたんだか」

トロルが鎧を装備するなんて聞いたことがないし、ましてこんな明らかに通常の人間には規格外の鎧をどうやって調達したのか。

疑問はあったが、答えてくれる者はいそうにない。

「それにしても、だ。どうしたんだよアサクラ！　まさかこの鎧をぶった斬るとは恐れ入ったぜ！　どういう魔法だい？」

「……実は俺にもよく分からん」

巨人が倒れた後、剣に発生していた白光はすぐに消えていた。

突如として発生し、消えるときも突然だった、甲冑を易々と切り裂くほどの力を安物の剣に与えた白い光。

ハンスは頻りに「そんな魔法は聞いたことがない、何の力だ」と聞いてくるが、自分でも分からないのだからどうしようもなかった。

「ったく……まぁいいさ。無事に倒せたんだからよしとしよう、依頼達成だ。暫く休憩してから帰ろうぜ」

《身体強化》を使ったとはいえ、やはり巨人に殴られた跡が響くのか、回復魔法を使っているハンスを尻目に、俺はもう1つ上の階へと足を進めていた。

どうやら6階が最上階らしく、せっかく《知性の塔》に登ったのだ、何か珍しいものでもないかという、単なる好奇心からである。

6階フロアに入ると、5階までは何もなかったはずのフロアに変化が現れていた。

「なんだ……？　本棚か？」

フロアを埋めつくすような本棚だ。これが規則的に並んでいるのではなく、てんでバラバラの向きで縦横無尽に置いてある。

横倒しに倒れているものもあった。

しかし、中身がない。ザッと本棚が散らかるフロアを歩いてみるが、あるのは棚だけで肝心の本はない。

伝承にいう賢者が、この塔を去るときに持ち去ったか、あるいは長い年月の間に何者かに持ち出されたのだろうか。

ふぅ、とそれほど期待していたわけではないが、あまり大したもの

がなかったことに溜息1つ。

さっさと帰るかと、階段へと足を進めようとした、その時だった。

横倒しに倒れた本棚に押しつぶされるようにしてのぞく、小さな紙切れを発見したのは。

小さく書かれている文字に目を凝らし――――！

「なッ！！？」

俺は本棚を蹴飛ばすようにして押し退け、その小さな紙切れを手に取った。

かなり古いものなのか黄ばんで汚れており、若干読み取れない部分こそあるが、はっきりと読むことが出来た。

そこに書かれていたのは――――

「《勇者召喚》。大いなる光の力を持つ……を、異世界より召喚する……魔法。

魔王に対抗……に、オーラキア帝国……より創り出された」

若干不鮮明だが、《勇者召喚》のこと。

別に、それだけなら大して驚くべきものじゃない。

問題なのは、これが――――

「なんで……ここで……！」

間違うことなき、元いた世界の言語――日本語で書かれているということだ。

ＥＸ０１　勇者の鼓動（前書き）

今回は外伝というか、なんというか……短めです。

ＥＸ０１　勇者の鼓動

それにしても、毎度のこととはいえ心苦しいことこの上ない。
俺にこんな役回りをふってくれたアイツには、恨み言の１つでも言ってやらなければ気がすまなかった。

「……まだ見つからないのね、朝倉君」

「響子さん……」

多くの生徒から羨望や好意を向けられる明るく爽やかな人気者の姿はどこへやら、今村響子は見るからに肩を落としていた。
その傍で、彼女より頭１つ分ほど身長で劣る英嶋美里が心配そうに様子を窺っている。

昼休みの学校の屋上、我が校の男子生徒の中でも人気のある2人の美少女が共に悲しげな表情をしている。

そのすぐ傍に立つ俺としては、どうにも気まずかった。

我が高校の3年生で俺のクラスメイト、朝倉隆雄が突如として行方不明になってしまったのは、まだほんの2週間前のことである。

2週間前の月曜日、早朝。

自室で寝ているはずの朝倉隆雄の姿が見当たらないことに、まず最初に気づいたのは彼の母親だった。

休み明けのこと、遅刻するギリギリの間際の時間まで寝ているつもりなのだろうと彼の部屋まで起こしに行って、発見したのである。

何もかもが前日の通りの部屋の中で、息子の姿だけがぽっかりと無くなっているのを。

ひょっとして息子は無断で友人の家にでも外泊しているのではないか、最初はそう思ったらしい。

だが、携帯電話や財布といった貴重品が机の上にそのままにされていることを発見してしまい、いよいよ母親は事態がおかしいことに

気づいたらしい。

警察へ捜索願いが出されたのは、その翌日になってからのことだった。

それからは、いろいろあった。

本当にいろいろありすぎて、事態は目まぐるしく変化し、そして今となっては———停滞してしまっている。

あいつは突然、文字通り姿を消してしまった。古風な言い方をすれば、神隠しとでも言うべきなのだろうか。

俺の名前は、上野雄介。

同級生で、親友という表現が正しいのかどうかは分からないが、隆雄とは中学生の頃からの付き合いである。

そして、俺の目の前で今にも泣き出しそうな顔をしている今村響子は、隆雄とは幼馴染の関係にあたる。家も隣同士なのだそうだ。

整った顔立ちと吸い込まれそうな黒瞳、腰まで届きそうな長い黒髪は流れるように艶やかである。可憐、その一言で形容するには十分だ。

隆雄と今村響子がどういう関係にあるのか――否、どういう関係にあったかは、明白である。

当人達に聞けばただの友達であると答えるが、毎日一緒に登下校し、休日も頻繁に会って、時には一緒に出掛けているというのだから、分かりやすいというほかない。

ただ単にその内にある思いを互いに言葉にしていないだけ。友達以上、恋人未満、そういう言葉がよく似合う。まったく、じれったくて仕方のない2人――だった。

そんな2人の片方が突如として失踪した。行方はいまだ杳として掴めていない。

今村は人前でこそ気丈に振舞っているようだが、俺や英嶋美里のような極親しい間柄にある人間の前では、明らかに不安と悲愴に苛まれている様子が手に取るように分かった。

「元気出してください、響子さん……。きっと、すぐに見つかりますよ」

現状では、どう言いつくろっても気休めにしかならない言葉を、英

嶋美里が口にする。

柔らかな黒髪を肩口あたりで切り揃え、同年代に比べて小柄な彼女は、今村響子の仲の良い女友達である。今村とは同学年ながら、頻繁に彼女の傍をちょこちょことついてまわるその姿はまるで彼女の妹のようだった。

しかし、そんな彼女の気休めでも、今村はその痛々しい表情を変化させることはない。

こんな美人の彼女を悲しませるとは、どうしようもない馬鹿野郎だ。

まったく、隆雄のやつめ……。

――この時の俺たちは考えもしていなかったのだ。

――隆雄が、俺たちの想像を遥かに超える、とんでもない事態に巻き込まれていたことを。

――そして、俺たちもまたそのとんでもない事態に足を踏み込んでしまうということを……。

第6話　『とんでもないこと』に遭遇する仮勇者

先日の《知性の塔》での魔物討伐の一件。

苦労しただけのことはあり、その報酬は実に十分なものだった。これにより、帝国へ向かうにあたって必要となると予測される路銀は手に入れることが出来たわけだが……。

収穫はそれだけではない。

《知性の塔》頂上部で発見したあの紙切れ。

結局、あの後、紙切れは隠すようにして、ハンス・アグリールにも何も言わずに持ち帰った。

この異世界ではありえないはずの、日本語で書かれた文書は、いったい何なのか。

まさか、俺の他にもこの異世界に召喚された人間が……日本人がいるというのだろうか？

運ばれてきた果実酒を、ゲオルグ先生は勢いよく喉へと流し込んだ。まったく、俺の感覚からすれば、昼間から酒をくらうというのは不健康なような気もするのだが……。

「いよいよ、明日だな」

感慨深げに、しかしどこかひっかかるような物言いで言うと、ゲオルグ先生は中身が半分以上は減っているグラスをテーブルに置いた。

王都サンエストルを南北に貫く大通り。この通りから少し離れた路地裏の一角に、この薄暗い酒場はあった。狭く汚い酒場ながら、雰囲気だけは中々のものであり、むしろ怪しげな雰囲気さえ立ち込めている。

それでも、客は多かった。どいつもこいつも、少しばかり正規の道を外れた連中ばかりに見えるのは気のせいか。

そんな場所で、俺とゲオルグ先生は明日からの帝国への護衛任務の打ち合わせをすることとしていた。

ひとまず、一般的な帝国への行程はこうだ。

王都サンエストルを出立、1週間弱ほど馬車を走らせ、交易の盛んな港街ガルトを経由、ターミナルの街ノヴァンへと向かう。ここからは蒸気機関車で、オーラキア帝国との国境を越え、帝国の誇る三大砦《蒼の要塞》へと向かう。ここまでくれば、後は帝都オーケル

ンは目と鼻の先である。

所要時間としては、約2週間といったところか。

「護衛は俺とお前だけだ。最近、どうにも物騒だからな、依頼主ももう少し護衛を増やしたらどうかと報酬を張り込んでくれたんだが、俺としては少数精鋭の方がいい。その点、お前の実力なら信用できる。聞いたぜ、先日の《知性の塔》での一件」

「あれは……ハンスがいてくれたからだ。俺1人だったら危なかった」

ゲオルグ先生は邪気のない笑顔で嬉しげに語るが、俺にとってはあれは怪我の功名である。

《知性の塔》のあの甲冑を装ったトロル。ハンス・アグリールの援護がなかったら、仮に1人で対峙していたとしたら、どうなっていたか分かったものではない。最悪、殺されていたかもしれないと思う。勝てたのは、多分に運によるところが大きい。

剣から迸った、あの白光のおかげなのだから。

あれが何だったのかは今もって分かっていない。ハンスもあんな魔法は見たことも聞いたこともないというから、何か特別な魔法なのだろうか……。

ひょっとして、これが勇者の力ってやつか――と、一度脳裏に過ぎ

ったが、すぐに振り払った。そもそも、俺が本当に勇者かどうかなんて分かりはしないのだから。

「それでも大したもんさ。お前はもうランクCをとっくに超越してる。ランクB昇格認定試験の声がかからないのがおかしいぐらいだ。ったく、弟子にランクで抜かれそうだな」

「それよりも……そろそろ、教えてくれてもいいんじゃないですか？　護衛対象のこと」

「ん、ああ……そうだなぁ」

どこかすっとぼけた口調で、ゲオルグ先生は再びグラスを傾けた。

それなりの付き合いだ、ゲオルグ先生が酒に関してはうわばみなので少々の酒で酔っ払うことがないのは承知しているが、少し情けない姿である。

「これが、実はちょっと問題があるんだ」

ゲオルグ先生は苦々しい表情から、少しずつ険しい表情へと変化していく。

これは、今回の護衛相手。一癖ありそうな感じだ。……しかし、見

縊らないでほしい。

「護衛対象に問題があるのは、珍しいことじゃないでしょうに」

一癖も二癖もあるような依頼主の護衛任務にあたったことは、これまでにも何度かある。別段、心配されるようなことはないと思うんだが。

「まあ、そうなんだが……ええい、くそ！　やっぱり、駄目だ！　すまん、タカオ！　今回の話、なかったことにしてもらえないか！？」

「！？」

言うや、ゲオルグ先生はテーブルに頭を打ち付けんばかりに深々と頭を下げた。酒場にいる他の客たちも何事かと視線を俺達に向ける。

「申し訳なかった、俺がすべて悪いんだ！……事態が急変しちまった。やはり、こんなことにお前を巻き込むわけにはいかん！」

頭を下げたまま話すゲオルグ先生の声は必死だった。

「……理由ぐらい聞かせてもらいます。せっかく苦労して路銀だって稼いだんだ。この土壇場でキャンセルじゃあ、苦労した意味がない」

「あ、ああ。実は――！」

「ッ！？」

俺達は、ほぼ同時に椅子を蹴飛ばすようにして立ち上がっていた。

その刹那、ばたん、と酒場の扉が乱暴に開けられる音が横手から聞こえてき、横目に何者かが飛び込んでくるのが見えた。

直感的に危険な臭いを感じ取っていた俺は、腰に提げていた剣の柄に手を掛ける。ふと見れば、ゲオルグ先生も壁に立てかけるようにして置いていた長柄両刃斧を手に取っていた。

初めに飛び込んできたのは、いかにも怪しいですと言わんばかりの黒装束に、小剣を逆手に構えた男だ。続けて、数人が同様の出で立ちで酒場に踏み込んでくる。

尋常でない事態だが、考えている暇はない。反射的に俺は剣を抜き放っていた。

先頭にいた黒装束が、素早い動きで飛び掛ってくる。だが、見えな

い動きじゃない。俺は半身を捻って逆に相手に向かって踏み込むと、相手の肩口を斬り裂いた。赤い血が噴出し、服が汚れる。

（くそ……相変わらず嫌な感触だ）

あまりにも突然の事態に呆けていた酒場の他の客達は、薄暗い酒場に鮮血が舞ったのを目撃して、ようやく我を取り戻した。

「う、うわ――ッ！！」

誰の声が引き金になってか、酒場の中は一気にパニックになる。出口へと、窓へと、カウンターの奥へと客達が殺到する。

怒号と混乱が店内を覆う中、仲間1人がやられても何ら反応を示さない黒装束が、低い姿勢でゲオルグ先生へと突進する。手にした小剣――出で立ちから考えれば、短刀というべきか――が鈍く輝く。

だが、黒装束も相手が悪い。

ゲオルグ先生は長柄斧を構えようともせず、黒装束の接近を許すと、空いた手の一振りで短刀を捌いてみせた。獲物を打ち払われ、一瞬停滞した黒装束に対し、容赦なく拳を突き入れる。ぼき、という音は骨が砕かれた音か。

痛みに悶絶したか、転がるように床に倒れた黒装束に対し、しかしゲオルグ先生は容赦がない。ようやく長柄斧を動かしたと見るや、

その柄を勢いよく振り下ろし、黒装束の背中を強打した。もはや反応すらできないか、その黒装束は動かなくなった。

「ッ！」

おっと、余所見をしている場合ではない。いつのまに投げつけたか、目前まで迫っていた短刀を剣で叩きおとす。切っ先は俺にではなく、酒場の床に突き刺さった。

黒装束は残り2人。しかし、この2人は襲撃が失敗したと悟ったか、身を翻して酒場から出て行った。

――逃がすか！

「待て、タカオ！　追わなくていいっ！」

剣片手に駆け出そうとした俺を、ゲオルグ先生が呼び止める。何故、と聞く暇はなかった。外から奇妙な呻き声が2つ、聞こえてきたからだ。

やがて、酒場の入り口にのっそりと長身の男が現れる。

「あ～……とりあえず、これでよかったかな？」

「アイスラー騎士団長！」

長身の男――ユリウス・アイスラー騎士団長は、両側の後ろ手にあの黒装束達を2人引きずっていた。どうやら、一瞬の間に気絶させたらしい。王国騎士団史上最強と謳われる騎士のその早業は、まったく恐るべきものであった。

その後、アイスラー団長が王国治安隊を手配し、気絶もしくは虫の息の状態の黒装束達を連行していった。

俺たちは店主すら逃げ出してしまった酒場の店内で、とりあえず椅子に座って話していた。

「出待ちですか、団長？　随分とタイミングがいい時に来てくれるじゃありませんか」

「おいおい、ゲオルグ。お前の馴染みだという酒場に来た途端、あんなあからさまに怪しい連中に出会った私の身にもなれ」

苦笑気味に応じる団長。

聞けば、明日王都を出立すると聞いて、俺を捜していたのだそうだ。

……どういうルートで聞いたんだ？　まぁいいけど。

「それよりも、です。ゲオルグ先生、さっきの連中は何です？」

「あ、ああ。すまん、タカオ。やっぱり、お前には早々に説明しておくべきだった」

ゲオルグ先生は今度こそばつの悪そうに、申し訳なさそうな表情で頭を下げる。

……ということは、まさか今回の依頼絡みか？

「ゲオルグ。まさか、お前……」

「……団長、すいません。そこの床に突き刺さっている短刀、ちょっと取ってもらえませんか？」

傍に突き刺さっているのは、先程の黒装束が落としていった短刀だ。

怪訝な顔をしつつも、団長が短刀を床から引き抜く。そして眼前に持ってくるや、その表情を一変させた。

「成程、《焔》だな」

聞きなれない単語を発して眉をひそめる団長に、ゲオルグ先生はこくりと頷いた。団長が俺の方に短刀を指し示す。

「タカオ君、この短刀には猛毒が塗られている」

「猛毒！？」

「……君には、一度も教えたことがなかったな。教える必要もないことだと考えていたんだが。その様子だと、ゲオルグもこのあたりまでは教えていないようだ」

団長は重々しく、そしてその瞳にはどことなく憤怒を込めて、簡単に説明してくれた。

《焔》。

この世界に数少ないながら存在するとある集団――――暗殺者集団の1つらしい。金で雇われて、人を暗殺する組織である。その中でも最も名前を知られている集団が《焔》なのだそうだ。

聞けばこの暗殺者集団、傭兵ギルドにこそ劣るが、歴史深く、世界中にその根をはっているらしい。……おぞましい話だが、国家がこの連中を使うこともあるのだという。

「先程の黒装束、そして猛毒の塗られた短刀。確証こそないが、《焔》だと見るのが妥当だろう」

「申し訳ありません、団長！　俺は『とんでもないこと』にタカオを巻き込んでしまった！」

本当に申し訳ないと繰り返し、頭を深く下げるゲオルグ先生の表情はかつて見たことがないほどに後悔に満ちていた。団長も難しい顔をして腕を組んでいる。

だが……なんとなく、話の構図が見えてきたような気がする。

「つまり……明日からの護衛対象、その《焔》絡みということですか」

「おそらくだが――クリスティアナ・バーグマン。そういうことだな、ゲオルグ」

またしても聞きなれない単語――今度は人名か。怪訝な表情を浮かべていたのだろう、ゲオルグ先生は後悔ここに極まれりといった表情で、しばらく沈黙した後、ようやく口を開いた。

「……申し訳ありません。おっしゃる通りです」

つまり、こういうことらしい。

ゲオルグ先生がギルドから受けた護衛任務は、人間1人を帝都オーケルンまで護衛するという、単純なものだった――当初は。

報酬もかなりの破格である。ついでに弟子を――俺に見聞を広めさ

せるいい機会だと、ゲオルグ先生はその依頼を受けることにしたのだそうだ。

護衛対象の名前は、クリスティアナ・バーグマン。帝都出身の１９歳の女性だ。

依頼主は、彼女の父親で、クレメンス・バーグマン。交易の関係でヴァルゴアン王国王都サンエストルを訪れていたこの父娘、とある事情によりどうしても娘だけが帝都に戻らなければならず、やむなくギルドに護衛を頼んで帝都の実家へ帰らせることにしたらしい。

これぐらいなら、別段珍しい話でもないのだ。ゲオルグ先生も、よくある話だと思っていたらしい。

だが、３日前になって事態が急変したのだという。

白昼、クレメンス・バーグマンが自宅にて惨殺されたのである。短刀で全身を滅多刺し――あまりにも無残な姿で発見されたのだ。

治安隊が捜査に当たっているものの、犯人はまだ掴まっていない。だが、その手口から《焔》によるものではないかと、報告を受けたアイスラー騎士団長は一瞬考えたという。とはいえ、ここは平和な王都サンエストル。まさか、そんなはずはと、犯人像から除外したそうだ。

父親が殺されたクリスティアナはといえば、犯人の目的が判然としないということもあり、騎士団に保護されることとなった。クレメンスが惨殺された時間帯、偶然にも外出していたことから難を逃れ

たらしい。

依頼主は殺害されたが、依頼は継続されることとなった。こうなっては、クリスティアナには祖国帝都にしか身寄りがない。彼女も帝都へと戻ることを希望したのだ。

ゲオルグ先生は事態の説明を受けるため、騎士団詰所に出向き、そして正式に彼女へ依頼を受ける旨、伝えた。――だが。

そこで、『とんでもないこと』を彼女から知らされてしまったのだという。

「『とんでもないこと』？」

「彼女の、出生の秘密――つまり」

……

……

……

…

なるほど、それは確かに――とんでもない。

ということは、先程の黒装束たちは――――。

「警告、だろうな。クリスティアナ・バーグマンを護衛すれば、《焔》に狙われることになる……」

「現段階では正式に依頼を受託しているのは俺、ゲオルグ・ジョルテだけだ。《焔》の狙いも俺だったんだろう。……だが、咄嗟のこととはいえ、タカオ、お前もさっきの件で一枚噛んでしまったことになる。襲撃者は全員とっ捕まえたからまだ大丈夫だとは思うが、明日からの護衛任務にお前が参加するというなら……」

俺も《焔》の暗殺者に狙われる、ということか……。

「どうする、タカオ君？　今回の護衛任務、降りるなら今のうちだ。魔物が活性化しているこの時期に、さらに暗殺者からも護衛する必要がある。道中はおそらく困難を極めることになるだろう」

「帝国に行くだけなら、何も今回の護衛に参加する形をとることはないからな。……ただ、お前も《焔》に目をつけられた可能性がある以上は、少しばかり時間をおいてほとぼりを冷ましてからということになるが……」

神妙な顔で2人が俺を見つめてくる。厳しい調子で紡がれるその言葉は、表面的には俺に選択させる装いではあったが、今回の件から手を引けと言わんとしているも同然だった。

理屈は分かるし、彼らが俺を危険から遠ざけようとする気持ちも分かる。正直、俺も暗殺者集団を敵に回すだなんて気が乗らない。

だが――……俺にも、帝国に行かなければならない理由がある。

帝国までの行程は2週間。オーラキア帝国で《勇者召喚》が行われる時期を考えると、今がギリギリの時期だ。今度行われる《勇者召喚》、どうしても自分の目で確かめないことには気がすまないのだから。

俺はまっすぐと2人の視線を見返すと、はっきりと言った。

「とにかく、護衛対象者に会わせてください」

王国騎士団治安隊、詰所。

その部屋にいたのは、予想していた人物像とはかけ離れていた。

美人。そう形容するのが一番だろう。美しい金髪は後ろで無造作に括られ、日光にあてられ綺麗に輝いている。白を基調としたまるで男性のような服装は、不思議と彼女にはよく似合う。凛々しいとでもいうべきか。しかし、その青い瞳は凍えそうなほどに冷たい。あまりにも整った顔立ちながら、酷く無表情なので、どこか人形かなにかのようにすら見えた。

どこか近寄りがたい雰囲気を持つ彼女に、意を決して話しかける。

「貴方が……クリスティアナ・バーグマンさん？」

向けられた視線はあまりにも冷たいもの。やがてその艶やかな唇が笑みを形作るが、感情はこもっていないように思われた。

「そういう貴方は……傭兵かしら？」

「ああ。タカオ・アサクラ。サンエストル・ギルドの傭兵だ。貴女を、もう1人の傭兵とともに帝都オーケルンまで護衛する」

「昨日のゲオルグ・ジョルテとかいう傭兵もそうだったけど、物好きなことね。《焔》を相手にすることになるのに」

彼女の発する言葉の中にはわずかに嘲りが含まれているようにも聞こえた。どうやら、護衛対象者にも問題がありそうだ。

「……貴方は、自分がどうして《焔》に狙われる状況にあるのか、知っているのか？」

「私が、オーラキア帝国の帝位第一継承者ということかしら？」

こともなげに言ってのける彼女に、俺は呆気に取られた。

『とんでもないこと』――――つまり、こういうことなのだ。

（……なんだかなぁ。どうしてこう次から次に――問題山積みなんだ？）

第7話　観光する仮勇者

オーラキア帝国は、この世界最大の帝政国家である。

その国土は文字通り世界の中心に位置し、その国土面積も世界最大。肥沃な大地に恵まれ、農業・鉱業・繊維業等等、数々の産業を発展させている。

帝都はこれまた世界最大の都市、オーケルン。現皇帝はエドワード。若干２８歳という若さながら、帝国の元首として厳かに君臨し、広大な帝国の領地を統治している。

この皇帝を支えるのが、主に８貴族と３大騎士団である。８貴族は主に内政面を、３大騎士団は主に軍事面を司る。特に３大騎士団――《蒼の騎士団》《紅の騎士団》《白の騎士団》は世界中にその名を轟かせており、世界最強の騎士団として名高い。

普段から何かと人々の話題に上ることの多い帝国であるが、最近は際立って多い。

魔王復活と、それに伴う《勇者召喚》のことがあるからだ。魔王に対抗するため異世界より勇者を召喚する《勇者召喚》は現在は皇帝直下の宮廷魔術師によってのみ行われるとされる。魔王復活の噂に比例するように、帝国はいつ《勇者召喚》を行うのかという憶測が

飛び交う。

栄華を極める帝国だが、外交面では問題を抱えている。

その１つが、帝国の東側に位置するヴァルゴアン王国とはちょうど反対側、西方に位置するキルクハイム王国との関係だ。この王国とオーラキア帝国は、ほんの１０年程前に戦争を――後に《白竜戦争》と呼ばれることになった戦争を起こしている。最終的な結果だけを見れば、双方痛みわけのままに講和した形だが、その因縁はたかが１０年ほどの歳月で消え去るものではない。

俺とゲオルグ先生が護衛することになった女性――クリスティアナ・バーグマン。

元を辿れば、彼女の運命はこの《白龍戦争》の頃から決まっていたのかもしれない。

ヴァルゴアン王国南部、交易の港町ガルト。

この街には潮の香りが漂っていた。暖かな、というよりは熱い日差しが大地を照らし、気温がぐんぐんと上昇しているように感じられる。街道沿いの丘から見える港には複数の帆船が停泊しているのが眺望でき、白いレンガ造りの街並みと調和してしているように思われた。沖では帆船が揺れている海原が綺麗に煌き、無限の広がりを見せている。

異世界だ――――丘の上からガルトを一望したとき、俺は思わずそう呟いていた。初めて目にする光景は、王都サンエストルでの暮らし

によくも悪くも慣れ始めていた俺に、改めて自分が異世界にいるのだということを思い知らされた。

このガルトには様々な人々が行き交う。ヴァルゴアン王国とオーラキア帝国の国境には常闇の大森林《夜の森》が広がっているため、多少回り道になっても人々は必ずこの港町を経由することになる。人が集まる場所では当然商売も成り立つから、商売人も多く集まる。そして、この街に一旦集約された物資や人々は、街道沿いに王国の諸都市へと広がっていくのである。一種のターミナルだ。

「ちなみに、この港街には港湾治安隊がいる。王都治安隊と似たようなものだな。人が集まれば、それだけ悪さする輩も集まって入り乱れる。締め上げるべきは締め上げないと、交易に支障が出るからな。王国騎士団の中でも選りすぐりの騎士達が常に目を光らせてるってわけだ」

噴き出してくる汗を拭きつつ、ゲオルグ先生はこの街の解説を続けた。

このガルトを東西に貫く目抜き通りを俺達はゆっくりと歩いて見て回っていた。

通りは実に騒がしかった。帆船から降ろされたと思しき積荷を乗せた荷車がそれぞれの店へと運ばれていく。山のように荷が積まれている馬車が慌ただしく走っていくのは、他の街へ運ばれるからだろうか。港町なのだから当然だが、魚介類もちらほらも見かけられた。腐っては商品にもならないから、塩漬けにされて運ばれていく。

王都サンエストルはどちらかと言えば静かで整然とした印象があったが、この交易都市ガルトは活気と喧噪で満ち溢れているように思われた。

「お、あれが港湾治安隊だ」

そう言ってゲオルグ先生が指刺す方向を見れば、数人の男達が周囲を鋭い目つきで眺めながら歩いていた。まるで故郷の世界の警察官のような青い制服の出で立ちだが、警察官と違うのは拳銃を持っているのではなく、帯剣しているところか。王都治安隊はまさに騎士といった甲冑を装っていたが、どうやら港湾治安隊は趣が異なるらしい。まぁ、こんな熱気のある場所で甲冑など着て治安維持にあたるのは地獄に等しいだろう。

それにしても――……

「……いいのか、こんな暢気に観光してて」

物珍しげに辺りを見回すゲオルグ先生には、俺の声は届いていないようだった。そもそもの目的を忘れているのではないかと思えるほどだ。背後をついてきている女性も呆れ顔――否、興味がなさげか。汗がじんわりと浮いて出てくるような気候の中でも、彼女は――クリスティアナ・バーグマンは涼しい顔をしていた。彼女の怜悧な雰

囲気がそう思わせるのか、それとも暑いと思っていても顔に出さないだけなのか、判断はつきかねた。

王都サンエストルを発ってからの行程は非常にスムーズなものだった。

クリスティアナは【とある事情】から暗殺者集団《焔》に狙われていると考えられたが、暗殺者からの襲撃はなく、最大限に警戒しながらの道中はただ疲労感だけが残された。勿論、これは護衛する俺とゲオルグ先生にとっては喜ばしいことではある。

問題――といえば問題なのが、クリスティアナだ。

見た目どおりにクールな彼女は、感情というものを持っているのかと疑わしくなるほどに淡々としており、つい先日に父親が惨殺されたばかりとは思えなかった。俺はいまいち彼女という人間がよく分からない。

ともあれ、旅の行程はスムーズに消化されているということもあり、ゲオルグ先生の発案でガルトの観光と相成った。俺にとって初めての街でもあり、とても新鮮な光景だったが――。

「――暗殺者に狙われている状況なのに」

「！」

心の中を見透かされたかのような発言に振り向けば、やはりいまいち表情が読み取れないクリスティアナの表情だ。見透かされた俺は余程間抜けな顔をしていたのか、クリスティアナは唇の端をつりあげる。

「心配性ね、傭兵さんは」

「……当然だろ。貴方は暗殺者に狙われているんだ。こんな人が入り混じるような場所で、何が起こるか分かったものじゃないだろ」

周囲の街行く人々に聞かれて面白い話しでもないので、前を歩くゲオルグ先生の背中に隠れるようにして小声で話す。

俺たちは護衛の傭兵であり、彼女を護る義務があるのだ。それがなくとも、傍にいる女性が殺されるのを見逃せるはずがない。そう思っての発言だったが、返ってきたのは彼女の背筋の凍るような冷笑だった。

「どうせ暗殺者に狙われるぐらいなら、人の少ない場所よりは、こういう賑やかな場所の方がいい。暗殺というぐらいだから、こんな人前で白昼堂々と狙ってくることもないでしょう？」

彼女は堂々と言ってのける。この状況下でそんなことが言えるとは

大した度胸だというほかない。表面だけを見れば、現に狙われている彼女より俺の方が余程警戒しているような感じだ。

「それに、私にも港町の喧噪を楽しむ権利ぐらいあるわ」

そう言われてしまうと、俺としては否とはいえない。

そんな俺たちの会話を聞いていたのかいないのか、ゲオルグ先生がぴたりと立ち止まって振り返る。

「さてと、俺は港の方も回ってこようかと思っているんだが……タカオとクリスティアナ嬢はどうする？」

……まったく、どこまで観光する気だ。

夜。

結局、今日はこのガルトで一泊することとなった。これもゲオルグ先生の提案である。旅の日程は順調に消化していたし、別段反対する理由もなかった。ガルトの街中を一日見て回ったおかげで、手ごろな剣を購入することもできたので、なかなかに有意義な観光だったといえる。

そのホテルは目抜き通りから北に数本ほど通りを渡った先にあった。大きな通りからは少し離れているので立地自体はよくないのかもし

れないが、街並みに調和する白い壁と、涼しげな木製の調度品は中々の雰囲気だ。それでも、客の入りはよくないらしい。

一階には受付ロビーと、その奥の方に質素な造りのバーがあり、俺とゲオルグ先生は横並びのカウンター席に座っていた。2人揃って果実酒だ。一応、故郷の世界を基準にして考えても、俺はもうアルコールを摂取していい年齢ではある。もっとも、ゲオルグ先生ほどのうわばみではなく、弱い方ではあるが。

「どうだ、少しはクリスティアナ嬢と仲良くなれたか？　俺の後ろで、2人して何やらコソコソと話をしていたみたいだが」

「仲良くなれた、というのがどの程度の親密さを表すかによるんじゃないかな？」

俺の素っ気無い言葉に、ゲオルグ先生が可笑しそうに鼻を鳴らす。

「それはつまらん答えだな。あれだけの美人と行動を共にしているんだぞ。それもいいところのお嬢さんだ。女ッ気のないタカオにとったら絶好のチャンスじゃないか」

「……酔ってる？」

まさか、とおどけるゲオルグ先生は、こんなもの水も同然とばかりにグラスを傾ける。素面で言っているのだから、たちが悪い。

「真面目な話、な。……俺は少し心配なんだ。お前は俺が教えた剣の技や戦闘技術は瞬く間に覚えていったが、遊ぶことだけは覚えなかった。いろいろ連れて行ってやっただろ？　アイスラー団長には言えない様な、ちょっとばかり悪いところにも」

いろいろ……。

確かに、いろいろな場所に連れて行ってもらった。純粋に感動した場合もあれば、刺激が強すぎた場合もある。……敢えて、個別に論評はしないこととしたい。

「だから、今回の護衛任務は本当にいい機会だと俺は思った。……ま、直前になってややこしい連中に狙われることにはなったがな。見聞が広まれば、お前も視線が広がるだろうってな」

「今日の観光もその一環――ですか」

「暗殺者のことを危惧していたことは承知してる。俺も気を配っていたが、怪しげな気配は感じなかったがな」

危険な雰囲気だとか、殺気だとかを察知する能力は俺に比べればゲオルグ先生の方が余程発達しているから、街中に暗殺者がいなかったのは確かなのだろう。

「ともかくだ。これから先、タカオまでそう気を張らなくていい。

俺が責任とってお前とクリスティアナ嬢を帝都まで連れて行ってやる。俺にとってみれば、お前とこうやって旅を出来ている時点で十分なんだからな。誘った時は、一人の傭兵として、なんてことを言ったが、あんなもん建前だ。可愛い弟子の成長に協力できればいいのさ」

邪気のない笑顔は一切の嘘偽りを感じさせず、俺は照れくささを誤魔化すように果実酒を口にした。

「お、噂をすればなんとやらか」

ゲオルグ先生の言葉につられて、薄暗いロビーの2階へと続く階段に目を向ける。そこに、今日はもう就寝すると言って部屋に入ったはずのクリスティアナがいた。薄手のシャツとスラックス姿の彼女は、昼間に比べてどこか小柄に見える。

「どうしたい、お嬢さん。眠れないのか？　馬車の中で寝るよりは余程寝心地はいいはずなんだがな」

「そのお嬢さんという呼び方、やめてもらいたいのだけど」

気に障ったのか、ゲオルグ先生を睨むようにしてクリスティナは俺の横に腰掛けた。髪を洗ったところなのか、彼女の金髪はまだ濡れ

ていていっそう艶やかに感じられ、石鹸の匂いがアルコールの匂いの中に混じってくる。薄着のおかげか、彼女は容貌だけでなく、スタイルもかなりのものであることが分かり――……って、セクハラだな、これは。

カウンターの奥にいたはずのホテルのオーナーがいつのまにか現れ、彼女の注文を手早く聞いていく。このホテル、客が少なければ従業員も少ないようで、オーナーがほとんど1人で働いている様子だった。彼女の前にグラスを置くと、またもやカウンターの奥へと引っ込んでいく。客も俺たち3人だけだから、今の内に他の雑事でも片付けているのだろうか。

「眠れるはず、ないでしょう？　眠っているところをグサリとやられるのはごめんだわ」

昼間もそうだったが、事ある毎にクリスティアナはこういうことを言い出す。その癖、表面上は《焔》の暗殺者を心の底から怖れているようには思えないから、まるでちぐはぐだ。ただ単に強がっているだけのようにも思えるが……。

（それも、何か違うような気がするんだよなぁ……）

別に何か根拠があるわけでもない。ただ、彼女の青い瞳の中には、恐怖はないように見えた。あるのは、諦観しているかのような瞳だけだ。いずれにしても、クリスティアナがどうにも掴みどころがない女性であることには変わりはない。

「心配しなさんな。俺とタカオがいる限り、そんなことは絶対にさせない。このホテルに暗殺者が近づいてくるだけで、俺たちにはこうビビッと来るんでな」

対人センサーでもあるまいに、大袈裟だ。クリスティアナも冗談と受け取ったか、特に反応することもなくグラスを口につける。

「……そういえば、酒は飲めるのか？」

人並み程度には、と返す彼女に俺はこれは相当飲めるのだろうと確信した。こういう言い方をする人間こそが、意外やどうして強かったりするのだ。まぁ、ゲオルグ先生のように口も中身も強い場合もあるが……。そもそも、彼女が先程頼んだグラスの中身からして、確か相当に強い酒のはずである。俺なら、そんな酒を飲もうなら即座に目を回す自信があった。

いい飲みっぷりだな、お嬢さん、とゲオルグ先生が無責任に煽る。先程注意されてまたもお嬢さんと呼んでいるが、そのやりとりはこれまでの道中でも何度もあったので、彼女も諦め気味であった。

――などと考えているうちに、すでにクリスティアナのグラスは空である。どうやら相当強いらしい。かちゃ、と空のグラスを置く彼女を見て、ゲオルグ先生が嬉しげに声を漏らす。

２人の酒豪に挟まれて肩身の狭い俺は、グラスの中の氷を指でつつ

いて転がしていた。

最初にギブアップを宣言したのは、ゲオルグ先生だった。酒に酔ったから、とは言っていたが、大嘘である。あの程度の酒でゲオルグ先生が酔うはずがない。つまり、明日に差し支えるからということと、念を押して襲撃に備えるためだろう。

俺とクリスティアナはといえば、変わらずバーのカウンターに並んで座っていた。クリスティアナはまだ部屋に戻る様子がなかったし、さすがに酒の入った女性を1人残すわけにもいかない。

それなりに飲んでいるはずなのだが、顔色1つ変えることなく涼しい表情をしているクリスティアナ。そろそろ部屋に戻って就寝することを促すべきかとも考え始めたところで、カウンターの奥からオーナーが出てきた。人懐こい笑顔を浮かべて話しかけてくる。

「お客さん達、これからオーラキアに向かうんですか？」

「ええ、まぁ。……申し訳ない、こんな遅くまで」

「構いません。実を言うと今日の泊り客もお客さん達の３人だけでしてね、私も手持ち無沙汰なんですよ。……近頃、魔物が凶暴になってきてるでしょう？　そのせいかか、旅人さんが少しずつですが減っているようでしてね。うちみたいな小さなホテルだと、その影響が大きく出てきてしまいまして……」

オーナーは悔しさ半分諦め半分といった面持ちで現状を語る。元々客の入りは悪かったそうだが、ここに来てますます客が減ってしまい、従業員にも暇を出したのだそうだ。親から受け継いだ惰性でやっているような商売だったので、こうなってくると廃業も視野に入れているらしい。

「ただ、そうなるとどうしても親に申し訳が立たない、という気持ちがありましてね。もう少し踏ん張ってみようかとも思うんですよ……おっと、お客さんたちにはつまらない話でしたね」

「いや、お気になさらず」

「あまり気に病む必要はないと思うわ。魔物の活性化がそう長く続くとは思えないから」

コトリとグラスを置き、唐突に会話に参加してくるクリスティアナ。

「おや、どうしてそんなことが言えるんです？」

「魔物が活性化しているのは、魔王が復活したから。魔王が現れれば、勇者が現れるものだから。伝承のとおりよ」

「勇者、ですか。なんでもオーラキア帝国では伝説の勇者を召喚しようとしているという噂話はよく耳にしますが、どうにも眉唾でしてね。以前に魔王が復活し、勇者が現れた際の話も、今となっては伝承や御伽噺の域。当然生き証人なんていやしません。……本当に勇者なんて存在するのでしょうかね？」

それを言ってしまえば、魔王という存在にも同じことが言えるだろう。

この世界は魔王復活を何度も体験しているのかもしれないが、俺も含めて現在を生きる人々にとっては魔王復活は初めての体験だ。魔王がいったいどんな恐ろしい姿をしていて、どんな恐ろしい力を持っていて――それは伝承レベルの話でしか確認できないのである。敢えて言えば、魔王の発す瘴気とかいう力が、魔物を活性化させてしまうということだが、その点だけを見れば伝承のとおりのことが起きている。

「《勇者召喚》は異世界との間にある壁に穴を開ける最高等魔法。金色の魔獣を使役する召喚魔法（ツヴァイ）や暗黒の攻撃魔法（インパルス）のように、時と共に失われた魔法もある中で《勇者召喚》だけは連綿と受け継がれてきたわ。魔王は勇者でなければ倒せないから、《勇者召喚》を失うわけにはいかない。……もっとも、現代では《勇者召喚》を行使で

きるのは帝国の宮廷魔術師達だけ。彼らを失うことは、この世界が魔王に対抗するための力を失うことに等しいから、彼らは厳重に保護されている」

「ほぅ〜、こちらのお客さんはかなりの物知りのようで」

感心しきりのオーナーに対し、俺はといえばクリスティアナが雄弁なことに少し驚いていた。

「私も知ってますよ。勇者は大いなる光の力を持っていて云々……でしたっけ？　でもねぇ、たった1人でなにができるのかってね、私みたいな小心者は思ってしまいますよ」

「……1人で出来ることなんて、たかが知れてる、か」

我知らず、小さく呟いていた。

俺をこの異世界に召喚した張本人、ホムレウスに魔王を倒せと言われた時から思っていたことだが、1人でいったい何ができるというのだろう。そもそも、その大いなる力というのが疑わしい。現に、《勇者召喚》によって呼び出された俺は、何の力も持っていなかったのだから。……まぁ、ホムレウスの使った魔法は本当に《勇者召喚》だったのかという疑念はあるが。

「勇者は、1人とは限らないわ」

「……なんだって？」

1人では、ない？

「あまり一般には知られていない古い伝承の1つに、こういうものがある。大いなる光の力を持つ勇者、彼の者には付き従う3人の仲間がいた、と」

「ああ、つまり勇者の従者ですね」

……なんだ、そういうことか。一瞬、勇者は他にも何人もいるのかと思ってしまった。そうであれば、俺の立場も――……。

「いやぁ、お客さんは本当にお詳しいですね。そんなこと、私もまったく知りませんでしたよ？」

「ええ、父が物知りで――――」

「！　静かにッ！」

その物音に気がついたのは、クリスティアナの瞳にわずかに悲哀が差したように見えた時だった。物音――かすかな苦鳴が耳に入った

瞬間、俺は怒鳴るようにして話を中断させる。

オーナーが驚愕して何事かと目を向け、クリスティアナは相変わらずの平静さだ。

……念のため、剣を持っておいて、クリスティアナを1人でここに置いておかないで、正解だった。

それは、突如として正面玄関のガラスを突き破って飛び込んできた。オーナーから更なる驚愕の叫びが発せられ、その叫びに被さるようにして侵入者の咆哮が響く。

形状は、リザードマンに近いが、こちらの方はより野生的だ。全身に刺々しい鱗が生え、ぬるりとした尻尾が床を打つ。爬虫類そのものの細長い眼が、俺たちを見据えていた。リザードマンはそれでも武器を持っていたが、こいつらにはそんなものは持てない――というより、持つ程の知性を持ち合わせていない。

魔物――アリゲーターだ。成程、名前のとおり、トカゲというよりはワニに近い。

（何故、魔物が？）

瞬間、脳裏に浮かんだのは、標的はクリスティアナではないかということだ。こんな街中にまで侵入してきて、このホテルを狙ってくる。それなりの理由があってしかるべきだが、だとすると……何故、

魔物なのだ？　《焔》はまさか魔物まで操るのか？

だが、考え事をしている暇はない、リザードマンよりは余程凶暴で知られるアリゲーターには、紳士性など欠片もないのだから。

「オーナー！　奥に引っ込んでろ！　俺たちが片付ける！」

いつの間に下りてきたのか、ゲオルグ先生が階段下で長柄両刃斧を片手に吼える。さすがは先生というべきか、あれだけ酒をくらっていてもまったく酩酊した様子はなく、この魔物達の襲撃も素早く察知していたようだ。

「クリスティアナ、貴方も下がっていろ！」

「……自分の身は、自分で護れるわ」

顔面を蒼白にして身体を震わせながらカウンター奥へと入っていったオーナーとは対照的に、クリスティアナは気丈だった。……ああ、もう！

アリゲーターは、俺たちに怒涛の勢いで襲い掛かってきた。俺はクリスティアナを背後に護るようにして移動し、剣を抜き放って構える。アリゲーターが振り上げるのは、その鋭い爪だ。あの爪にかかったら、人間の肉など容易く引き裂かれてしまう。

振り切られた爪を難なく避けると、硬そうな鱗に剣を突き入れる。上手く鱗の間にもぐりこんだ剣を、力任せに横に薙ぐと、アリゲーターは苦悶の声を上げた。

視線を動かせば、ゲオルグ先生もアリゲーター2匹と交戦中だった。先程までの酒飲みのだらしない顔が嘘のように厳しい顔つきとなり、油断なくアリゲーターを睨みつける。間断なくアリゲーターがその爪を振るい、その牙で食らいつくように突進する中、ゲオルグ先生は最小限の動作で避けていた。

しかも、反撃は苛烈だ。ゲオルグ先生が両手持ちで勢いよく両刃斧を振るったと思った瞬間、アリゲーターが2匹とも胴を両断されたうえに宙を舞っていた。その膂力は凄まじいの一言に尽きる。こちらは、俺が心配するだけおこがましいというものだ。

そうしているうちに、アリゲーターは次々とホテル内に侵入してきていた。よくぞこれだけの数がガルトの街中まで侵入してきたものだ。

次から次へと飛び掛ってくるアリゲーター共を一匹ずつ確実に仕留めつつ、背後のクリスティアナの様子を窺う――なに？

「……剣を使えるのか！？」

「人並み程度には、ね」

オーナーが護身用に備え付けていたのだろう、カウンターの内側に

立てかけられていた剣をクリスティアナは抜き放っていた。感触を確かめるように軽く振るう様は、まったく危なげがなく、むしろ様になっている。それに……先程の飲みっぷりではないが、人並みということは強いということだ。

しかし、いくらなんでも護衛対象に闘わせるわけにもいかない。俺は再びクリスティアナを庇うようにして立つ。

「タカオ、気をつけろ！　こいつらは魔法を――！！」

ゲオルグ先生からの警告は、少し遅かった。

アリゲーターがその3本しかない指を俺たちを指差すようにして持ち上げた瞬間、その指から一筋の流れが文字通り発射された。

「《ウォーターアロー》か！？」

魔力によって作り出した水をかき集めて圧縮し、さながら水鉄砲のように発射する魔法。水であることに違いはないが、その威力はまさに鉄砲の如くだ。

俺は背後のクリスティアナの腰を支えると、抱きかかえるようにして横っ飛びに避けた。標的を外した《ウォーターアロー》が、カウンターに激突し、大穴を開ける。

その威力に肝を冷やす中、アリゲーターは数にものを言わせて俺たちを取り囲む。

「傭兵さん、外を……！」

言われてホテルの窓の外へと目を向けると、ほんのわずかの間に外は明るくなっていた。

夜の帳はいつの間になくなり、激しく自己主張して街を明るく照らすのは家を焼く炎だ。耳を澄ませば、時折人々の悲鳴も漏れ聞こえてくる。炎の上を鳥のように飛び交っているように見えるのは、魔物――キメラか。

間違いない――この港町ガルトは、魔物の襲撃を受けている！

第8話　逃亡する仮勇者

魔物について知られていることは、実際のところあまり多くない。闇から生まれてきた存在だとか、魔王の造りだした生物兵器だとか、様々に言われているが、その実態、起源はほとんどが判明していない。故に、野生動物とは明らかに一線を画し、非常に凶暴で、人間を襲い、一般人では太刀打ちできない能力を有する存在のことを、総じて「魔物」と呼ぶ。

リトルオーク、マンティス、リザードマンなど、形状・能力等から大まかに分類はされている。だが、こうやってほぼ一般に知れ渡っているのは、魔物の中では下等――B級とも呼ばれるやつらだけだ。

ギルドに所属する傭兵にランク分けが存在するように、魔物にもランク分けがある。といっても、ランクSSからEまでと種類のある傭兵とは違い、魔物の場合はA級かB級しかない。しかし、その違いは天と地ほどの差がある。

A級ともなると、伝説か、さもなくば根も葉もない噂話であることが多く、存在すらほとんど確認されていない。しかしながら、その力は想像を絶するとされていることでは共通している。いわゆる、御伽噺に現れる化け物の類は、このA級の魔物と共通していることも多い。

しかしながら、魔王の現れた時代においては、このＡ級すら凌駕する魔物が出現したとされている。魔物には知性・知能などありえないが、傭兵風に表現すればＳ級ともいうべき魔物達の中には、完全に人間を凌駕する知性を併せ持ったモノもいたという。

彼らは、一般の魔物と区別するために別の呼称が用いられた。

すなわち、《闇の騎士団》、と。

交易の港町ガルト。そこは、まさに地獄と化していた。

深夜の時間帯であるというのに、街中は明るい。昼間は陽光に照らされ輝いていたはずの白い街並みが、あちらこちらで凄まじい勢いで燃え盛っており、熱気が辺りを徐々に覆い始めている。

その炎の隙間を縫うように悠々と飛び交うのは、魔物――ガルーダだ。まるで小さな竜の如き形状のこの魔物は、その大きな嘴から炎を吐く。これが群れになってガルトの上空を飛び交って街を襲っているのだから、四方八方で火の手が上がるのも当然だ。

街の住人達は通りを我先にと逃げ惑っていた。ちょうど深く眠っていたような時間帯、人々の多くは着の身着のままだ。恐慌が辺りを覆い、炎の熱気が混乱に更に拍車をかける。

そんな彼らを更に追い詰めるようにあちらこちらを徘徊しているのが、魔物――アリゲーターだ。見かけの割に身軽な魔物達は、逃げ遅れる人々を2、3匹で取り囲み、その凶悪な牙を向けて人間を蹂

躙する。肉を喰い千切られ、臓物を撒き散らし、鮮血を噴出させる様を見てアリゲーターは嬉嬉とするように勢いを増した。計り知れないほどの恐怖で顔を歪めたままに絶命する人々が辺りに続々と現れる。騎士や傭兵ならばともかく、一般人では魔物に対抗する術もない。

その横では、アリゲーターが《ウォーターアロー》を次々と発射していた。水の弾丸ともいうべきその魔法は、人間の身体など易々と貫通する。運の悪いことにその直撃を受けた女性は、2射目、3射目を受け、身体中を穴だらけにされてしまった。水の弾丸の勢いのままに押し出される臓物。倒れ付した女性は、やはりアリゲーター達に囲まれ、更にその身を蹂躙されることになる。

憤激に、身が震える。

だが、俺が動くよりも早く、俺の弟子が――タカオ・アサクラが飛び出していた。

「はぁッ！！」

女性に喰らいつこうとしていたアリゲーターの首をタカオは横薙ぎに刎ねた。同族を殺されたことに対する怒りか、あるいは人間の肉を喰らうという最悪の食事の時間を邪魔されたことに対する怒りか。剣を振るったタカオの姿を認めるや、残りのアリゲーター2匹が爪を向ける。

だが、あまりにも遅い。タカオはその爪を弾き返すと、まず一匹目の横っ面に拳をお見舞いし、もう一匹にはその顎に剣を突き入れた。そのまま力任せに押し上げ、脳天から剣を飛び出させると、アリゲーターは顔面を縦に両断されて声にならぬ奇声を上げた。殴り飛ばしたもう一匹には、剣を振り上げた体勢のままに首筋にかけて振り下ろす。振り切った時には、タカオはアリゲーター2匹の奇妙な色をした血を浴びていた。

女性は、既に死んでいた。恐怖と苦痛に歪んだ顔は見るに忍びない。

「……行きましょう、ゲオルグ先生」

義憤に歯噛みしながら剣を納めるタカオに、俺は何も言ってやることもできず、再び駆け出した。

魔物の襲撃は、港町全体に広がっているようだった。

ホテルに滞在していた俺達は、このガルトを脱出することを即座に決断した。魔物の囲みを突破し、現在、目抜き通りを西に疾走しているところだ。魔物の数は無尽蔵かと思われるほどに多く、統制こそ取れていなかったが、いつまでも相手をしていられるものでもない。街を護るのは、騎士団・治安隊の仕事なのだ。俺達傭兵の仕事ではない。まして、俺達は今、クリスティアナ・バーグマンを帝都まで護衛するという任務がある。

冷たいようだが……あくまでも襲い掛かる魔物を捌き、少しでも早く街を脱出、出来る限り街から離れる――これが安全策だ。物事に優先順位を決めて行動する――そのことにタカオとクリスティアナ嬢が反発することも考えられたが、２人ともあっさりと納得してくれている。

疾走する俺たちの横目に映るのは、燃え盛る街並みと、逃げ惑う人々、そして無数の死体だ。

俺とて、この世界のことを何でも知っているわけではない。だがそれでも、１つの都市がこれほど大規模に魔物に襲撃されるというのは聞いたことがなかった。魔物の侵入を防ぐために、このガルト含めて各都市には必ず防壁があり、騎士団が常駐して警備にあたっている。魔物が少数ながら都市内部に侵入するという事件は過去散発的には起こってはいるものの、これほど大規模に街が襲われるというのは……。

「惨いわね」

先頭にタカオを、殿に俺を置いて走る隊列の中間にあって、クリスティアナ嬢は発する言葉の割に大して感情のこもっていないような声で言った。その手には護身用ということでホテルから無断で拝借した剣が握られていたが、先程からタカオが彼女が動くよりも早く魔物を撃退しているので、俺も彼女も動く暇すらなかった。

まったく、タカオの実力たるや、本当につい２年前まで剣の扱い方

1つ知らなかった人間なのかと疑いたくなる。師として戦闘技術を教え込んだ身としては、仮にタカオと真剣勝負したとして、はたして勝てるだろうかという考えがつい頭に浮かんでくる。

おそらく、勝つことはできるだろうが……辛勝ではなかろうか。

ともかく、今はそれよりもだ。

「くそ、治安隊は何をやっているんだッ！」

☆

☆

☆

「ボサッとするな、ブリンカー！　次が来るぞ！」

ガルト港湾治安隊、マーク・クレンゲル隊長は怒鳴るように周囲の

騎士に激を飛ばした。青の制服を窮屈そうに着こなす熊のような巨漢で、尻尾のように後ろで結んだ白髪の入り混じった黒髪を振り乱す。支給品の2倍以上はあろうかという幅と長さを持つ大剣を肩に担ぐ姿は勇猛そのものであったが、今の表情は焦燥に満ちていた。

ちなみに、僕の名前はヘクトル・ブリンカー。港湾治安隊の一員であり、クレンゲル隊長直下第1小隊の副隊長である。

「ガルーダ6匹！　来ます！」

「銃を取れ！　全て撃ち落すぞ！」

クレンゲル隊長始め、隊員全員が拳銃を構えた。

この銃は工業都市エルンバイアから直輸入したものであり、非常に高価な代物である。その値段たるや、一般人ではとても手の出せるものではなく、王国治安隊だからこそ装備できるものだ。弾丸1発も高価であるから、そうそう無駄にできるものでもない。

地を這うことしかできない人間相手に余裕を見せるように悠々と滑空してこちらに向かってくるガルーダの群れ一匹に、僕は慎重に照準を合わせた。

「撃てッ！！」

隊長の合図とともに、隊員全員が一斉に発射する。耳を劈くような

複数の銃声が周囲に響き渡り、数瞬後にはガルーダの群れは奇声を上げて続々と地面へと墜落していった。粒ぞろいの騎士が集う港湾治安隊の訓練は伊達ではない。銃の腕前とて、いくら空を舞う相手とはいえ、そう狙いを外すものではなかった。

墜落してきたガルーダ達に隊員達が容赦なくトドメをさしていく。

「逃げ遅れた民間人の救出は第3、第4小隊に、消火作業は第5、第6小隊に任せ、我々第1、第2小隊は魔物を街から叩き出す！目についた魔物はすべて蹴散らせ！」

磐石たる動きの治安隊第一小隊は、通りを東へと駆けた。

ガルトがこのような未曾有の事態に襲われるのは、僕の知る限りでは始めてのことだった。

港湾治安隊はヴァルゴアン王国王国騎士団の騎士にとっては、花形ともいえる部隊である。

ガルトは多くの人々、物資、情報等の集まる街であり、常時厳しく騎士団が警戒に当たっている。王国騎士団の中でも特に腕利きの騎士がこの港湾治安隊に配属されるとされており、騎士にとって憧れの部隊なのだ。この部隊に配属されることは出世の道を約束されたも同然と言われる。現に、現王国騎士団長ユリウス・アイスラーも港湾治安隊を数年間勤め上げ、数々の功績を挙げている。

魔物の侵入など決して許さず、禁制品を発見すれば即座に摘発し、怪しげな集団が王都サンエストルへ向かうことを水際で阻止する。それが港湾治安隊の責務だ。

だが、それが今まさに打ち崩されている。どこからともなく、さながら亡霊のように突如として出現した魔物達は、このガルトに猛攻を仕掛けてきていた。突発的且つ予想外の事態に、港湾治安隊も統制的に即応できず、動きが遅れたことは否めなかった。

前方の通りのど真ん中に、魔物――アリゲーターの群れが映った。魔物達は僕達の接近に気づくや、それぞれ独特の唸り声を上げて牙を見せ付ける。

「これ以上の暴虐を許すわけにはいかん！　通過点として張り倒せ！！」

クレンゲル隊長は体勢を低くすると、更に加速した。既に５０を越えた老体であるにも関わらず、疾風と化してアリゲーターの群れに真正面から突っ込む。

迎え撃つのは《ウォーターアロー》の連射だ。断続的に発射される水の弾丸を、クレンゲル隊長はわずかに身動ぎするだけで回避し、さらに恐るべきことに大剣で弾いてさえみせた。魔法とはいえ水は

水。剣で触れない道理はないが、隊長の分厚い大剣だからこそ、《ウォーターアロー》の軌道を見切れる力があってこその芸当である。クレンゲル隊長は咆哮して跳躍し、手近のアリゲーターに斬りつける。

まさに、圧倒的だった。身の丈ほどはある大剣を隊長は軽々と手足のように操り、銀色の奔流がアリゲーター共をまとめて横薙ぎにする。一瞬遅れて、緑色の物体――アリゲーターの上半身が宙を舞い、行き場をなくした鮮血が噴出した。切り離された上半身が地面に落下するより早く、クレンゲル隊長は次なる標的を確認して再び青い疾風となる。

追跡するのは、幾筋もの《ウォーターアロー》だ。同族のピンチを感じ取ったか、周囲にいた魔物が集まっているらしく、四方八方の路地からも水の弾丸が発射される。しかし、それらはクレンゲル隊長の音速の剣捌きの前にすべて撃墜され、ただの水飛沫と化した。

ここに至って、ようやく僕も含めた隊員達が隊長に追いつく。隊長1人に気を取られていたアリゲーター共は、隊長には及ばないまでも腕利きの隊員達に続々と斬り伏せられていった。

目抜き通りの中央へと到達した第1小隊の誰もが、眼前の光景に息を呑んだ。

通りは、炎によってまさに蹂躙されていた。商店が数多く並んでいたはずなのに、どの店もすべからく炎に包まれて黒煙を上げ、原形をとどめないほどに崩れ落ちた建物もある。周囲のあまりの熱量に、この場所にいるだけでも息苦しくなる。口内へと侵入してくる熱気は火傷しそうなほどだ。無事な民間人の姿などどこにもなかった。逃げ遅れた末に燃え猛る炎に身を焼き尽くされて既に炭化している死体に、でなければ魔物に惨たらしく殺されて鮮血で真っ赤になった死体。

「全滅……」

そう、誰かが呟いたのが聞こえた。

火炎地獄。そんな場所に五体満足で立っているのは、僕達治安隊第1小隊だけだった。あまりの惨状に、隊長を始め誰もが歯噛みする。本来、彼らを護るべき立場にいる僕達がこうして彼らの死体を眺めている。去来するのは、とてつもない無力感だ。

気の遠くなるほどに昔から、交易の街として栄えてきたガルトは、壊滅してしまったに等しい。それも、ほんの一晩――短時間のうちに。港湾治安隊は結局何もできなかった。いったい、どれほどの魔物がこの街に押し寄せたのか。どれだけの人々が殺されてしまったのか。

クレンゲル隊長は血が出るほどに拳を握り締め、自失したように肩膝をついた。治安隊のトップという役職にありながら、常に最前線で街を護るために尽力してきた隊長だ。その悲しみは、この治安隊に配属されて数年程度の僕には計り知れないだろう。

「隊長……今は、悲しむべき時ではありません。他の小隊と合流し、少しでも被害を少なくするための方策をとるべきです。じきに、王都や他の街からも応援の騎士団が駆けつけてくれるはずです」

「……ブリンカー。すまん」

隊長は立ち上がり――しかし、その動作は途中で止まった。

先程とは違う意味で茫然とした瞳で、あらぬ方向を見つめている。

つられるようにそちらを見ると、そこは燃え猛る炎により崩れ落ちた、かつて商店が立っていたのであろう場所。その上に、奇妙なモノ――人影があった。

「人……？」

炎の上にあって、その人影は燃えることなく立っていた。否、違う。その人影の周囲のわずかな地面だけで、炎が消えているのだ。

『はずれ、か』

炎がますます勢いを増し、空気の焼ける音が耳に響く中でも、その人影から聞こえてきた声ははっきりと耳に入った。男の声だ。顔ははっきりとは見えないが、男の姿形は炎に照らされてよく見える。闇に溶けるような漆黒のマントに、まるで貴族が身に付けるような装飾の多い服。マントと同じ漆黒の髪は腰ほどまで伸びており、炎が発する熱波をまるでそよ風のように受けている。炎が、意思を持ってその男を避けているようでさえあった。

炎の先で、男がカツンと足音を鳴らして近づいてくる。それに合わせて、炎も男の進路を開けるように道を作る。

「……なんなんだ、こいつは……！」

隊長が大剣を構えるようにして男に向き直る。

隊長の顔からは止め処ないほどに汗が滴り落ちていた。勿論、周囲の炎による熱波もあるだろう。だが、それだけではない。男の姿を確認してからというもの、急に身体を襲い始めた熱以上の悪寒。それを、おそらく僕以外の皆も感じているに違いない。

『勇者は、どこだ？』

「……何？」

『言葉が理解できなかったのなら、もう一度聞く。勇者は、どこだ？』

☆

☆

☆

街の外まで後少し。港湾治安隊が魔物討伐と消火作業に必死で尽力しているおかげか、火のついた建物もまばらになってきた通りで、俺達は厄介な連中と遭遇していた。

薄暗い空間を引き裂いて飛来したそれに感づいたのは、悔しいことにタカオが最も早かったのだろう。突如として足を止めるや、背後のクリスティアナの肩を抱くようにして、横に飛び退く。俺もそれに追随するように動いていた。

刹那、先程まで俺達がいた地面に、続々とその飛来した物体が突き立っていった。槍の穂先だけを抜いたような武器で、これが5、6本、硬い地面に深々と刺さっている。

暗殺者が、よく使う武器だ。確か――くない、とか呼ばれているんだったか。

進行方向の先に、数人の人影があった。薄闇の中にあっては周囲の

空間に溶け込むような感じを受けるその黒装束達４人は、明らかな殺意を携えて、その手に短刀とくないを数本、握っていた。

「ここに来て、《焔》か！」

タカオはうんざりしたような声で言うと、剣を抜き払って黒装束達に向かって飛び出した。

……おいおい！　迎撃するのはいいが、クリスティアナ嬢のことを忘れちゃいないか――！？

「降りかかる火の粉は、自分で払うわ」

俺の懸念をよそに、なんとクリスティアナ嬢までもが剣を構えてタカオに続くように飛び出した。予想外の展開と彼女の行動に俺が出鼻をくじかれる中で、黒装束達は独特の動きでタカオとクリスティアナ嬢を迎え撃った。

先頭にいた黒装束に狙いをつけたのだろう。タカオは迎撃のくないをほんの少し頭を動かしただけで回避すると、そのまま男の上半身に斬りつけた。その一撃は胸から腰の辺りにまで到達しており、噴出する鮮血が、早速黒装束が１人戦闘不能状態になったことを認識させる。

傍にいた黒装束が、滑るようにタカオの横手に回ると、短刀を振り下ろした。

しかし、その攻撃は、彼らの標的である人物――クリスティアナ嬢によって阻まれた。それでもまだまだタカオに劣るものの、本当に一般人なのかと疑いたくなるほどの速さで黒装束の背後に現れた彼女は、その剣を背後から突き出して黒装束を貫いていた。それも、位置的には心臓のあるあたりだ。黒装束は自分に何が起こったか分からないとでも言うかのように硬直するが、クリスティアナ嬢が剣を引き抜くと、そのまま地面に倒れ付し、すぐに動かなくなってしまった。どうやら、命を奪い取ったらしい。

いくら自身の命を狙っている暗殺者とはいえ、易々と人間の命を奪ってしまった彼女に釈然としないものを感じるが、それを考えるべきは後だ。タカオも同様の考えに至ったのだろう、瞳には動揺の色を浮かべているものの、それを動きに表すことなく行動する。

タカオは暗殺者顔負けの滑らかな動きで次なる黒装束の間合いに踏み込むと、至近距離で放たれたくないを紙一重で避け、剣で黒装束の腹を抉った。

これで、残り1人。もはや優位は明らかだが、それでも黒装束は殺気を消そうとはしなかった。

これだから《焔》は厄介だ。自分の命なんて、なんとも思ってはいない。だから平気で人を殺すことも出来るのだろうが……。

最後の黒装束は素早い動きで、標的であるクリスティアナに飛び掛った。くないを投擲し、短刀を構えてクリスティアナに踊りかかる。

だが、驚くべきことに彼女は飛来するくないを弾いてみせた。しかも、いささかも体勢を崩してはいない。まさかそこまでのことをや

ってのけるとは思っていたのだろう、黒装束の動きが若干停滞する。その停滞が、黒装束には命取りだった。そのときには既に、タカオは疾風と化していたのだ。まさに一瞬。タカオは黒装束の横手に現れるや、既にその顔面を斬り裂いていた。それでも苦鳴の声を上げることのない黒装束に、タカオは真正面から心臓を貫いた。

「こんなところ、か」

力尽きた黒装束が短刀を地面に取り落とした音が、戦いの終わりを告げた。

結局、俺は何もする必要がなかった。その戦闘力からして、この黒装束４人は暗殺者としては二流、三流の部類といえたが、それでも圧倒的な力の差を見せ付ける戦いだった。

まずは、クリスティアナだ。本当に、彼女はお嬢さんと呼ばれていた人種なのか。その戦いぶりは、傭兵と比べても遜色ない。まして、いとも簡単に敵を殺すなんて、できるはずのない暮らしをしてきたはずの女性なのだ。いったい、彼女は父親とどういった生活をしてきたのか。

そして、もっと問題なのがタカオだ。魔物襲撃が始まり、ホテルから街を脱出するまでのこれまでの行程、目に付いた魔物のほとんどはタカオによって倒されていた。俺が動いた場面など、ほんのわずかと言っていい。先程のホテルでは、この旅の道中でのことは何か

あっても俺がなんとかしてやる、というようなことを言ったが……どこまで言葉通り実行できたものか、分かったものではなかった。少なくとも戦闘面では、タカオは俺と同等以上の立ち回りで動いている。

……もはや、タカオの実力はランクCなど超越しているのだろう。ランクB……否、ランクAと言ってしまっても、疑う者はそういないはずだ。恐るべき速度で強くなっていく弟子の姿には、正直戦慄を禁じえない。

情け容赦も、いい意味でも悪い意味でも無くなってきている。俺が剣技を教えてやっていた頃は、魔物はともかく、人間を斬ることに随分と思い悩んでいたものだ。初めて人を斬り殺した時など、情緒不安定になってしまったタカオを立ち直らせるために、非常に苦労したのを覚えている。結果としては、俺はほとんど役には立たず、タカオの親代わりともいえるユリウス・アイスラー騎士団長のおかげで解決することになったわけだが……。

（……いったい、何をそこまで急いで突っ走るんだよ、お前は）

「行きましょう、ゲオルグ先生、クリスティアナ」

街の出口は近い。

いつまで先生と呼び続けてもらえるのか、下手をすればこの旅で弟子に越えられてしまったことを痛感することになるのではないのか――そんな不安に襲われつつ、俺達は街の出口へと急いだ。

今回、ガルトの街を襲った事件。

多数の死傷者を出し、街は半壊、港湾治安隊に至っては壊滅状態に陥ってしまったことを俺達が詳細に知ったのは、次なる目的地である鉄道ターミナルの街ノヴァンに到着した頃だった。

後に、《ヴァルゴアン事変》とも呼ばれることになる一連の魔物との抗争、その端を発することとなった事件である。

第9話　仮勇者、初めて国境を越える

オーラキア帝国を囲むように敷かれた鉄道。その最南端に位置するターミナルの街ノヴァンは、港町ガルトの北西約２０キロほどの位置にある。

規模は先日のガルトに比べればかなり小規模であり、小さなホテルやレストラン、あるいは雑貨店がある程度だ。俺達と同様にオーラキア帝国へ、あるいは帝国からヴァルゴアン王国へと入国してきた人々で通りは溢れていたが、少々不穏な空気も漂っていた。

その原因はといえば、やはり先日のガルト襲撃事件である。

一晩のうちにガルトが魔物の大群に襲撃されて壊滅したという一報は、どうやら瞬時に王国中に、果ては国外へも広まったらしい。電話やインターネットなど存在しない世界だが、その代わりに高速通信手段としての魔法（ライトアロー）がある。時代劇の矢文よろしく、任意の相手に情報を送れるその魔法のおかげで、人々の間に情報が飛び交うのは速い。

あの場に留まって更に魔物に、あるいは《焔》の暗殺者に狙われることを避けたい俺達は、あの惨劇の夜が明ける前に、このノヴァンへと出発していた。馬車も失い、徹夜の強行軍とはなってしまったが、幸いにしていずれの襲撃も受けることなく、ノヴァンへと辿り

ついていた。

おそらく、これからガルトへ向かうことを予定していた者もいるのだろう。なにせ、あの街を一度は通らなければ王都サンエストルには辿り着けないのだ。途方にくれているように佇んでいる者達も、この中にもいるように思われた。

その細長いプラットホームには、蒸気機関車が一両だけ停まっていた。

蒸気機関車など、俺は元いた世界でもテレビや写真ぐらいでしか見たことがなかったが、それでも俺の知っている蒸気機関車とあまり変わりはなかった。連結車両も同じだ。異なる点はといえば、やはりその武装だろう。最前部と最後部の車両に備え付けられている各3門の砲塔が飛び出し、鋼鉄製の装甲は機関車の全車両を覆っていた。

「へぇ〜〜……これが」

「蒸気機関車。実際に乗るのは久しぶりね。幼い頃、父に連れられて帝都を出て以来かしら」

「俺も久しぶりに見るが、またえらく形状が変わったものだな。以

前見たときはまだこう、無骨な感じのする形状だったんだが。最新型ってことかな。……いずれにしても、こいつは速いぜ。魔物なんかじゃ、追いつけもしないからな。万が一魔物が取り付いても、可動式の砲塔があるからな、並の魔物程度だったらいちころだ」

感嘆する俺とクリスティアナに対し、解説するのはゲオルグ先生である。ガルトの一件以来、どこか沈みがちに思われた先生だが、どうやら取り越し苦労だったらしい。

そんな俺達の手には、それぞれ1つずつ大きめの鞄が握られていた。入っているのは、いずれも着替えや下着の類である。それも当然、ガルトでは着の身着のまま、貴重品だけを持って飛び出したのだ。着替えまで持ち出してきたわけではない。

というわけで、機関車の出発時刻までにノヴァンの街で買い揃えたわけであるが、出資者はありがたいことにゲオルグ先生だった。正直、機関車の乗車券だけでもかなりの負担であるところ、着替えの服の購入代まで出すとなると……と考えていたところだったので、非常に助かった。

それに対して、どこか憮然とした表情をしているのはクリスティアナである。いつもまるで男のような服装をしている彼女にしては珍しく、今日はスカート姿だった。それを希望したのはゲオルグ先生である。せっかくなのだから女性らしい服装もたまには、というゲオルグ先生の言葉と、出資者が彼であるということに、クリスティアナも折れてしまったらしい。どこか落ち着かない雰囲気を漂わせる彼女は、いつもの冷静沈着な雰囲気を考えるとどこか可愛らしくもあった。まぁ、これで腰の剣さえなければ元々の容貌からして立派な淑女なのだが……。

「しかしまぁ、うら若い女性に服を買って与えて、あまつさえそれを着ることは強要するなんて……ゲオルグ先生もなかなかいい趣味を持って――っ痛！」

馬鹿野郎の一言とともに振り下ろされた拳に殴られた跡は、まだ少し痛かった。

甲高い汽笛がプラットホームに響き渡る頃には、俺達は車両に乗り込んでいた。独特の重々しい駆動音と共に、機関車はゆっくりと動き始める。車両の最前部を見れば、煙突から濃い白煙を吐き出している。

テレビや写真では何度も見たことがあるが、考えてみれば乗るのは初めての蒸気機関車である。どこか興奮していることを自覚しつつ、俺達は前から４両目の車両の指定席へと腰掛けていた。基本的にすべて指定席制であり、座席もすべてがよくある２人掛けの向かい合ったものだ。

流れ始める外の景色を少しでも眺めたく、俺はさりげなく窓際の席に座った。向かいの窓側にクリスティアナが、そして俺の横にゲオルグ先生が座る。乗客はまばらのようで、俺達のほかにはぽつりぽ

つりと座っている乗客が見える程度だった。

「やっぱり、偉そうなことをほざいてもガキだな、タカオ。たかが蒸気機関車でそこまで高揚するなんてよ」

「放っといてくれ。男なら誰でもでかい乗り物を見ると昂ぶるものなんだ」

適当なことを言ってからかってくるゲオルグ先生をあしらい、俺は車窓の外へと目を向けた。

次第に速度を上げ始めた機関車は、プラットホームを出ると、高い木立がところどころに見える平野へと抜け出した。四角い車窓が映し出す景色はそればかりだ。このままレールは北上し、山間部を抜け、王国と帝国の国境を越えることになる。その後、帝国の三大砦《蒼の要塞》へと到着することになる。越境するための審査は事実上、そこで受けることになる。到着予定は、およそ5時間後だ。

車輪の打ち合う響きと、規則的な車両の揺れ。元いた世界でもそうだったが、こういう状況だとついつい眠気に襲われてしまう。横を見れば、なんとも素早いことにゲオルグ先生は夢の中へと旅立っていた。

向かいに座るクリスティアナはといえば、どこか退屈そうに窓の外

を眺めている。

「1つ、聞いてもいいだろうか」

「……何かしら？」

「貴女の、その剣技……素人が一朝一夕で身に付けられるものじゃない。いったい、誰に教えてもらったんだ？」

時間は大量にある。この際ということで、気になっていたことを聞いてみることとした。無碍にあしらわれるかとも思ったが、どうやら相手をしてくれるらしい。クリスティアナは視線を俺に向けてきた。

……真正面から見つめられると、妙に緊張するな。

「父の、知り合いよ。古い知人だということで、不定期だったけど父を訪ねてきていた。私は父に様々なことを教えてもらったけれど、剣技だけはその人から教えてもらった。後は、自己流よ」

懐かしげに目を細めるクリスティアナ。

彼女に剣技を教えた人間は、おそらく相当の実力の持ち主だったのだろう。いくら彼女が自己流で剣技を昇華させていったとはいえ、それも優れた土台があってこその話だ。

それにしても、様々な分野の知識だけならともかく、娘に剣技までも学ばさせるとは、彼女の父親――クレメンス・バーグマンはいったいどういう考え方の持ち主だったのか。

「ついでに、もう1つだけいいか？」

「貴方には何度も助けてもらっている。嫌という理由はないわ。……スリーサイズとか、セクハラと思えるような質問でなければ、だけど」

彼女の台詞の最後の部分だけは意図的に聞かなかったこととした。わずかに口の端を吊り上げているから、おそらく冗談なのだろうとは思うが……どうにも反応がしにくい。

（というより……この世界でもセクハラなんて言葉があるのか）

そういう言葉が出来上がるには、その手の問題があるからこそであり、何やら物悲しいような、憂鬱な気分にさせられた。

「俺とゲオルグ先生は、貴女の護衛だ。あらゆる脅威から護るのは当然のことだ」

「そう。それで、そのもう1つの質問は？」

念のため、周囲に人影がないことを確認して――。

「――帝位第一継承権者であるはずの貴女が、何故《焔》に狙われるんだ？」

思い切って、問うてみることにした。

クリスティアナはわずかに逡巡するような気配を見せたが、それも一瞬のこと、思い切りのいいこの女性ははっきりと口を開いた。

「私の父、クレメンス・バーグマンがオーラキア帝国の現皇帝エドワードの伯父にあたることは、知っているわね？」

「ああ。それについては、ゲオルグ先生から聞いている――」

すなわち、クリスティアナは現皇帝の従姉妹になるということだ。彼女の父親は帝国を出奔したから、事実上帝位の継承権は失われた。だが、その娘である彼女は、違う。なお、継承権を持っているのだ。

現在のところ、皇帝エドワードが婚姻するというような話は聞こえてこない。つまり、皇帝が様々な要因で皇帝の座を退くなり、子供が生まれるなりしなければ、彼女は次のオーラキア帝国の統治者ということになるのだ。

クリスティアナはひとつ頷くと、さらに言葉を紡ぐ。

「１０年前、オーラキア帝国とキルクハイム王国との間に《白竜戦争》が起こった。その結末については、世界中の人間が知ってのとおりよ」

《白竜戦争》においては、激しい戦いが幾度も繰り返されたが、戦線は膠着状態に陥った。両国ともに戦力が疲弊、国内においても厭戦ムードが高まったということもあり、停戦という形で一応の決着は見たが、事実上の講和でもあった。

以来、１０年間、オーラキア帝国とキルクハイム王国は根深い確執こそ残ったが、表面上は友好的な関係を築いてきた。

「だけど、半年前にキルクハイムの国王カルロスが突如として崩御した。第一子であるリベルト王子が跡を継ぐことになったけど、彼はそれよりもずっと前から王国の実権を握っていたわ。リベルト王子は《白竜戦争》の開戦時においても、主戦派の筆頭格。１０年前の停戦においても最後まで反対していたと言われている。つまり……」

「……まさか、もう一度戦争を起こすつもりなのか？」

そう言うと、クリスティアナはこくりと頷き、その表情をわずかに嫌悪に歪めた。

「だから、狙われているのは私だけではない。おそらく、私の従兄弟も《焔》に狙われているでしょうね」

「そういうことか。……だが、ちょっと待ってくれ」

――何故、クリスティアナはそんなことまで知っているんだ？

いくらなんでも、他国の事情に精通しすぎている。情報屋でもあるまいに、ヴァルゴアン王国の王都サンエストルで一般的な暮らしをしてきた女性が知りうるレベルの話ではない。まして皇帝暗殺ともなると、国家機密レベルの話だ。

そう問うと、クリスティアナはわずかに顔を伏せた。

「こうなることを、父は予測していたのでしょうね。だからなのかもしれない、私に剣技を――身を護る術を覚えさせたのは。父は、情報屋にも知り合いがいたようだから。……何故、《焔》がもう帝位継承権のない父まで狙ったのかは分からない。もしかしたら、リベルト王子は皇帝の血縁者を根絶やしにするつもりなのかもしれないわ……」

それには、思わず俺も顔を顰めた。

彼女の言葉通りなのだとしたら、そのリベルト王子とやらは相当の怨恨を帝国に対して抱いているのだろう。一国の統治を者が、自らの手を汚すことなく、金で暗殺者集団を雇って他国の人間を暗殺する――それだけで、既に相当に人倫に悖る行為だ。

「だけど……」

クリスティアナはさらに何か言いたげに口を開いたが、出てきたのは言葉ではなく溜息だけだった。

「……どうした？」

「いいえ、やめておく。いくらなんでも、これは妄想の域だわ。他人に話せるようなことじゃない」

それだけ言うと、彼女は再び視線を車窓の外へと移した。

蒸気機関車は、早くもオーラキア帝国との国境間際にまで到達していた。車窓の外は、平野から山間部へと移っていた。険しい山間の間の谷を抜けると、そこはもう帝国である。

クリスティアナはあれ以上に何も語ることはなく、その態度に釈然としないものを感じつつも、無理に聞き出すことは控えた。聞いたところで、やはり彼女が《焔》に狙われることでは変わらないのだから。

そこで、俺は彼女を誘って食堂車へと移動していた。車両の8両目が軽食を提供する食堂になっている。あいもかわらず眠りこけているゲオルグ先生は置いてきぼりだ。仮にこの列車内に《焔》の暗殺者が乗り込んでいて、まず先に護衛を狙ったとしても、ゲオルグ先生ならば大丈夫だろう。

人影もまばらな食堂の中、俺とクリスティアナはコーヒーを頼んで席に座った。

「私も、聞いてもいいかしら？」

「……駄目、というわけにはいかないだろ？　言っておくが、セクハラ質問はなしにしてくれ」

今回の旅の中では初めて他人に興味を示してきた彼女に少し当惑しつつ、俺は応じた。若干ひねくれていただろう俺の返答に、彼女はこれまた初めて素直な笑みを浮かべる。

――綺麗な微笑みだった。元々が美人なのに今まで笑っても嘲笑的なものばかりだったから、今回は非常に見惚れるものがある。

「貴方は今回の護衛任務のことがあるまで私のことなんて知らなかったでしょうけど、私は貴方のことは知っていたわ。サンエストル・ギルドの、新進気鋭の傭兵、とね」

「……そんなに有名か、俺は？」

「少なくとも、王都サンエストルにいる人間なら、噂を一度は聞いたことがあるでしょうね」

どことなく楽しげに語る彼女だが、俺はその噂とやらの内容に一抹の不安を覚えた。

この世界の常識その他をまったく知らないおかげで、いろいろと騒ぎを起こしたが、ひょっとしたらそのあたりが原因で噂になってしまっていたのだろうか……。この世界の世間一般の常識に精神面でも身体面でも慣れてくると、突拍子もないことをしていたことが思い起こされ、気恥ずかしくなる。

「それで、質問というのは？」

「貴方、ユリウス・アイスラー騎士団長の息子というのは本当かしら？」

「……はい？」

とんでもないことを言い出すクリスティアナに、俺は眉根を寄せて茫然とした。

いったい何をわけのわからないことを言い出すのだ、彼女は。

「違う。確かにアイスラー団長の世話になってはいるが、血の繋がりがあるわけじゃない」

「……そうかしら。貴方のその実力、いくらあのゲオルグ・ジョルテに師事しているからといっても、いくらなんでも強すぎるのよ。貴方がアイスラー騎士団長の息子なら、その強さも天賦の才ということで納得できるのだけれど……」

実のところ、ゲオルグ先生からもそういった疑問は受けていたのだ。だが、それ自体はアイスラー団長が否定してくれている。団長は昔、妻と息子を失っているから、実の息子のように扱ってくれていたが、それでも赤の他人であることに違いはない。

そもそも、同じ世界に生まれた人間、という繋がりすらないのだから。

「とにかく、違うと否定しておく。俺の両親は別にいるからな」

「そう……それなら、もう1つ。これは、答え難かったら、別にいいわ」

意趣返しのつもりか、先の俺の質問と同じような物言いをする彼女に苦笑しつつ、コーヒーを口に含む。

「貴方、恋人はいるかしら？」

「ぶふぉっ！？」

――危うく、コーヒーをクリスティアナ目掛けて吐き出すところで、なんとか踏みとどまった。これこそ、何を聞いてくるんだ彼女は！？

「……何故、そんなことを聞く？」

「純粋な好奇心、では駄目？」

質問に質問で返されると、実に答え難い。

というより、その物言いが俺としてはどうにも危ういのだ。こう、なんというか……女性にそういうことを言われると、どうしても一

瞬勘違い的な何かが、分かっていても脳裏に浮かんでくるというか、なんというか……。

「いない、と答えておく」

できるだけ動揺を悟らせないように、俺は一切の感情を込めずに返答した。

俺とて、男である。恋人が欲しいと思ったことぐらい、数知れずあるのだ。だが、それも元いた世界でのこと。こちらの異世界に召喚されたというもの、そういったことを考えている余裕はなかった。なにせ、生きていくための知識・技術を身に付けるためで精一杯だったのだから。

とはいえ、そろそろこちらの世界にも慣れてくると、そういった感情も当然湧き出てくるのだが……。なんというべきだろう。それは、なんだか――違う気がする。

一瞬、脳裏に幼馴染の顔が浮かんだが……まぁ、そういう仲ではなかったからな。

思い出し始めると、家族のことや、幼馴染の横によくくっついていた小柄な少女のことや、仲の良かった男友達の顔も浮かんでくる。際限がなくなるので、その辺りで思考を打ち切った。

「誤解のないように言っておくが、興味がないわけじゃないぞ。そういう嗜好があるわけじゃない。ただ、今までそういう機会がなか

ったただけだ」

「そう。なら、都合がいいわ」

何が都合がいいというのか、彼女は含むもののある笑みを漏らして、ジッと俺の顔を見つめてきた。

「私を帝都オーラキアまで護衛する、そこまでが任務で間違いないわね」

「あ、ああ。ただ、貴女は《焔》に狙われているから、当然安全圏まで連れて行くことが必要になってくるが……」

いまいちクリスティアナの質問の意図が掴めないままに、彼女に答える。

帝都に到着したら、クリスティアナを帝国の関係者に引き合わせるなりして、彼女の保護を求めるしかないだろう。ただ、どうやって彼女の身の証を立てるかという問題が出てくるが……。

このあたり、どうやらゲオルグ先生は考えがあるようだが、いったいどうするつもりなのだろうか？

「その後、貴方達はどうするつもり？　すぐにサンエストルに戻るのかしら？」

「いや、当面は帝都に滞在するつもりだ。今回の護衛任務を引き受

けるきっかけは、見聞を広めるためだからな。帝国内を見て回るなり、魔物退治で腕を磨くなりするつもりだ」

（まぁ、本来の目的はまったく別だが……）

近く行われる予定の《勇者召喚》。それにより召喚される予定の勇者に会うことこそが、今回の旅の、ゲオルグ先生もあずかり知らぬ俺の目的なのだ。まぁ、こちらもやはり、何かあてがあるというわけではないのだが……。

ただ、それを敢えて言う必要はない。

「なら、私の護衛を達成した後に、貴方へ個人的に依頼があるのだけれど、いいかしら。勿論、報酬は出すわ。ただ、ギルドは通さずにお願いしたいのよ」

「原則的に、傭兵はギルドを通してしか依頼は受けれないんだがな。依頼者からの直接依頼を受けることは、ギルドの禁止事項の１つでね」

「杓子定規ね。規則は破る者がいるからこそ規則として決められているのでしょう？」

「……そういうアウトローな考えは感心しない」

冗談よ、とおどけるクリスティアナ。冗談を言うのも結構だが、自分のこれまでの言動を考慮してから言って欲しいものだ。

「なら、あくまでも個人的なお願いでというわけにはいかないかしら。私も個人として、貴方も傭兵ではなく個人として。ただの頼み事ということで」

随分と食い下がる。こうまで言ってくる彼女の考えがいまいち読めなかった。

「……まぁ、いい。とりあえず内容を言ってみてくれないか。その内容を聞いて、決める。個人として受けるんだからな」

内容を聞いて、俺は愕然とした。いや、別段受けたくないという意味ではないのだが……。

オーラキア帝国南東部、帝国三大砦の１つ――《蒼の要塞》は、王都の王城にも劣らぬ巨大な建造物だった。蒸気機関車のレールは、そのまま要塞の腹の中へと続いている。

全長４００メートルに、全高２０メートルはあるだろうか。鋼鉄製の装甲に、等間隔で設置された巨大砲台８門、それに加え小型ながら数え切れないほどの砲台を擁するこの要塞は、ファンタジーの砦というより、まるでＳＦの戦艦が鎮座しているかのようだ。この要塞を見ると、ヴァルゴアン王国との技術力の違いを痛感させられる。

中央にある見張り台らしき塔に見えるのは、青い鷹が勇壮に翼を広げている図柄の描かれた旗だ。《蒼の騎士団》の軍団旗だろう。

「凄まじいな……これは」

「帝国の誇る武装要塞、ってな。こんな巨大砦が帝国には３つもあるんだから、帝国の武力も凄まじいものさ。鋼鉄製の装甲に、さらに上乗せして魔法による防護壁まで用意されているんだからな。過

去、一度も破られたことのない絶対要塞だ」

ようよう起き上がったゲオルグ先生は、眠たげな目をこする。まったく、よくもまぁ出発から到着の時間までずっと眠り続けていたものだ。暗殺者に狙われているというのに……まぁ、豪胆と評価するべきなのだろう。

荷物を手に、俺達は列車から降り立った。

プラットホームは、様々な人々で溢れかえっていた。俺達と同じ列車で降り立った者、あるいはこの列車に乗って王国へと旅立つ者、さらには《蒼の要塞》の名に相応しい青の制服に身を包んだ男達は鉄道警察だろうか。目深に被った帽子の下からは鋭い視線が垣間見え、周囲を油断なく監督していることが伺える。

こう人々でごった返したうえに屋内なのだから、まるで地下鉄の駅のようだ。

「一応、ここで鉄道警察の検問を受けることになる。よからぬ荷物を帝国に持ち込む野郎がいたら、ここで阻止するというわけだ」

このプラットホームからの出口は1つだけしかない。おまけにかなり厳しく所持品などチェックされるというから、どうしても人が滞留してしまうのだ。そういうところがわりといい加減なヴァルゴアン王国とは、やはり違う。

「どうせ時間がかかるだろうからな。ま、急いでも仕方がない。ちょっとそのあたりの椅子で待ってろ、飲み物でも買ってくる」

そう言って、ゲオルグ先生は人ごみの中へと消えていった。

近場にあった3人掛けの椅子を見つけた俺とクリスティアナは、2人して座って一息つく。

「懐かしいんじゃないのか、貴女にとっては久しぶりの帝国だろう？」

「まだ物心ついたばかりの頃に帝国を出たから、帝国がどんなところかだったなんてほとんど覚えてなんていないわ。貴方と同じように、初めて来たような感覚ね」

益体もない会話をしつつ、俺達はゲオルグ先生が戻るのを待った。そのうちに、空いていた椅子に1人の若い女性が座る。俺が真ん中に座っていたから、ちょうど2人の女性に挟まれる形だ。

この女性も、同じ列車に乗り合わせて帝国に来たところなのだろうか。疲れたように一息つくと、大きな鞄を膝の上にのせてゴソゴソと中を探り始める。荷物のチェックでもしているのだろう。やがて、意を決したように女性は立ち去っていった。

「……ん？」

そして、気づいた。先程まで女性が座っていた椅子の上に、紙切れが一片置かれていることに。もしや彼女の忘れ物だろうかと思い手に取ると、何やら文章が書かれていた。

何気なく読み上げて――俺は驚愕して立ち上がった。

「どうしたの？」

「いや……なんでもない」

クリスティアナには悟られぬように、俺は紙切れをポケットの中に押し込んだ。

紙切れには、綺麗な字でこう書かれていたのだ。

『騎士団長より、貴方を陰ながら補佐するように仰せつかっていま

す。

以下の3点、お伝えいたします。

《勇者召喚》の決行が若干早まりました。本日より3日後の夕方、帝都の皇城にて執り行われます。

また、《焔》の手練が相当数帝都に侵入しているようです。一層、警戒されるとよいかと思います。

最後に、ガルトが襲撃されたのと同様に、帝国の《白の要塞》も魔物の大群の襲撃を受けたようです。

――《黒い牙》より』

ヴァルゴアン王国騎士団特殊任務実行部隊、通称《黒い牙》。――ということは、先程の女性は《黒い牙》の隊員か。

さすがはスパイとでもいうべきか、まったく気がつかなかった。

しかし、アイスラー騎士団長もいつの間にそんな手配を……。

（まだ、心配されてるってことか……お世話をかけます、アイスラー団長）

第１０話　仮勇者の失言

オーラキア帝国の帝都オーケルンは、世界最大の都市であると同時に、世界でもっとも美しい景観を持つ都市でもある。

幻想的な美しささえ持つこの都市は、著名な建築家たちによる完全な都市計画に基づき、民家１つ１つに至るまで、その景観を損なわぬように整備されている。道路も綺麗に舗装され、南北を貫く大通りは街灯１つとっても建築家達のこだわりが垣間見える。

この白亜の街並みには感嘆をもらさずにはいられなかった。

「……凄い」

「帝都オーケルン、まさに世界の中心。世界に都市は数あれど、この帝都ほど美しいところは他にないだろうな」

人通りは非常に多く、通りに面したカフェやレストランは満員のようだった。人々を見れば、他の都市とは異なり、どことなく気品のようなものが感じられる。地図のようなものを持って歩いている人々は、どことなく観光客のように見えた。何か行事があるわけでも

なかろうに、この帝都を見物するためだけに訪れる――なるほど、それも分かるような気がした。
完全に都市としてのレベルが違う。それだけ、帝都オーケルンは訪れる者を魅了するのだ。

「それで、だ。クリスはどこに連れて行けばいいんだ？　まさかこのまま皇城に行くというわけじゃないだろ」
「ああ、そのことだが……ちょっとこの時間帯はまずいな。一晩宿泊して、明日の朝一で動こう。まぁ……“野郎”は今でも帝都で働いているはずだからな。ちょっと確認してくる」

ゲオルグ先生は若干言葉を濁すようにして答える。勝手知ったる帝都と言わんばかりに、有名らしいカフェを指定すると、そこで待っていてくれと言ってさっさと歩いていってしまった。

「本当に大丈夫なんだろうな……」

俺の横に立って帝都の景観を眺めている彼女――クリスティアナ・バーグマンは、もしかしたらいずれここの統治者になるかもしれない女性、帝位第一継承権者なのだ。そんな彼女が暗殺者集団《焔》に狙われているのだから、早急に帝国に保護を求める必要がある。
だが、それにあたって問題がある。――どうやって、彼女の身の証を立てるかということだ。

彼女の父親であり、現皇帝エドワードの伯父でもあるクレメンス・バーグマンが健在ならば、まだ話は違っていたのだろう。しかし、彼は《焔》の暗殺者の手にかかり、亡き者にされてしまった。クリスティアナはまだ幼い頃にクレメンスに連れられて帝国を出たから、どうやって彼女の身の証を立てるかということがどうしても問題になる。例えば、母親がいればまだいいのだろうが、生憎と彼女の母親はクリスティアナを産んでまもなく他界している。

何ら事情を知らぬ者から見て、傭兵2人組に連れられてやってきた女性を帝位第一継承権者だと言って、はたして誰が信用してくれるのだろう。

「……そう、難しく考えることはないんじゃないかしら」

腕を組んで悩んでいたせいだろうか、クリスティアナが揶揄するような瞳で話しかけてきた。

「考えもするさ。馬鹿正直に真正面から行ったとして、誰が信用してくれる？　“クリス”のことは帝国に記録として残っているだろうさ。だが、貴女は父親に連れられて帝国を出て以来、一度も帝国に戻っていないんだぞ。誰が、貴女がクリスであると証明してくれるんだ」

「だから、大丈夫よ」

さも自信ありげに言う彼女だが、はたしてどこにそんな根拠があるというのか。

……こういう場合、偽者だって疑われて、最悪投獄されたりするのが通例だろ。なんていうか、ファンタジー的に考えて。

思わず溜息をついてしまった俺に、クリスティアナはどこか含むもののある微笑とともに、艶のある視線を投げかけてきた。

「それよりも――貴方は他に心配しなければならないことがあるんじゃないかしら？　“タカオさん”？」

「……分かったよ。とにかく、そのカフェに行ってみよう」

ゲオルグ先生の指定したカフェは、帝都中央広場にほど近いところにあった。通りに面した壁がすべてガラス張りの、人目が気になるタイプには実に入りにくい店だ。こんな洒落た店、王都サンエストルにはなかったし、まして元の世界にいた頃でも入ったことはない。

店内に入ると、店員と客の視線が俺に集中する。その視線には、何故か敵意と嫉妬が含まれているように思われた。

思っていたことだが、クリスティアナがどうしても目立っている気がする。以前までは男装に近い服装をしていたからまだよかったものの、蒸気機関車での一件以来、どういう心変わりか女性らしい服装をするようになってしまった。男装していてもその整った容姿は目立つと言うのに、こうなってしまっては注目されることこのうえない。そんな美女を連れて歩けば、どうしても俺にまで視線が集まるのは仕方がないが、どうにも居心地がよろしくないのである。

おまけに、どうもクリスティアナの俺に対する態度が出会った頃と比べてかなり柔らかになっている気がして――……。

……

……

……

やめた。こういうのは、大抵が勘違いだからな。

店内壁際の丸テーブルの席に腰を下ろすと、俺はコーヒーを、クリスティアナは紅茶を頼んだ。相当気取った――もとい、洒落た店のようで、紅茶の種類はかなり豊富だ。

やがて運ばれてきたコーヒーを一口飲むと、ようやく落ち着いた感じがした。

思えば、《勇者召喚》が近日行われると、あの《黒い牙》の謎の女性に教えられてからというもの、気がはやって仕方がなかった。情報が正しいとすれば、《勇者召喚》が行われるのは明後日の夕方である。

待ち遠しい、といえば待ち遠しいのだろう。

なにせ元いた世界の住人が、この異世界にやってくるのかもしれないのだ。ひょっとしたら――と考え出すと、いろいろ期待せずにはいられない。

「――羨ましいわね」

「……へ？」

たぶん、相当間抜けな声を出していたのだろう。思考に没頭していた俺を引き起こしたクリスティアナは、胡乱げな瞳でこちらを見ていた。

「……上の空、ね。まだ考え込んでいるのかしら？」

「いや、今は別のことをだな……コホン、なんでもない。で、何が羨ましいんだ」

咳払いを1つ、聞き返した俺に、クリスティアナは何気なくガラス

の壁の外にある通りへと目を向けた。つられて視線を向けると、そこにあるのは、帝都の住人の喧噪だ。日暮れも近いというのに、その勢いはますます増しているようにも感じられた。

住人の服装だけ見ても、王都サンエストルとはえらく異なる。サンエストルの住人はまさにファンタジーのイメージ通りの格好をしていたが、この帝都では俺のよく知る、元いた世界に近いような感じだ。背広スーツのビジネスマンらしき男が忙しなく行き交い、このカフェの真正面にあるブティックでは、着飾ったマネキン人形が並び、その奥では数人の若い女性がショッピングを楽しんでいる。

ここが異世界なのだという感覚を、失いそうになってしまうほどだ。

「――羨ましいわ」

クリスティアナが溜息まじりに同じ台詞を繰り返したのを聞いて、俺は視線を戻した。その青色の瞳には、若干の羨望と哀しみがある。なにが、とは聞かない。だが、このまま何も喋らずにいるということも、人生経験少ない俺にはできなかった。

「……サンエストルでのことか？」

「――それでも、私も人並みの生活をしていたから。父も、私の本来の立場については気にせず、好きにさせてくれた。仲のいい友達だっていた――」

躊躇いがちに話すクリスティアナに、俺は今更ながらに愕然とした。

クリスティアナは、出会った時はまるで氷のように冷たい雰囲気をまとっており、精神的に不安定な様子はまったく見られなかった。だからこそ、俺も――ひょっとしたらゲオルグ先生もだが――忘れがちになっていたのだろう。《焔》に狙われ、魔物も活性化している時期に、帝都まで護衛しなければならないという危機感・焦燥感も先立っていたのかもしれない。

そう、これは当然のことだ。

彼女にだって、サンエストルでの暮らしがあって、築き上げてきた人間関係が、友人達がいたはずだ。それを、あまりにも理不尽な横暴によって、ほんの一瞬で失うことになってしまった。

アイスラー騎士団長によれば、彼女の父、クレメンス・バーグマンは惨殺されていたのだという。それが《焔》のやり方なのか、それとも暗殺を依頼した人物の意図によるものなのかは分からない。いずれにせよ、クレメンスは――四肢を分断され、臓物を撒き散らし、原形を留めぬほどに“破壊”された血の海の中で、発見されたのだ。それを、クリスティアナは不幸なことに目撃している。

もし、俺がそのような事態に遭遇したとして――朝は元気でいたはずの両親が、帰宅してみれば目を背けるほどに無惨な姿で、“肉塊”に変わっていたとして――はたして、まともでいられるだろうか……？

少なくとも、俺は無理だろう。考えるだけでも胸糞悪くなる。自棄になるか、自閉するか……いずれにせよ、刹那的・破滅的な行動に身を窶すことになるのではなかろうか。

とすれば、出会った当初のクリスティアナの状態は――……。

質問したことを後悔する思いが、そのまま表情に表れてしまったのだろう。クリスティアナはわずかに相好を崩して、口を開く。

「あまり、気にしてくれなくていいわ。……もう、自分の中では決着をつけたことだから」

「そう、か……」

その後に口にしたコーヒーからは、あまり香りが感じられなかった――。

帝都オーケルンの中心。白亜の皇城は、オーラキア帝国の威信を体現しているかのように堂々とそびえ立っていた。

完全に計算し尽されたその設計は白亜の街並みと見事に調和している。形自体は、それほど大きなものではない。だが、その水晶細工のような美しさには、感嘆の溜息を漏らさずにはいられないほどだ。荘厳華麗なその威容は、俺の中にあるファンタジーの城のイメージをさらに超越していた。

俺達は、そんな城の内部の一室にいた。

窓の外には、これまた見事に整備された前庭が広がっている。陽光に照らされた緑が煌く様は、壮観そのものだ。端の方には、この城を訪れる者達の馬車が数台ほど停まっている。

何故か、急にファンタジーの世界に入り込んでしまった――今まで

も十分ファンタジーだったのだが――ような気がしてしまう。
若干眩暈を覚えつつ、俺はある男とテーブルで話しこむゲオルグ先生に視線を向けた。

「まったく……今更ひょっこり現れるとはな。お前はいつも突然だ」
「そう怒るなよ。帝都で頼れる奴といえば、お前ぐらいしか思い当たらなかったんだ」

ゲオルグ先生と向かって話すのは、白色の制服を着た壮年の男だった。彫りの深い顔立ちに、短い銀色の髪。すらりとした長身痩躯の男は、顔を顰めて憮然とした様子でゲオルグ先生を睨んでいた。

カフェで少々気まずい思いをすることとなったあの後、俺達は戻ってきたゲオルグ先生に連れられて皇城へと入った。いきなり入城することができただけでも驚きなのだが、挙句部屋を与えられて宿泊することになったのだから信じられない。

それもこれも、ゲオルグ先生がこの男――帝国近衛騎士のザック・ミラーと古い知り合いであったことによる。どうやらこのザックという男、近衛騎士でも相当の役職にあるらしく、ここまで手配してくれたらしい。

「あまり気安く考えてくれるなよ。お前と馬鹿ばかりやっていた昔ならともかく、今の俺には近衛騎士という立場があるんだ。今回の

ことだって、相当無理を言って捻じ込んだんだぞ？　ただでさえ貴族の出じゃないからって、いろいろと８貴族に睨まれやすいんだ」

「分かってるよ、ザック。お前がこの１０年、死に物狂いで努力したってことぐらいな。お前は帝国の栄えある近衛騎士様で、対して俺はしがない傭兵だ」

苦労や苦悩を声に乗せるようにして話すザックに、ゲオルグ先生は自嘲気味に応じた。どういう関係なのかはまだ訊いていないが、会話から察するにそれなりに親しい間柄のようだ。

「まぁ、いいさ。後でたっぷりと愚痴を聞かせてやるな。それはともかく、だ。……彼女が、そうなのか？」

そう言ってザックが視線を向けた先には、ベッドの端に腰掛けるクリスティアナがいた。どうやら事情は既にゲオルグ先生から聞いているらしい。あからさまに疑惑の視線を向けるザックだったが、クリスティアナはそんな視線をあの怜悧な瞳で受けていた。

緊張しているからだろうか、クリスティアナは入城してからというもの急に無口になってしまっていた。

「今でも信じられんよ、俺は。いや、ゲオルグが遥々帝都まで来て俺に会いに来るんだ。つまらない嘘ではないことぐらい分かるんだが……クレメンス様の娘――陛下の従姉妹だと……」

むぅ、と唸るザック。

「失礼します」

静かに扉が叩かれたかと思うと、返事を待つことなく扉が開かれた。入ってきたのは、やや緊張した面持ちの栗色の髪の女性騎士だ。俺と同年代ぐらいだろうか。

「ミラー隊長、謁見許可が出ました。執務室までお願いします」

「分かった。下がっていいぞ」

ザックが答えると、女性騎士は恭しく敬礼して退室した。隊長と呼んだということは、やはりこのザックという男は相当の地位にいるようだ。

それにしても……謁見？

「と、いうわけだ。陛下をあまりお待たせするわけにもいかん。早速向かうぞ」

「よしきた。それじゃあ頼むぞ、タカオ。失礼のないようにな」

「……は？」

早々と事を進めていく2人に若干遅れてしまった俺は、当惑の声を漏らした。

「ちょっと待ってくれ、先生。何が頼むで、何が失礼のないように、なんだ？　さっぱり意味が分からないんだが……」

「決まってるだろ。これから皇帝陛下と謁見するんだよ。謁見するのは、クリスティアナとお前だけだ。俺はこの部屋で待っているからな」

事も無げに言ってのけるゲオルグ先生に、俺は唖然とした。

城内は外見に負けず劣らず荘厳だった。通路の床はどうやら大理石らしい、そんな床を歩くのは初めての体験だ。天井は高く、上方の取り窓は採光用となっているようで、そこから差し込む光が通路を明るく照らしている。

前を歩くザックに続いて、クリスティアナと共に歩く。時折すれ違う貴族や文官らしき人々から、好奇の視線を向けられるのを感じた。どちらかといえば、クリスティアナに向けられる視線がほとんどだ。そのうえ、わりと年配の人間からは好奇というよりは驚愕と当惑の視線を向けれているように見える。はて、何がそんなに彼らを注目せしめるのか。

やがて通されたのは、ソファがいくつか並べられた広間だった。それでも、ホテルのロビーほどの大きさがあるだろう。どうやら、ここが待合室のようなものらしく、正面の両開きの扉の横にはカウンターも設置されている。

ザックがカウンターの女性に何やら話すと、俺とクリスティアナは促されるままにソファに腰を下ろすこととなった。

「……アサクラ君、でよかったかな？　大変だろう、ゲオルグの気まぐれの相手をするのは」

「いえ――そうでもないです、が」

俺の横に同じく腰を下ろしたザックは、親しげな声で話しかけてきた。俺がゲオルグ先生の教えを受けてきたことも、どうやら聞いているらしい。

「ゲオルグとは故郷が同じで、幼馴染なんだ。共に帝国の騎士とし

て、切磋琢磨した仲だったんだが……奴は《白竜戦争》の直後に、帝国の騎士を辞めてしまってね。騎士としての仕事に嫌気が差したのか、それともあの凄惨な戦争に思うところでもあったのか……帝国すら飛び出して、流浪の旅に出てしまった。奴とはそれっきりで、風の噂に傭兵になったことは聞いていたんだが……昨日になって突然会いに来るんだからな。随分とたまげたよ」

ザックは過去を懐かしむように表情を和らげて虚空を見つめていた。……それにしても、ゲオルグ先生が帝国の騎士だったというのは初耳だ。思い起こしてみれば、ゲオルグ先生の過去についてはあまり訊かなかったような気もする。

まぁ、それはお互い様というものか。俺も、ゲオルグ先生には過去のことは殆ど話していない。……というより、違う世界から来ましたなんて、正直に話すわけにはいかない。

「今回のことにしてもな、奴はばつが悪くて陛下に顔を見せられないのさ。１０年前は陛下もまだ皇太子で、わりと気安く俺達のような下級騎士にも声をかけてくださっていたからな。俺もゲオルグも、当時から顔を覚えられて親しくさせていただいたものだ。……それが、事情があるとはいえ挨拶もなしに出奔したとあっては、な」

成程、ゲオルグ先生の先程の態度はそういうわけか。

「ところで、本当に大丈夫なのか？　君達を疑うわけじゃないが、ゲオルグの奴は自信たっぷりだったからね。とにかく陛下に謁見さ

えすれば、クリスティアナ・バーグマンの身の証を立てられる、と豪語してな。俺も迫力負けしてしまったんだが」

「いや、それについては……」

なんとも答えようがない俺は、助けを求めるようにクリスティアナに視線を向ける。

やはり大したものだ。これから一国の統治者に謁見するというのに、緊張1つ見せない彼女の様子に、俺はある意味感服した。彼女はわずかに口の端を上げ、大丈夫だと一言応じる。

「昨日から言っているでしょう。そう、難しく考えることはないって」

（だから、その根拠を教えて欲しいんだがな……）

さすがにザックの前で口に出して言うわけにも行かず、俺は歯痒さと、これからどうなるのかという不安と緊張で、息苦しさすら感じてきていた。

だが、時間は緊張している時こそ、ゆっくりと、しかし恐ろしく速く流れるもの。

正面の両開きの扉が開いたかと思うと、中から制服を着た近衛騎士が1人出てきて、入室を許可する。

俺は胸に溜まった緊張を少しでも吐き出そうと努力して大きく深呼吸すると、ザックに続いて立ち上がった。少し遅れて、クリスティアナが立ち上がる。改めてザックの後に続き、俺達は皇帝の執務室へと足を踏み入れた。

待合室も広かったが、執務室は更に広かった。床一面に絨毯が敷き詰められており、部屋の左右には近衛騎士と思しき面々が直立不動で整列していた。それを目にしてしまった瞬間、俺はさらに緊張の度合いを高めた。……心臓を吐き出しそうだ。

執務室の正面奥では、壁一面がガラスとなっていた。そこからは帝都オーケルンの美しい街並みがまさに一望できる。その前に、大きな黒塗りの机が1つあり、右側に老年の男が控えていた。そして机の向こう側には、金髪の男が1人、座っている。

オーラキア帝国皇帝、エドワード・ウィリアムズその人だ。

ザックの背後で、近衛騎士達の列の間を通り抜ける俺達を、皇帝が柔らかな眼差しで一瞥する。

艶やかな金髪に、穏やかな顔つき。28歳という年齢で広大な帝国を統治する支配者にしては、幼さの垣間見える顔立ちであったが、溢れ出るような高貴さと気品がそれを打ち消している。生まれの良さというのは、こういうことをいうのだろう。どことなく垂れ目な感のある柔和な目つきのせいか、それほど威圧感は感じない。だが、その透き通るような青い瞳は、まるで映す者すべてを見透かすよう

な、不思議な輝きがあった。
皇帝の正面まで進み出たザックは、肩膝をついて腰を落とした。俺とクリスティアナはそれを前にしても直立不動で茫然としていた。

「突然の謁見、お許しください、陛下」

「気にするな、ザック。どうせ暇な身だ」

人懐こい笑みを浮かべ、エドワードはゆっくりと立ち上がった。身にまとった煌びやかな服も加わり、その動きは非常に洗練されたものに見える。恐れ入ります、とザックが立ち上がる。

「それで、どういった用件なんだ。近衛騎士団長の君がこうして無理に謁見をねじ込んできたんだ。余程のことなんだろう？　その後ろの2人が関係しているのかい？」

「はぁ、それが……なんと申しましょうか……」

ザックが言い淀むと、エドワードは怪訝な顔をした。俺はといえば、もはや背中が冷や汗だらけでじっとりと濡れており、卒倒寸前だ。ふと横を見れば、平常どおりのクリスティアナの表情。――ああ羨ましい、どうしてそんなに冷静でいられるんだ。
場の雰囲気に耐えられず――いや、単にこれ以上緊張に耐えられなくなっただけなのだが――俺は1歩進み出た。ザックがいいのか、

と視線を投げてくる。

「頼めるか、アサクラ君……？」

「ええ。……皇帝陛下、初めてお目にかかります。ヴァルゴアン王国王都サンエストルの傭兵、タカオ・アサクラと申します」

ザックの見様見真似で敬礼すると、エドワードはほぅと息を漏らした。

「タカオ・アサクラ……ヴァルゴアンでは珍しい名前だね」

「恐れ入ります」

ひとまず、拙い敬語ながら挨拶は無事に終わったことに少し気が抜ける。――思えば、それがいけなかったのだ。

エドワードが俺からクリスティアナへと視線を向けるのにつられるようにして、言葉が勝手に口をついて出る。

「そして、彼女は――クリスティアナ・バーグマン。陛下の従姉妹です――――……！！？」

（……しまったッ！？）

口から出てきたのは、前置きもへったくれもない、あまりにも直球ど真ん中の牽制もなにもあったものじゃない、単純明快快刀乱麻の言葉だった。……もう駄目だ……自分でも何を言っているのか分からん。

執務室が一気にざわめき始めた。全身から冷汗を流し始めた俺を尻目に、エドワードは顎に手を這わせると、目つきを若干鋭くしてクリスティアナを見つめる。対して、早々と秘密を暴露された――いや、暴露したのは俺なのだが――クリスティアナはといえば、実に堂々とした、どこかエドワードにも似ている威厳をある姿でその視線を受け止めている。

「……まさか、クレメンス叔父貴の――？」

思い当たるところがあったのか、やがてクリスティアナの父の名を口にするエドワード。彼女はそれには何の言葉も返さず、上着のポケットから何かを取り出した。

それは、金色の懐中時計だ。蓋を開けて、エドワードに差し出す。

「父の、形見よ」

「……！！　エドガー、見てみろ」

その懐中時計を見るなり表情を豹変させたエドワードは、クリスティアナから奪い取るようにして時計を手に取ると、先程まで唯一表情を変えずに黒塗りの机の横に佇んでいた老年の男を呼び寄せる。顔が笑い皺で埋もれた、温厚を絵に描いたような老人だ。

しかし、その老人――エドガーはただ首を縦に振るだけでその場を動こうとしなかった。

「陛下、もはや間違いありません。……これ、ミラー騎士団長。人払いをなさい。陛下と私、それにそこの2人、そして貴方以外の者を、全てこの部屋から出すのです。ここから先の話は、一介の近衛騎士が聞いてよい話ではありません」

「は――はッ！」

エドガーはしわがれた声で一息に指示すると、これまで事態の推移をただ見守るだけだったザックがハッとしたように動き出した。続く指示に、近衛騎士達が整列して執務室から退室していく。

残されたのは、懐中時計を見つめて悲しげな顔をするエドワードと、皺だらけの顔ゆえに表情の読めないエドガー、無言で佇むクリスティアナに、これから何が起こるのかと事態についていけない俺とザックだ。

一挙に覇気を失った様子のエドワードは、力なく机の端に腰掛ける。

「そうか、形見か……叔父貴は、死んだのか……」

もはや隠すことはなにもない。俺は今回の一件について最初から話した。

ただし、《焔》の雇い主が何者であるかについては意図的に伏せた。キルクハイム王国のリベルト王子と断言してしまうのは些か憚られたからだ。証拠はないし、あるいはまったく別の人物がクレメンスとクリスティアナの命を狙っている可能性もある。事が国家的対立に発展しかねない以上、予断でものをいうのは控えることとした。

全てを話しきった後、エドワードの口から漏れたのは力のない吐息だった。

「……クリスティアナ、私のことを覚えている――はずが、ないだろうな。最後に会ったのは、お前がまだ2つか3つの頃だった。……お前は、母親に実によく似ている。まるでシンシアの生き写しだ。そして、この懐中時計……これは昔、先代の皇帝が叔父貴に……すなわち、帝国を旅立つお前の父親に譲ったものなのだ」

郷愁と落胆、それに悲哀に満ちた表情を見せるエドワードは、囁く

ように言った。カチャカチャと懐中時計の蓋を開けたり閉じたり、その音を頼りに昔を思い出しているかのようだ。

「ふむん……過去にも、帝国を出奔なされたクレメンス様のご子息だのご令嬢だのを連れてきて、権力の中枢に入り込もうとした恥知らずが何人もおりました」

エドガーが禿げた頭を撫でつけながら、若干声のトーンを落として言う。

クリスティアナは、クレメンスが帝国を出奔して事実上帝位継承権を放棄した時点で、唯一の帝位継承者である。そんな彼女が帝国に不在と知れれば、偽者をうち立てて、あわよくば帝国の中枢に食い込もうと、あるいは取り入ろうとする者が現れるのは、ある種当然のことといえるだろう。

「まぁ、そんな彼らのいずれもが、間抜けな嘘しか並べ立てられず、皇帝陛下の従姉妹を騙った罪に問われたわけではありますが」

ほっほ、とエドガーは温厚そうな笑い声の中にも、底冷えするような声色で言った。……偽のクリスティアナを騙った者達はその後どうなったのか……まぁ、語るに及ぶまい。

まるで孫でも見るかのような柔らかな目で、クリスティアナに視線を向ける。

「やはり今回も、先例に則り、貴女が本物であるということを確かめるべきなのでしょうが……先に、確たる証拠を出されてしまったようで。何より、貴女のその母親そっくりの容姿、そして父親そっくりの雰囲気……いやはや、あのクレメンス様とシンシア様に再会したような気分でございます。まさにお二方の忘れ形見。認めないわけにはいかぬでしょうな」

「では……！」

「ああ。タカオ・アサクラといったな。よくぞ、我が従姉妹を帝国まで連れてきてくれた。心から、礼を言う。そして、帝国皇帝としてお前を称えよう。よくぞ、《焔》の襲撃に耐え切った」

エドワードのその労いの言葉こそがまさに、王都サンエストルより続いた護衛任務達成の瞬間だった。

良かった、と無事に依頼を達成できたことに対する安堵の吐息をつく。これまでも苦労した任務は多々あったが、ここまで達成感のあるものはそうはない。

「エドガー、クリスティアナにひとまず部屋を用意してやれ。今後のことを、彼女には決めてもらわねばならん」

「御意に」

恭しく頭を上げると、エドガーはゆっくりとした足取りで執務室から出て行った。

それを見計らったかのように、クリスティアナが俺に歩み寄ってくる。

「――だから、言ったでしょう？　そんなに心配しなくても大丈夫だと」

「……まったく貴女という人は……。懐中時計なんて証を持っていたなんで、初めて知った。ゲオルグ先生は知っていたのか？」

コクリ、と何らの衒いもなく頷くクリスティアナ。……ちくしょうッ、それじゃあ悩んでいたのは俺1人だけかッ！！

「父から教わったことよ。切り札は最後の最後まで取っておけ、とね」

あっけらかんと言ってのけるクリスティアナに、俺は呆然とした。

（くそ……剣技のことといい、人騒がせな父娘だ！）

何はともあれ――《勇者召喚》は、明日だ。

第１１話　人脈を広げる仮勇者

久しぶりに、夢を見た。

ふかふかの綺麗なベッドという、長旅で忘れかけていた感触に包まれて眠ることができたからかもしれない。

朝の忙しない身支度。朝食もおざなりに制服に着替え、鞄をひっつかんで家を駆け出る。背中から聞こえてくるのは、聞き飽きた母親の呆れ声だ。

玄関を出れば、必ずと言っていいほど、アイツがいる。それが必然であるかのようにアイツはそこにいて、鞄を片手に俺を急かす。いつから始まったか分からない、お互いによくも飽きないものだと我ながら考えてしまう、毎朝の習慣。

２人して毎朝教室に駆け込むようにして登校してくることを、冷やかされるのも、呆れられるのも、あるいは妬まれるのも、俺達にとってはもう慣れたものだった。

それは全て、懐かしい“思い出”だ。

こんな夢を見るような何らかのきっかけが、ここ数日であっただろうか……？

何にせよ、おかげで目覚めはあまりよくなかった。この毎朝の習慣を失ってしまってから、もう2年ほど経つ。郷愁に駆られるので、あまり思い出さないようにしていたというのに。

……アイツは――今村響子は、いったいどうしているのだろう。

この異世界と、元いた世界の時間の流れが一緒なのだとすれば、彼女も２０歳を迎えているはずだ。頭脳明晰で、学内試験でも常にトップに君臨し続けた彼女のことである、さぞやいい大学にでも入ったのではなかろうか……。

俺は、なんとしても故郷へと帰還してみせる。

帰還してみせるが――……多分、響子の隣にはもう別の誰かがいるんだろうな……。

オーラキア帝国皇帝との謁見を辛くも乗り越え、クリスティアナの

護衛という任務を遂に果たした翌日、俺はいまだ皇城にいた。

皇帝エドワードの好意により、長旅の疲れを癒してほしいと部屋を与えられたのである。といっても、昨日と同じ部屋ではあるが。ゲオルグ先生にも同様の措置が与えられて同室に滞在することになったのだが、近衛騎士団のわりと年嵩の騎士達に拉致――もとい、連れて行かれてしまった。どうやらザックの他にも古い知り合いが多数いるようで、きっと久しぶりの再会を祝しているのだろう……多分。

そして俺の待遇といえば、これが意外なことにかなり良い。

いくら帝位第一継承権者を無事に帝国まで護衛してきたとはいえ、俺自身は所詮素性の知れぬ傭兵である。最悪、役目を果たせばお払い箱ということで、放逐されることも覚悟していた。それが、部屋を与えられ、城内は一部を除いて自由に歩き回れる。先程まで、物珍しさのあまり城内を歩き回ってきて、部屋に戻ってきたところだ。なんとも嬉しい誤算である。

ところでクリスティアナだが、彼女はどうやら俺が立ち入れない区画に部屋を用意されているらしい。

よくよく考えてみれば、クリスティアナが帝位第一継承権者であると皇帝自ら認めてしまい、そのうえ《焔》という暗殺者達に狙われている以上、今後彼女は手厚く保護されることになるだろう。

（こういう場合――クリスからの“依頼”はどうすればいいんだ……？）

あの蒸気機関車の車内で、クリスティアナからの“個人的な依頼”――……と、そこではたと気づいた。

それよりも、もっと考えなければならないことがあるのだ。

すなわち、本日の夜、遂に待ち望んだ――という言い方も変だが、《勇者召喚》が行われるのだ。

魔王討伐のために、異世界より――俺の故郷より、勇者が召喚される。

そもそも俺が帝国まで旅した目的は、今回召喚される勇者に会うことにあるのだから。

会ったところで、どうにかなるというわけでもないかもしれない。異世界に召喚された者同士、不運にも召喚された身の上を嘆き合い、慰め合うだけになるかもしれない。

だが、それでも俺は、彼もしくは彼女に会ってみたい。俺と同じ世界の人間に。

しかし、そこで1つの問題にぶち当たる。

（さすがに、《勇者召喚》の儀式の場には行けそうもないな……）

《勇者召喚》が今晩、この皇城で、宮廷魔術師達によって行われることは分かっている。だが、それ以外はまったく分からないのである。

その様子見も兼ねて、今朝は城の中を歩き回ったのだが、城内にいる貴族や騎士達からも今晩《勇者召喚》というこの世界の命運を左右しかねない儀式が行われるという雰囲気が感じられない。大事な儀式だ、皇帝以下、一部の者しか知らない可能性もある。

となると、召喚されてから後に接触するということになるのだが、はたしてすんなりと会えるかどうか……？

窓際に腰掛け、またしても悩み事ができてしまったことに懊悩していた俺を、ノックの音が現実に立ち返らせた。いったい誰だと思いつつ扉へと向かったが、それよりも早く扉は開かれる。

「失礼するよ」

開かれた扉の向こうには、地味な茶色のジャケットとスラックスを身につけた、３０代半ばぐらいの男がいた。銀の細眼鏡をかけた知的な顔立ちで、薄い茶髪をオールバックにしている。

男は俺を見るや否や、遠慮なくずかずかと部屋に入り込んできた。そして、眼鏡の奥の双眸でじろりと睨むように俺を見る。

「君が、クリスティアナ様をこの帝国まで護衛した、タカオ・アサクラだな？」

「あ、ああ……そうだけど、貴方は？」

当惑する俺をよそに、男はまるで観察するような目つきで俺の頭の先から足元まで視線を上下させる。……なんなんだ、いったい。

「あの……」

「ふむ――……いや、不躾なことをしてすまない。私の名前は、オリヴァー・パウル。よろしく頼むよ」

一転、男――オリヴァーは人懐こい笑みを浮かべて手を差し出してきた。急変した雰囲気に戸惑いつつ、手を握る。

（オリヴァー・パウル……パウル……あれ、どこかで聞いたことがあるような、ないような……？）

わりと最近に、どこかでその名前が出てきたような気がするのだが、どうにも思い出せない。

「少し話があるんだが、来てくれないか」

有無を言わさぬオリヴァーの言葉に、俺はひとまず従うことにした。城内にいるということは少なくとも公人であるし、なによりパウルという名前が引っかかる。自分の部屋で話がしたいというオリヴァーに応じて通路へ出ると、俺は彼の後ろをついて歩いた。

「まずは、私からも礼を言わせてもらう。よくぞ、クリスティアナ様をこの帝都まで連れてきてくれた。これで、オーラキアも安泰というものだ」

「……ありがとうございます」

背中越しに、事務的な口調で礼を言うオリヴァー。

大理石の通路をかつかつと音を立てて早足で歩く彼について歩くと、すれちがう騎士達が彼を見て一様に足を止めて頭を下げる。それに対し、オリヴァーは軽く手を上げるばかりであることから、彼が相当高い地位にあることがうかがえる。

「君は剣を使うようだが……《焔》の暗殺者の襲撃、それに港町ガルトでの魔物襲撃事件、それらをいずれも切り抜けてみせた君の剣技は大したものだ。さすが、騎士ゲオルグに師事しているだけのことはある……おっと、元騎士だったな」

どうやら、オリヴァーは既に俺のことについて調べているらしい。《焔》のことはともかく、ガルトの一件や、ゲオルグ先生に剣技を教わったことなど、俺は一言も話した覚えはない。……いったい、何のために？

話しているうちに、立ち入ることを許可されていない区画に入っていることに気づく。立ち入り禁止区域、すなわち、皇帝の私室であったり、いわゆるお偉方の部屋があるような場所だ。クリスティアナに用意された部屋もこの区画にある。

いよいよ、オリヴァーの地位が疑わしくなってきたわけだが、疑念

をよそに彼はなおも言葉を発する。

「ところで君は――先日の《白の要塞》での一件を聞いているか？」

「……は？」

突然の話題の転換に戸惑っていると、ようやくオリヴァーは自分の部屋にたどり着いたらしく、立ち止まった。扉の横に近衛騎士が直立不動で立ち、オリヴァーの姿を認めるや、素早い動きで敬礼する。

皇城の上階にあると思われるこの区画は、通路の先に部屋が横並びに並んでおり、その扉の横にはいずれも歩哨の如く近衛騎士達が立っていた。

と――隣の部屋の扉が開き、1人の老人が出てきた。先日の皇帝の謁見の席にもいた、エドガーとかいう老人だ。エドガーはオリヴァーを見つけると、親しげな様子で手を挙げる。

「やあ、オリヴァー。君は行かないのかね？　もう始まっているはずだが……」

「これはビリンガム侯爵。生憎だが、私は遠慮させてもらう。より、興味を魅かれる者に出遭えたのでな」

オリヴァーは恭しく会釈すると、すぐに興味を失ったように部屋の

中へと入っていた。それを見て、エドガーがやれやれと溜息をつく。

「まったく、少しは立場を考えればよいものを……アサクラ殿、貴方もある意味厄介な男に目を付けられましたな」

「は、はぁ……」

苦笑混じりに意味深な言葉を残して、エドガーはゆっくりと通路を歩いていった。

オリヴァーの部屋は、まるで図書館のようだった。採光用と思しき窓のある位置以外はすべてが本棚となっており、天井まで到達している。収められている数々の本も、表題を見ただけでも理解できそうにない、難しそうな内容の本ばかりだ。

これらの本棚に囲まれるようにしてオリヴァーの執務机があり、机上は様々な書類が乱雑に積み重ねられ、今にも雪崩を起こしそうなほどに山となっていた。オリヴァーは机の真正面にある応接用のソファに腰掛け、俺に向かいのソファをすすめた。言われるがままに、

柔らかな感触のソファに腰を下ろす。

「すまない、老人のせいで話が途中になったな。君は、《白の要塞》が魔物の大群の襲撃を受けた一件については、知っているか？」

「……いえ」

一応、そういう一件があったこと自体は知っているが、詳細までは知らない。敢えて首を横に振ると、オリヴァーは双眸を鋭くして１つ頷き、厳かに口を開いた。

「ふむん……ならば、前置きとして説明しておこう。要は、君が港町ガルトで体験したことと一緒だ。先日の真夜中、《白の要塞》は突如として魔物の大群……いや、軍団と表現するべきだろう、その襲撃を受けた」

ガルトでの一件と同じく、あまりにも突然の襲撃に、《白の要塞》を守護する《白の騎士団》も当初は浮き足立ったらしい。

だが、そこは帝国が世界に誇る三大騎士団の一角。すぐに態勢を立て直し、魔物を迎撃した。もとより、《白の要塞》の戦艦の如き防壁は簡単に打ち崩せるものではない。世界最強の騎士団と、最強の砦。この２つが合わされば、魔物の大群などものともしない。

しかし、それをもってなお、魔物の襲撃は苛烈であり、さらに――恐るべき事態が起こってしまったそうだ。

「恐るべき事態？」

「魔王の下僕――《闇の騎士団》が遂に現れたのだ」

A級の魔物すら凌駕する、伝説上の魔物。魔王の忠実なる手下、《闇の騎士団》。

この魔物達が、《白の騎士団》に猛然と襲い掛かったのだという。魔法とは異なる、正体不明の不可思議な能力を使う《闇の騎士団》に、《白の騎士団》は総崩れとはいかないまでもかなりの痛手を受けた。

この《闇の騎士団》に対抗できたのは、《白の騎士団》団長、グラハム・ディーリアスの奮戦があってこそのことだそうだ。

「ディーリアスの活躍もあってなんとか退けることはできた。だが、《白の騎士団》も《白の要塞》も、相当の被害を被ってしまった。――私の予想していた通りに。もはや事態は一刻の猶予も許さないところまで来てしまっている。そこで、私は手始めに傭兵ギルドに働きかけることとしたのだ」

魔物や、《闇の騎士団》、ひいては復活した魔王に対抗するために――“新たな騎士団”を結成するのだと、オリヴァーは続けた。

……なんだか、話の風向きがおかしい。

「待ってくれ、オリヴァーさん。魔王に対抗するためには、勇者の力が、大いなる光の力が必要なはずだ。そのための《勇者召喚》で――この帝国の宮廷魔術師が行うんじゃないのか？」

――まぁ、その《勇者召喚》が今晩行われるということを、俺は知っているわけだが。

だが、俺の質問に対して、オリヴァーはまるで嘲笑うかのような態度で鼻を鳴らした。

「本当にあてになるかどうかすら分からない伝承や御伽噺にすがりつくことほど、愚かなことはない。魔王の復活は、全世界の危機。であるならば、全世界の力を結集して、魔王との来るべき戦争に備えるべきなのだ」

力強く、さながら演説するかのように語るオリヴァーに、当惑も一瞬、俺は先程からの引っかかりが――遂に氷解するのを感じた。

パウルという名前に対して感じていた、引っかかり。

そう、王都サンエストルでユリウス・アイスラー騎士団長より教えてもらった話だ。

世界中の傭兵に対し、高額の報酬を用意し、《白の要塞》の警護をギルドに依頼。軍――すなわち三大騎士団と密接に繋がり、魔王に対して全世界の力を結集すべしという考えの持ち主。

すなわち――オリヴァー・パウル宰相。

オーラキア帝国の内政のトップに君臨する、皇帝に次ぐ権力を有する男だ。

「傭兵ギルドからの協力は既に取り付けている。ランクＳＳの傭兵も、幾人か新騎士団には参加する予定だ」

宰相とは露知らず、動揺する俺をよそに更にオリヴァーは続けた。

……なんとなくだが、次に出てくる言葉が予想できるような。

「そこで、タカオ・アサクラ。君にも是非とも参加してもらい――」

――だが、その言葉は最後まで出てこなかった。

ガタン、とこの部屋の扉を何かが打ち据えるような音。その音に、

俺は弾かれるように振り向くが、それに続く音は何もない。不審に思ったか、オリヴァーは話を中断して立ち上がり、扉へと向かった。内開きの扉を開くと、入ってきたのは先程部屋の前で直立不動していた近衛騎士だ。

だが、その騎士はまるで支えを失ったかのように、開かれる扉にもたれかかるようにして、床へと仰向けに倒れ伏した。

「な、に……？」

突然の事態に、オリヴァーが絶句し、俺も呆気にとられた。だが、騎士の状態を察知して、一気に緊張を高める。

騎士は、既に死んでいた。首筋を見てみると異様に変形しており、頚骨辺りを砕かれているものだと思われる。人間業では、ない。

剣の柄に手をかけると、部屋の外へと飛び出す。

「そんな……」

他の部屋の前でも、惨状は広がっていた。歩哨の如く立っていた騎士達は、いずれもだらしなく壁にもたれかかった姿で座り込んでいた。周囲を最大限に警戒しつつ、隣の部屋の前に立っていた騎士に近寄るが……同じだ。既に絶命している。

まさか――……。

「馬鹿な……近衛騎士達が一瞬にして……」

続けて部屋から出てきたオリヴァーは、わずかに顔を青ざめさせて、信じられないといった様子で呟く。

「オリヴァーさん……クリスは――クリスティアナはどこにいる？」

クリスティアナの部屋は、オリヴァーの執務室のある区画とほど近い区画にあった。部屋の前には護衛の近衛騎士が立っている――はずだった。しかし、やはり先程の騎士達と同じく、壁にもたれかかる姿で座り込んでいる。

どうやら、襲撃者は相当の腕前のようだ。近衛騎士達が既に数人殺されているというのに、城内からはいまだ緊迫した雰囲気が感じられない。交代の時間になるなり時間が経てばいずれ発覚するとはいえ、音もなく騎士達を瞬殺し、挙句まわりの人間にそれを悟らせないというのは、尋常ではない。

護衛の騎士が殺られている状況でオリヴァー1人を置いていくわけにもいかず、彼を伴って俺はクリスティアナが滞在しているはずの部屋の前に立った。

部屋の面前で1人の人間が死んでいると言うのに、部屋も、辺りも、しんと静まり返っていた。何か声を発しかけたオリヴァーを手振りで黙らせると、部屋の中の様子を耳でうたがう。しかし、何の物音も聞こえない。

俺は覚悟を決めると、オリヴァーにその旨を伝えずに、扉を蹴破り、室内へと踊り込んだ。

刹那――氷をいきなり首筋に押し当てられたかのような感触が、喉元を襲った。

わずかに身をそらしてそれを抜き放った剣で薙ぐと、鈍い衝撃とともに金属音が響き渡った。同時に、左手に跳躍する。そして、視界の端で死角に向かって逃れようとする影に向かって、剣を突き立てる。しかし、剣に押し出されるようにして、影はふわりと後退する。

後退する影に追いすがるようにして、さらに速度を上げて剣を振り上げる。だが、それもやはり手応えがなく、思わず舌打ちする。

さらに肉薄しようとして――思いとどまった。

そこには、クリスティアナがいた。立ってはいるが、意識が混濁しているのか瞳が虚ろだ。その背後で、《焔》の黒装束――ではなく、白装束が彼女の喉元に指を深々と食い込ませている。

「なかなか手間を取らせてくれたな、タカオ・アサクラ」

その白装束は覆面に包まれた口元を蠢かせて言葉を発した。覆面のわずかな隙間からは双眸が見えるが、ぞっとするような静けさだ。同じく静かな威圧感は、これまで襲撃してきた黒装束とは桁違いである。

「……クリスに何をした？」

「暴れられても困る、少しの間だけおとなしくなってもらっただけだ」

「ッ！！」

弾かれるように振り向くと、白装束の更に背後、もう1人の白装束がいることに気づいた。その姿――気配にすらまったく気づかなか

ったことに歯噛みする。

「この女は、いただいていく。安心しろ、“殺しはしない”」

「！　待てッ！！」

ほんの一瞬のことだった。クリスティアナを捕らえていた白装束が身動ぎしたかと思った瞬間、白い流れと化す。俺が1歩目を踏み出したときには、既に視界から消え去ってしまっていた。まるで最初から幻であったかのように、クリスティアナ共々消え去ってしまったのだ。残ったのは、後から現れた白装束のみ。

「殺さない、だと？」

「あいにくと、事情が変わったのでな」

残った白装束は一瞬だけ背後に目を向けると、突如として後ろ向きに走り出した。向かっているのはテラスへと続く窓だ。

「貴様ッ！」

追いかけるが、間に合わない。白装束は背中を向けたままガラスを突き破り、破片を撒き散らしつつテラスへと飛び出すと、テラスから飛び降りた。無論、高いところから飛び降り自殺するような連中

ではない。

「オリヴァーさん、俺は奴らを追います！」

「ま、待て、アサクラ！　奴らは《焔》の《アサシン》だ！　今、応援を――――！」

制止の声が聞こえたが、知ったことではない。俺は白装束と同じく、テラスの柵に足をかけ――相当の高さだったが、意を決して飛び降りた。

身体が宙に浮くと、下方には相当広い中庭らしき場所が広がっていた。幸い、まだ視界に白装束を補足している。なにやら中庭に大勢の騎士が集まっているのが見えたが、そんなことは今はどうでもいい。

騎士達が集まるど真ん中に着地した白装束は、白い流線となって中庭を駆け抜ける。騎士達は、誰１人として白装束の動きに反応できていない！

「逃がすかッ！」

地面に着地すると衝撃で身体中が悲鳴を上げたが、今はそれに耐えている暇すらない。白装束は既に中庭から城内へと続く扉へ手をかけている。

「昨日の傭兵――アサクラか！？」

背中から聞き覚えのある声をかけられる。突如として現れ、突如として逃げ去った侵入者に対し、騎士達が剣を構えて辺りを囲んでいた。その中に、一際高貴な姿をした者がいるのが目にとまる。

――皇帝、エドワードだ。

何故、中庭にこれほど多くの騎士達がいて、そのうえ皇帝までここに――という疑問が生ずるが、やはりどうでもいいことだ。

「何事だ、アサクラ君！　――先程の白装束はもしやッ！？」

視線を移すと、こちらは近衛騎士団長のザック・ミラーだ。その口振りから察するに、まだ城内で起きている事件には気づいていないらしい。

「クリスが――クリスティアナが、拉致された！」

「何だと！？」「クリスティアナ様がッ！？」

「先程の白装束の仕業かッ！？」

「詳しくはオリヴァーさんに――パウル宰相に訊いてくれ！　俺は奴らを追う！」

俺は一旦剣を納めると、周囲の騎士達を押し退けるようにして中庭の出口へと向かった。後ろでまたも制止の声が聞こえたような気がしたが、今はそれどころではない。城内へと通ずる両開きの扉を蹴り破り、俺は疾駆した。

――朝倉君！

その時何故か――アイツが、今村響子が助けを求めるような声が、耳を掠めたような気がした。

EX02　召喚された勇者

「ここ――どこだ？」

その言葉は多分、俺達3人誰もが真っ先に思い浮かべたはずだ。

まず視界に飛び込んできたのは、純白のシルクをふんだんに使った衣装を着た子供――いや、老人だった。腰が直角に近いほどに折れ曲がっているので、小柄な身体が更に小さく見えるのだ。これも純白のフードが目元まで覆っているが、頬や口回りが皺で大きくたるんでいることから、かなりの年配であることが分かる。

その背後に目を向ければ、数え切れないほどの人がいる。……おかしなことに、誰も彼もが時代錯誤も甚だしい――いわゆるファンタジーを思わせるような服装をしていた。騎士、だろうか。なんというべきか、帯剣している段階でおかしい。

さらにその後ろはといえば――白亜の建物だ。陽光に照らされて眩しく煌く尖塔を中心に、これまた中世ファンタジーを彷彿とさせる

建物。

「なに……これ」

肩膝をついて中腰になっている俺は、すぐ隣から上昇してきた声に目を向けた。

隣で尻餅ついてへたり込んでいたのは、同級生の英嶋美里だ。小柄な彼女は目を白黒させて、埃が入り込むような勢いで口をあんぐり開けて呆けていた。――どうでもいいが、その制服の短いスカートでその体勢だと、下着が見えるぞ。

「外国……？」

さらにその横には、きょろきょろと周囲を見回している今村響子。明朗快活、頭脳明晰な――最近は事情あってそうでもない様子であったが――彼女であっても、さすがにこの状況は理解しきれないらしい。

当然ながら、そんな彼女より学力、洞察力で数段劣る俺が分かるはずもない。

俺達はつい先程まで、もはや定例になりつつある高校屋上での昼食会を楽しく――否、しめやかに執り行っていたはずなのだ。それが、突如として眩い光に包まれたかと思うや――この有様である。

……もしかして、白昼夢というやつか？

「――成功です」

しわがれた声が耳に入った直後、辺りにどよめきが広まった。どうやらその声はあの小さな老人から発せられたものらしく、その背後では大勢の人々がざわざわと口々に何かを囁きあっている。

完全に、俺達は置いてきぼりだ。

あまりの異常事態に頭がくらくらし始めた頃、老人の後ろの集団から一際豪奢な服装で身を包んだ若い男が歩み出てきた。陽光の照り返しで煌く金髪に、優男を思わせるような風貌。明らかに日本人の顔立ちでなく、外国人のそれだ。その身体からはどこかこう――……威厳というべきか、上品というべきか。上手く言葉で表現できないが、いわゆる住む世界の違うような、高貴さが見て取れた。

その男は柔和な笑みを浮かべてゆっくりと近づいてきて――まず、英嶋に歩み寄った。

「――――大丈夫かな、お嬢さん」

外見に違わない耳障りの良い声で、男は膝立ちになって英嶋に手を差し出した。今になって気がついたが、先の老人の言葉といい、ど

ちらも日本語――に聞こえる。少なくとも俺の耳にはそう聞こえたが、英嶋はそうでないのか、なお目をぱちくりさせて呆然として男を見上げている。だが、ようよう言葉を理解したか、英嶋はこれまたゆっくりと片手を差し出した。

それを見て、男はまるで子供のように白い歯を見せて笑った。しっかりと英嶋の手を取り、まるで騎士のような危なげのない物腰で英嶋を立ち上がらせる。そこにいたってようやく正気を取り戻したらしい英嶋は、何やら分からぬことを口走って、やがて妥当な言葉を選び出したようだった。

「あ、あの……ありがとう、ございます」

「どういたしまして。“異世界”からのお客人をぞんざいに扱うわけにはいかないからね」

ますます笑みを深くする男の姿に、英嶋は今度は別の意味で呆けていた。……気持ちは分かる。その整いすぎた顔立ちを間近にすれば、おそらくほとんどの女性は同じような反応をするのではなかろうか。

……

――……いや、待て。今、何かおかしなことを言わなかったか、この男は。

「イセカイ……？」

どうやら聞き間違いではないらしい、今村が男の言葉を繰り返す。
そう、確かにそう聞こえた。
今村の問いに男は頷くと、1歩下がるようにして俺達3人を順に見ていき――……。

その言葉を言い放ったのだ。

「私の名前は、エドワード・ウィリアムズ。
そしてここは、オーラキア帝国の帝都オーケルン。
世界は今、魔王の脅威に瀕している。私はオーラキア帝国の皇帝として――いや、全世界を代表して貴方達を歓迎する。
異世界へようこそ、勇者達！」

全身から高貴さを迸らせての男の――エドワードの言葉に、俺は遅まきながら認識してしまった。

俺は――いや、俺達は、とんでもない異常事態に遭遇してしまったのだと。

「つまり……俺達に、魔王を倒せ、と？」

「心苦しいが、そのとおりだ。ユースケ・ウエノ君」

言葉面どおり、言い辛そうにして男――エドワードは頷いた。

今にも貴族でも出てきそうな、地面より一段高い場所にある華やかな屋根つきのオープンテラス。そこで、俺達は向かい合っていた。6人掛けのテーブルに座るのは、俺の他に、今村と英嶋。エドワードと、禿げた頭に皺だらけの顔の温厚そうな老人。最後に、どこか目つきの悪い、銀髪の壮年の男だ。この男は、腰に帯剣して白い制服のような服を着ており、この男と似たような姿をした者達が、いずれも帯剣してこのオープンテラスを遠巻きにぐるりと囲んでいる。彼らはいずれも周囲を警戒するかのように外側を向いて直立不動の姿勢を取っていたが、奇妙なまでの威圧感がある。

エドワードによると、ここは――オーラキア帝国帝都オーケルンの中心に聳える皇城、その城の中庭――らしい。

うん……なんていうかもう、言葉は理解できても、わけがわからん。

挙句、俺達が勇者ぁ？

これはもう夢だなと早々と断定してしまった俺は、先程からテーブルの下で何度も膝を抓って痛みを感じていたのだが――痛みを感じるということは、夢ではないということで……。

案の定、今村にせよ英嶋にせよ、俺と似たような状況のようだ。得意気に話すのはエドワードばかりで、淡々と説明を続ける。

夢から醒めない以上は仕方がない、俺は自棄糞気味に、状況理解に

努めることとした。

曰く――

魔法《勇者召喚》で俺達をこの世界に――……駄目だ、もうギブアップしたい。魔法だなんて、冗談も大概にしてくれ。

この異世界は魔王の侵略に晒されていて――……ああ、そうだろうよ。勇者、魔法とくれば、お決まりの魔王もくるんだろうよ。

過去、魔王の侵略は幾度もあったが、それを打ち払ったのはいずれも異世界から召喚された勇者達――……ああ、ファンタジーってやつだな。

そして、俺達がその勇者である――……なんでそうなる。いきなり飛躍しすぎだろ。どういう過程で俺達が勇者になるんだ。

あまりにも空想染みたことを話すエドワードに、俺はこいつの頭をかち割って中身を確かめてやりたくなったが――……エドワードの真摯な姿勢と透き通ったような青い瞳が、残念なことにそこにまったくの嘘偽りがないことを俺に認識させる。両隣に座る老人も男も

真剣そのもの、茶化すような雰囲気はまったくない。

すべては、紛うことなき事実。それを、彼ら3人の態度が物語っていた。

ようやく状況説明が一段落すると、まず最初に言葉を発したのは英嶋だった。

「どうして……どうして、私達なんですか。私は……何の特技も力もない、ただの、学生です。そんな、魔王を倒してくれだなんて……」

「まず一つ目の質問についてですが、それはすべからく偶然であると考えられています。先程、貴女方もご覧になられた小柄な老人は宮廷魔術師でございまして。……彼が《勇者召喚》を実際に行ったのですが、彼が貴女方を選んだというわけでもないのです。そして、2つ目の質問についてですが、これはご心配なさらず。貴女方はまだ気づいておられないでしょうが、貴女方の身体には大いなる光の力が宿っているのです。その力があれば、魔王や魔王の手下など、敵ではないと言われております。だからこそ、召喚された……おっと失礼、私としたことが申し遅れてしまいました。皇帝陛下の補佐をしております、エドガー・ビリンガムと申します」

老人――エドガーはまるで詠うようにして一息に言い切った。

つまり、俺達は偶然異世界に召喚されて、俺達の身体には特別な力が眠っているって……それを信じろというのか？　……なんというべきだろう、あまりにも状況が出来すぎているというか、お膳立てされすぎている。

「勇者ってのは、１人じゃないのか？　俺としては、唯一無二の存在という感覚があるんだけど……」

「それはユースケ様のおっしゃる通りなのですが……大変申し訳ないのですが、ユースケ様、キョウコ様、ミサト様、どなたが勇者であるのか、私達にも分からないのです。伝承、歴史を紐解くと、勇者には常に心強い従者がいたとされております。彼らもまた、異世界より召喚されし者達。つまり、貴女方のいずれかが勇者であり、残りの２人は従者として召喚されたことになります。これを確認するには、大いなる光の力の発現を待つしかありません。それが最も強く輝く方こそが、勇者なのです」

１を尋ねれば、１０が返ってくる。老齢ながら、エドガーのその口の回り方は感服するしかない。よくもまぁ、淀みもなくすらすらと話せるものだ。

「いくら……その、光の力があるからといって、闘い方を知らない俺達に何ができるって――」

「失礼、それは私からご説明を。私、オーラキア帝国近衛騎士団団長のザック・ミラーと申します。ユースケ殿の懸念もごもっともですが、安心されてもよいかと。私を始めとする手練れの騎士達や、

世界最強の帝国三大騎士団の団長達も、その点はしっかりと補佐させていただきます」

男――ザック・ミラーの言葉からは絶対の自信が感じられた。外見からして、鬼教師、鬼軍曹といった感じだろうか。……それ見ろ、英嶋など少し怯えているじゃないか。

今のところ一言も発していない今村はといえば、何やら俯いて表情を底の底まで暗くさせていた。今にも泣き出しそうな表情には、彼女に対して特別な感情がなくとも、俺が何かしたというわけでなくとも、罪悪感を感じさせられる。

……そうだ、今までの話は、すべて俺達が勇者――誰が真の勇者かはともかく――になることを前提としたものだ。

根本的なことを忘れている。

「……俺達を、元の世界に帰してくれないか。悪いが、そんなことできるとは思えない。他をあたってほしいんだ」

俺の放った言葉に、エドガーとザック、双方が同時に口を開こうとして――エドワードが引きとめた。表情を引き締めて、厳しい顔つきで言葉を発する。

「それについては、私から説明させてもらおう。……ユースケ君、キョウコさん、ミサトさん。とても言い辛いんだが……《勇者召喚》は魔王を倒すため、異世界人を召喚する魔法だ。それゆえに、その目的の達成されない限り、君達を自国へ帰すことは……できないんだ」

「「！」」

「……ッ！」

……死刑宣告でも言い渡されたような気分だ。よりにもよって、魔王を倒さなければ元の世界には帰れない……？

一挙に、心の中で様々なことが走馬灯のように駆け巡る。

それでは、俺達の意思はどうなる……！

感情が激発し、声を張り上げそうになった瞬間、エドガーが絶妙のタイミングで水を差す。

「それでも……一昔前までは、魔王討伐以外にも勇者達を“元の世界へ帰還させる方法はあった”のです。ですが……誠に不本意なことに、その方法も失われてしまいました。唯一、その手段を先達より受け継いできた者が、“行方不明”になってしまったのです」

「行方不明……？」

「はい。その男の名は、ホムレ――――」

ガシャンッ！！

エドガーの言葉を遮るようにして、辺りにけたたましい音が響き渡った。ガラスの割れたような音……？

一早く反応したザックが跳ねるようにして立ち上がった瞬間――それは、すぐ傍に降ってきた。

忍者、とでもいうべきだろう。漫画などで登場しそうなイメージそのまま出で立ちだが、１つ異なるのは暗闇に溶け込む黒装束ではなく、白装束ということか。どこから降ってきたのか、その白装束は俺達の座るテーブルとそれを囲むようにする騎士達の間に滑り込むように単身降ってきた。

「え……？」

状況を理解できず呆然とする俺達とは異なり、ザックを始めとする騎士達の反応は素早い。独特の鞘走りの音とともに、一斉に剣を抜

き放つ。

「貴様、何者だッ！！」

俺達が身震いしてしまったほどのザックの鋭い誰何に、白装束の忍者は無反応だった。白装束を包囲する騎士と、エドワードや俺達を守護するように移動する騎士達、その磐石たる動きは壮観だ。

「皆、油断するな！　コイツは《アサシン》――！」

「逃がすかッ！！」

ザックの言葉を遮るようにしたのは、またも上から降り注いだ男の声だった。

ほぼ同時に、白装束の姿がぶれる。流れる白影の如く、瞬きする間に白装束の姿が視界から消え失せた。まるで、始めからその場所に白装束の忍者などいなかったかのようだ。騎士達も同様なのか、皆が一瞬呆気にとられる。

――ダンッ！！

そこに、鈍い着地音とともに2人目が降ってきた。騎士達が俺達を護るように周囲を囲んでいたことと、その2人目はこちらに背中を見せていたので顔は分からないが、黒髪の若い男だった。白いシャツにスラックスという、ファンタジー然とした出で立ちの者が多い中で、俺にとって見慣れた格好をしている。だが、それでもやはり違うのは、その右手に鈍く輝く剣が握られているということか。

「昨日の傭兵――“アサクラ”かッ！？」

これまで鋭い目つきで事態を静観するのみだったエドワードが身を乗り出すようにして声を張り上げる。この様子からして、どうやらこちらは侵入者ではないらしい。

（……アサクラ……？）

このわけのわからない事態に巻き込まれるまでの間、ずっと俺の――いや、俺と今村、英嶋の頭の中で渦巻いていた言葉――アイツの名字。

突発的な事態にいまいち頭が正常回転しない中にあって、まさに降って湧いたように出てきた言葉に、まさかという思いが先立つ。

そして――男は剣を片手に振り向いた。

苛立つように息を吐く、目つきの鋭い若い男――……。

「……ぁ！」

ハッとするように息を漏らしたのは、きっと今村響子だったのだろう。

「……ど、どうして……」

続けて、当惑の声を漏らしたのは、英嶋美里だ。

若干の雰囲気の違いはある。だが、その声、その容貌――間違いない、この男は――！

「お前――！」

「何事だッ、アサクラ君！　――先程の白装束はもしやッ！？」

俺の言葉を遮るようにして、ザックが男に近づいて声を荒げる。……ああくそ、そんなことはどうだっていいんだ！！

しかも、歯痒いことに男の視線はエドワードからザックへと移り、俺達の方へと向けられない。その挙句、俺達の姿は前方の騎士達でほとんど隠れてしまっているようなものだ！

「クリスが――クリスティアナが、拉致された！」

「何だと！？」「クリスティアナ様がッ！？」

男が怒声のように言葉を発すると、ほぼ同時にエドワードとエドガーが激しく反応する。

「先程の白装束の仕業かッ！？」

「詳しくはオリヴァーさんに――パウル宰相に訊いてくれ！　俺は奴らを追う！」

男は剣を納めると、一秒でも惜しいと言わんばかりに騎士達の間をすり抜けて駆け出した。動揺する騎士達は茫然と男の動きを見守るばかりで、止めることはできない。

「朝倉君――！」

「待つんだ、“タカオ・アサクラ”！　単独での深追いは――！」

今村の声をかき消すようなエドワードの制止も空しく、男――タカオ・アサクラは中庭を疾風の如く駆け抜けると、屋内へと通じる両開きの扉を蹴破るように出て行った。

……ちくしょう、なんてこった！

「上野君……」

「……ああ、間違いない。少し雰囲気が違うような気もするが……アイツだ」

にわかにエドワードやザックが騒ぎ始めていたが、俺達には何の関係もないこと、まったく耳に入ってはいなかった。

それよりも、先程の男――“タカオ・アサクラ”と呼ばれた男。

「どうして……どうして……こんなところに……朝倉君が……タカ君が、いるの……？」

今村は茫然自失といった様子で、震える声とともに、先程までアイツが立っていた場所をジッと見つめていた。若干、混乱しているのだろう。アイツと今村、2人きりのときだけしか口にしない呼び名を俺達の前で口にするなんて――……。

そうだ、アイツだ。

“1ヶ月前”、まるで神隠しにでも遭ってしまったかのように突如として行方不明になった男。

今村響子と英嶋美里という、我が高校の擁する美少女2人組への報告役兼相談役という、なんとも心の痛む仕事を俺に押し付けてくれた男。

俺、上野雄介の友人にして――今村響子から持ち前の明るさ爽やかさを奪い去り、不安と悲愴を与えた男。

タカオ・アサクラ――……朝倉、隆雄。

どうりで行方が掴めないはず……隆雄は、この異世界へと来ていたのだ……！

――この邂逅における一連の出来事を、俺達は後々、深く後悔することとなる。

――俺達はこの時に、有無を言わさず、無理やりにでも、力づくにでも前に出て、隆雄を引き止めるべきだった。

――俺達が――今村響子が、《勇者召喚》によってこの世界へと召喚されたのだということをなんとしても知らせるべきだったのだ。

――過ぎたことを後から悔やんでも始まらない。だが、それでも俺は――考えずにはいられない。

――この時、朝倉隆雄と今村響子が誠に再会を果たしていれば……あるいは、後に起こる惨劇を回避できたのかもしれないのだから……。

ＥＸ０３　勇者、人探しをする

圧巻。

私がつい先ほど目にした光景は、ただその一言に尽きたと言ってよかった。

端的に言うならば、ほんの数分前まで私は生命の危機にあった。それも、不治の病による危機だとか、老衰による寿命といった誰にでも訪れるものではない。

文字通り、この身を喰い尽くされる危機にあった。

私の足元に転がっているのは、無残に打ち砕かれた魔物たちの無数の死骸だ。私たちが馬車で通りすがるまでは鮮やかな緑に映えていた草原の中を走る街道は、見るにおぞましいどす黒い血と醜い肉塊によって埋め尽くされていた。せっかくのさわやかな草原の香りも、こうなっては血の据えた臭いが多い尽くすばかりである。

この魔物たちは、俗に食人鬼などと呼ばれている。廃墟などに住みつき、群れをなして人間を襲い、その名前のとおり人間の肉を好んで食らう。人間の捕食者とも言える存在であるが、その個々の力は決して絶望的なものではない。ギルドの傭兵を連れていれば、たとえのどかな街道を歩いていたところを不意打ちされたとしても、十分に対処できる相手である。

率直に言って、私に傭兵達のような魔物と闘う力はない。剣は扱えないし、当然魔法の１つも使えない。どうにも絶望的なほどに才能というものがないらしい。そんな私にできるのは、これまでの人生数十年の中で培ってきたギルド内部の書類処理、報告事務、経理といったところか。当然、こんな能力は魔物相手では何の役にも立たない。

そんな私がこの物騒なご時世に護衛の一人も連れず、街の外に出るのはもはや自殺志望者とも言えるわけで、最低限の用心として、傭兵３名に、王都サンエストルから港町ガルト――今では交易の街の見る影もないが――の道中の護衛を依頼していた。

まず断ってくおきたいのだが、彼らは決して無能ではなかったし、三流、四流の傭兵ではなかった。ランクＣと下位の評価ではあるが、無数の傭兵の成長を見守ってきた身としては、磨けば光るモノを感じたし、経験さえ積めばそれなりの傭兵にはなるだろうと思えた。

そんな彼らは今どこにいるのかといえば――無数に転がる魔物たちのいずれかの、腹の中だ。

……気分が悪くなってきたので、そろそろ自己紹介しておこう。

私の名前はライド・アルム。
ヴァルゴアン王国王都サンエストルのギルドに２０歳になる前から勤め上げ、現在の肩書きは事務長――つい最近になって出世したばかりの、愛する子もいる妻帯者だ。

そんな私の目の前には、圧巻の光景を繰り広げた３人の男女がいた。

いずれも年は若い。まだ少年、少女の幼さが抜けきらない、それぞれが個性的な３人組だ。今でも信じがたいが……１００匹は超えたであろう食人鬼を瞬く間に討伐――いや、殲滅したのは、この３人だった。

夢か幻か、信じがたいが、常識ある大人としては、やはりこれだけは言わねばならない。

「助けてくれて、ありがとう。君たちは命の恩人だ」

私は感謝の意を込めて、深く頭を下げた。

「いえ……すみません。私たちがもう少し早ければ……」

返ってきたのは、私に対する謝罪の言葉だった。

おそらく3人組のリーダー格なのだろう。腰まで届くだろう漆黒の長い髪を無造作に一本に纏めた、綺麗な娘だった。黒瞳の眼差しからは悲色が覗いているものの、可憐、という言葉がよく似合う。背もすらりと高く、上背は私とほぼ同程度ではなかろうか。上半身は銀色に輝く軽鎧で覆い、腰にはこれまた長い剣を提げている。屈強な戦士から見れば子供同然ともいえる痩せた体型ではあったが、あの食人鬼の群れのほとんどは彼女の剣によって屠られていた。

娘はおそらく護衛の傭兵達のことについて謝ってくれているのだろうと思われたが、それは違う。

私が口を開く前に、しかし娘の右横にたたずんでいた男――いや青年というべきかな――が口を挟んだ。

「”キョウコ”、そう気に病むなよ。冷たいようだが、モノには時機ってものがある。タイミングが悪かったんだ」

そう、そのとおりだ。名前も知らない青年の言った言葉だが、私の言いたいこととほぼ同趣旨だ。

運命の一言ですべてを片付けてしまいたくはないが、護衛の傭兵3人が殺されたのも、私が殺される寸前のところで助けられたのも、たまたま運が悪かったからであり、運が良かったからにすぎない。

「でも……”ユウスケ”君。”キョウコ”さんも私も、それだけで割り切りたくはありませんよ……」

「だったら、俺たちは力をつけるしかないのさ。すべてを救うための力を、な。そうだろう、”キョウコ”、”ミサト”」

なにやら娘の横で、3人組の残り2人が内輪もめ染みた会話を始めたが……。

……いかん、そろそろ限界だ。

そう思った瞬間、私の視界は反転し、一瞬後には雲ひとつない青空を見上げていた。

ようよう意識を取り戻したとき、私は何故か見慣れぬ馬車の中で柔らかなモノに包まれて横になっていた。どうやら毛布をかけられていたらしい。若干高めの若者たちの話し声に呼び起こされるように、ゆっくりと目を開ける。

即座に目に入ってきたのは、先ほどの3人組のうちの1人、最も小柄で、最も幼さが滲み出る、可愛らしいという言葉が似合う娘だった。肩口ほどまでのこれまた黒髪に、両耳には少々目立つ大きめの金色の耳飾をつけている。装飾自体は見慣れぬものだが、おそらく魔法使い達が好んでつけるとされる飾りだろう。身体全体を覆うような漆黒のローブ以外は、外見的な雰囲気からしてもそこいらの街角にいる女子供と変わりない。

身体を起こそうとする私の肩を丁寧に支えてくれたこの娘は、万人を安心させるような笑みで問いかける。

「気がつきましたか。私たちのこと、覚えています？」

「あ、ああ……さっき、助けてくれた子達だね」

ゆっくりと馬車の中を見回すと、今度は先ほどの3人組のうちの最後の1人――これまた若い青年が馬の手綱を握っていた。リーダー

格らしき娘の姿は見えない。

戸惑う私に、小柄な娘はゆっくりと状況を説明してくれた。

私があの後急に倒れてしまったこと、倒れてしまった私を置き去りにするわけにもいかず、やむなく自分たちの使っていた馬車に乗せたこと、もともと私たちが使っていた馬車は馬すら殺されて使い物にならない状態であったこと等々。

要は、私はこの娘たちに救出されたということらしい。

事情を聞き、私は改めて礼を言った。

「本当に、ありがとう。君たちが駆けつけてくれなければ、私も魔物の腹の中におさまるところだった」

「気にしないでくれ。俺たちがあんたを見つけたのは、ほんの偶然だ。食人鬼の群れに囲まれている人影を偶々見かけなけりゃ、魔物の群れなんてよくあることと無視して通り過ぎるところだったんだからな」

手綱を握りつつ、青年が振り返って歯に衣着せぬ物言いで喋る。

若干目つきが鋭いが、なかなかの男前だ。やはり黒髪であり、細眼鏡をかけている。薄汚れた灰色のジャケットを着込んでおり、見たところ得物を持っていないように見えるので、戦士なのか魔法使いなのか外見からは見当がつかない。ひょっとしたら、彼に関しては私同様闘う力を持っていないではなかろうか。

「俺たちはちょうど王都サンエストルに向かうところだった。あん

たの目的地がサンエストル方面か、ガルト方面か分からなかったが、あんな死骸の山の中に置いとくわけにもいかなかったから、勝手だがこちらに乗車してもらった次第なんだが……」

「いや、かまわないよ。実はガルトに向かっていたんだが、あんなことがあっては一旦サンエストルのギルドに戻った方が良さそうだ」

なんとも無様なものだった。護衛を全員殺されたうえ、ほうほうのていで出戻りすることになろうとは……。

「ところで、君たちのほかにもう1人いたような気がするんだが……彼女はどうしたんだい？」

「ああ、彼女――キョウコなら先発して偵察に出てもらっている。あれだけの食人鬼を殺したんだ、ほかの群れが異変を察知してよりついてきてもおかしくはないからな――と、そういえば、自己紹介してなかったな」

言われて、はたと私も気がついた。私としたことが、名乗りもしていない。

「俺は、ユウスケ――ユウスケ・ウエノだ。一応、剣士という部類になるかな」

それにしては、帯剣していないように見えるのだがと怪訝に思いつつも、私も自己紹介する。

「私はライド・アルム。王都サンエストルのギルドに勤めている。

ガルトには、ギルドの仕事でちょっとした調査に出かけるところだったんだが……」

「アルムさん――ですか。私はミサト・エイジマ。魔法使い、ということになりますね。ちなみに、もう1人の彼女は、キョウコ・イマムラ。お気づきかもしれませんが、私たちのリーダーです」

☆　☆　☆

「……そうか、それは災難だったな。前途有望な若い傭兵を3人も一度に失ったことは痛いが……君だけでも無事でよかった」

「申し訳ありません、支部長。私ももう少し用心するべきだったのですが」

対面のソファに座るギルド長は、一気に老け込んだようにも見える

顔にさらに皺を寄せて苦悶の表情を見せた。

親切にも王都サンエストルまで送ってもらった私は、偵察から戻ったキョウコ、ユウスケ、ミサトの3人組に改めて謝意を伝え、急ぎギルドへと向かった。

本来、このサンエストのギルドに戻るのは1週間後のはずだった。にもかかわらず、2日と経たずに戻ってきた私に事務員達が皆一様に何かあったのかと声をかけてきたが、私は説明もそこそこに当ギルドのギルド長の執務室を訪ねた。

事前の了承もなくいきなり執務室に乗り込んできた私にサンエストル・ギルド長――フェリクス・ブレイダーも最初は面食らっていたが、事情を説明するにつれ、酷く深刻な顔つきへと変化していった。

「いや、これは決して君の責任ではない。ここのところの加速度的な魔物の活動の活発化はもはや対処できないところにまで至っている。……もはや食人鬼程度の魔物、と侮っていられる時勢ではない、ということだな」

魔王が復活した、と市井の人々が口々に噂し始めたのは、まだまだ最近のことだったと思う。魔物の個数が増え始め、また、急速にその個々の力を増大させはじめてから、まだそうそう経っていない筈だ。

にもかかわらず、世界は酷く物騒なものになった。現在では『ガルト事件』とも呼ばれる港町1つが一夜のうちに魔物の襲撃を受けて壊滅した事件。これを境に各国の各都市で魔物の襲撃が増え始め、都市外部では闘う力を持たない商人や旅人は傭兵等の護衛がなければ隣町にも行けない有様となっている。各国では騎士団の力を増強

し、世界に点在するわれらギルド組織もまた、あらゆる方面で魔物討伐を行っていた。

それでもまだ、第二の『ガルト事件』ともいうべき大規模な都市襲撃は起こっていない。だが、人心に不安と恐怖ばかりが渦巻くこの状況は、恐慌一歩手前の状態とも言えた。

それだけ、魔王の存在は魔物の生態に影響を及ぼしているのだろう。魔王復活ももはや噂話などと言っておられず、明確な、確定的な事項として人々の話題にのぼる。

「ギルド本部にも今回の件を報告して、魔物に対する一層の警戒を上申しておく。それと、君のガルト復興調査は、また時機を改めることとしよう。加えて……ライド君、君は長期の休暇を申請したまえ」

「支部長、私のことでしたらどうかお気遣いなく――――」

「そういうわけにはいかん。肉体的疲労は一晩休めばある程度緩和されるが、精神的な疲労は一晩でどうこうなるものではない。……酷な言い方だが、ずっと内部の仕事をしてきた君には……今日の体験は衝撃が強かったはずだ」

そう指摘されて、意識的に考えないようにしていたあの凄惨な光景が想起された。

確かに……人間が3人……魔物の群れに無惨に殺される様は……。

急速に嘔吐感が込み上げ、内臓がかき回されるような、呼吸のできないような感覚に襲われる。字面だけでなら、傭兵からの報告書上だけでなら、別段珍しくなんともない事象だというのに……。

「……分かりました。元々出張している身です、早急に引き継ぎを済ませ、休暇を申請することにいたします」

執務室から出た私は、事務室の他の事務員達にも簡単に事の経緯を説明した。……いずれ分かることだが、護衛の傭兵の死に様については意識的に触れないことにし、今後傭兵として再起不能となるほど大きな負傷を負ったことだけ話した。

ガルトへの出張の無期限延期、そして滅多に取得することのない休暇を、それも長期に取得することを話した段階で、皆ある程度事情は察してくれた様子であった。聡い部下達を持って、私は実に幸運である。

「ライド事務長は普段から働き詰めですからね。たまにはゆっくりと静養してください。後のことは私がばっちりやっておきますから」

そう自信ありげに言ってくれたのは、新人の段階から私がギルドの事務を徹底的に叩き込んでいる事務員――レイナ・フォノスだ。肩口にかかる長さの赤毛が特徴的な、明朗快活な娘である。

”とある傭兵”がここのところまったくサンエストルのギルドに姿

を見せなくなったことで、最近少々気落ちしている様子も見られていたが、今の意気込みを見れば、まぁ大丈夫だろう。

私は手早く机周りを片付け、挨拶もそこそこにギルドを出た。

「おや……彼女達は……？」

無性に妻と娘の顔が恋しくなって足早にギルドから通りに出たところで、しかしながらすぐに足を止めることになった。

ギルドの出入り口横に設置している掲示板――普段は傭兵募集等やギルドの広報用資料を掲示している――を眺めている、３人組の姿が目に留まったからだ。

私の命の恩人――キョウコ・イマムラ、ユウスケ・ウエノ、ミサト・エイジマだ。３人揃って、なにやら一心不乱にギルドの掲示物に目を凝らしている。見れば、どうやらこのギルドに所属するランクＡ、ランクＢの傭兵達の名簿を見ているらしい。

高ランクの傭兵が多く所属することはギルドにとって誇らしいことだし、それを見て依頼者も安心できるということもあるので、我がギルドではあのように目立つ形で掲示している。

今日は彼女達とよくよく縁があるものだと思いつつ、私は彼女達に

歩み寄った。

「やあ、君達。サンエストルのギルドに用事があったのかい？」

「あれ、アルムさん！？　こんなところでまた会うなんて……！」

驚いて振り返るのはミサトだけで、他の２人は無反応だった。私の声が届かなかったが、名簿の名前を隅から隅まで確認している。

こんなところも何も、このギルドは私の職場だと説明する。

「あ、ギルドの職員さんだったんですか！？　――それじゃ、すいません、不躾ですけど、教えてほしいことがあるんです！」

ギルドの事務員であったという驚きもそこそこに、ミサトはどことなく縋るような顔つきをする。

その様子に面食らいつつも、命の恩人の頼みとあっては断れないと私にできることならと返答する。

「実はこのギルドに――」

「タカオ・アサクラ」

ミサトの言葉を遮るようにして、いまだ背中を向けたままのキョウコの背中から無機質な声が聞こえてきた。

「このサンエストルのギルドに、タカオ・アサクラという傭兵が所属していると聞きました。彼の居場所を――お願いします、教えてほしいんです」

振り返ったキョウコの表情は、悲壮と焦燥がない交ぜになったなんとも複雑なものであった。

ひとつ確かなのは――今にも涙がこぼれそうであるということだった。

タカオ・アサクラ。

その名は、サンエストルのギルドではよく知られていた。まだ駆け出しのランクCの傭兵でありながら、その実力たるや折り紙つき。師の名前を聞けばそれも納得で、こちらも有名な傭兵、ゲオルグ・ジョルテに、このヴァルゴアン王国の騎士団団長、ユリウス・アイスラー。ともにヴァルゴアン王国内では屈指の実力を持つ男である。ランクCなど不釣合いの極み、その若さからもいずれはランクA以上を目指せる逸材とされている。

そんな彼だが、半年ほど前にとある護衛依頼のもと、ゲオルグ・ジョルテとともにオーラキア帝国に旅立った。その旅から帰ってきた頃には、一回りも二周りも成長しているものと思っていたのだが……。

彼は、帝都オーケルンに到着したという便りを最後に――行方不明だった。

どうやら……期待に応えられそうもない……。

ＥＸ０４　足跡をたどる勇者

ヴァルゴアン王国。

大陸東方に位置し、海に面した温暖な気候を有する王政国家である。国土は狭く、経済力も決して豊かなものではない。隣の大国、オーラキア帝国とは比べるべくもないが、その気候環境、過去一度も戦地となったことのない土地柄からか、国民の多くは比較的気性が穏やかであるとされる。

またその国内の都市についても、現在においても旧き良き街並みを残すことから一部で観光地としても人気のある都市クレイダール、大陸東部における港湾機能を一手に引き受け、オーラキア帝国との通路ともなっている港町ガルト、など小国ながら特色ある都市を数々有する。

しかし。

今、このヴァルゴアン王国はとある危機に直面していた。

約半年前に起きた、港町ガルトの壊滅事件。世にガルト事件とも呼ばれているが、１つの都市が魔物の襲撃を受けて一夜のうちに壊滅したという事件は、ヴァルゴアン王国内だけでなく、世界中に衝撃を与えた。ここ数十年、いや百年単位で振り返っても、そのような

出来事は起こっていなかったのだから。
噂話程度にしか認識されていなかった魔王復活という凶事を、世界中に突きつけることになる端緒ともなるものであった。

――タカオ・アサクラは、行方不明だ。

その言葉を聞いたとき、私は失望感をおさえられなかった。

苦労して手に入れた情報だった。タカオ・アサクラ――朝倉君が、ヴァルゴアン王国の王都サンエストルの傭兵ギルドに所属していたという事実。突如として、このファンタジーそのものの世界へと召喚されてしまった私たちにとって、たったそれだけの情報を手に入れるのも一苦労だった。

私――今村響子は、本来この世界の人間ではない。

この世界にはもはや当たり前のように存在している魔法――《勇者召喚》によって召喚された、極々普通の高校生だ。

断じて、勇者なんて呼ばれる人種じゃ、ない。

それでも、周囲の状況は、勝手に私を――正確には私たちを、勇者であると認定してしまった。

私たちを召喚した、オーラキア帝国、皇帝エドワード・ウィリアムズ。

彼は非常に良くしてくれたと思う。なんといっても世界屈指の大国の最高権力者だ、右も左も分からない異世界に戸惑う私たちに対して、ありとあらゆる面から支援してくれた。ただある2つの点において――すなわち、勇者の任務を放棄するという点と、私たちを元の世界に還すという点においてだけは、決して叶えてはくれなかったが。

この異世界に関する知識のあらゆることを知ることができたし、魔物と闘うための術も――勇者としての役割を果たすためには当然なのだろうが――教えられた。

勇者として、手塩をかけて養成されたと、言ってもいい。

私たちも、不本意ではあったが、状況を受け入れるしかなかった。

――というより、状況に流されるしかなかった。

それでも、召喚されてから一週間と経ないうちに、私は勇者養成教育ともいうべきものを積極的に受け入れることにした。

なぜならば――少なくとも私には――この世界での目的ができたからだ。

それは決して、魔王討伐なんてものじゃ、ない。

☆　☆　☆

小高い丘の上にある、ほんの小さな家だった。

まるで他人を遠ざけているかのようにポツンと立つその家。景観だけは抜群らしく、玄関先からは王都サンエストルを一望することができる。周囲は鮮やかな緑が映える草原が広がり、見上げれば青空が広がる。

彼が――朝倉君が住んでいたという家を、私は1人、訪れていた。

上野君と美里にはサンエストルで買出しなどをお願いしている。これまでの旅路で食料等不足しつつある。路銀は十分にあるが、まだまだ先は長いので準備は万全にする必要があった。

その傍らで申し訳ないとは思ったけれども、私はここを訪れていた。

サンエストルまでの道すがら偶然にも救出することになったギルドの事務員、ライド・アルムという男。彼から、ここに朝倉君が住んでいたと聞いた。

今は空き家になっているというから来ることにほとんど意味はないことは分かっていたけれども、それでも、どうしても私は、彼が住んでいたという場所を訪れてみたかった。

誰もいないことは分かっているけれども、私は木製のドアをノックした。当然、返答はない。

多少の失望感を感じつつも扉を押し開けると、陽光が窓から差し込

む部屋があった。

「タカ君らしい……かな」

質素、というよりは、全体的にモノがなかった。ベッドにテーブルに、洋服棚に……。夜に帰って寝るためだけの部屋、といった感じだ。

部屋の中を歩くと埃が舞い上がり、長期間、誰もこの家に入っていないことをうかがわせる。

やはり、朝倉君はこの家にはずっと戻っていないようだ……。

ふぅ、とため息ひとつ、私はベッドの上に座った。

「いつになったら会えるんだろうね……」

ここに来て、朝倉君に出会うための手がかりはほぼ尽きたと言ってもよかった。これから先、どうやって彼の足跡を辿ればいいんだろう。

今でもふと思い出すのは、この異世界に召喚されて直後のことだ。オーラキア帝国皇城内での、あの一瞬の出来事。

あれは確かに、間違いなく――朝倉君だった。

結局現在でも、あの日、あの時、あの場所で、いったい何が起こっていたのか、分かっていない。

異世界に慣れてきて落ち着いてきた頃に、何度か皇帝エドワードや宰相に尋ねたことはあったけれども、誰一人として教えてはくれなかった。

勇者様たちには関わりのないことです……と。

知る必要のないことだ、と言わんばかりに。

となれば、こちらで推測するしかない。あの急速に張り詰めた状況、断片的な会話から推し量れることは、なにか。

分かっているのは、朝倉君が何者かを追跡していったということ、『クリス』という名前の人間が拉致されたということ、そして朝倉君は傭兵になっているらしいということだ。

あの日、オーラキアの皇城内で何かが起こり、『クリス』が拉致され、傭兵の朝倉君が単身追跡した……。

だが、疑問点はいくらでも湧き出てくる。

何故、朝倉君があの時皇城にいたのか――もっと正確に言えば、皇帝エドワードとどのようにして関わったのか。拉致されたという『クリス』とは何者か。拉致した犯人は誰か。その後、この事件はどうなったのか。そして、朝倉君はどうしたのか。

何故、この事件について、誰も私たちに教えてくれなかったのか。
朝倉君について、『クリス』について、何者であるのかさえ堅く口を閉ざしてしまうのか。

そして、根本的な疑問が1つ……。

どうして、朝倉君がこの世界にいるの？

これが、どうしても分からない。《勇者召喚》によって召喚されたことは考えられない。《勇者召喚》によって召喚されたのは、私――今村響子であり、英嶋美郷であり、上野雄介なのだ。そして、《勇者召喚》は今代においてはオーラキア帝国の宮廷魔術師のみが、それも生涯一度のみ使える魔法――そう教えられている。

では、朝倉君は……？

考えはじめれば、分からないことだらけだ。

だからこそ、私たちは真実を確かめなければならない。そのために――他にもきっかけはあったとはいえ――私たちは、オーラキア帝国を”脱走”したのだから。

必ず、朝倉君に会う。会って真実を確かめる。

そして――還るんだ。４人一緒に……私たちの、元の世界へ。必ず。

名残おしくはあったが、私は朝倉君の家をあとにすることにした。ここで待っていれば朝倉君が帰ってくるような、そんな気もしたけれど……。

きっと、街で買い出しをお願いしている上野君や美郷を待たせてしまっている。

悪いことをしたかな、と街に戻って2人に謝ろうと考え、扉を開けた――その時だった。

「動くな」

その言葉が聞こえた刹那、私は冷たい何かが首筋に押し当てられる

のを感じた。

全身の筋肉が硬直し、自然とすべての動作が停止する。そして反射的に目線を下におろすと、黒光りする鉄製と思しきなにか――黒い大剣だ――が視界に映った。

「動けば――このまま首を刎ねる」

私は指一本動かすことができなくなっていた。

視線を下から横に動かせば、大剣を構えた壮年の大男がいた。眼光鋭く、溢れんばかりの殺気とともに私を睨み付ける。

この男が何者なのかは分からない。だが――動けない。

私がこの男の言葉に逆らって何か不審な動きを見せれば、この男は即時に、言葉通りに私の首を刎ねるだろう。

そうこの数瞬に確信させうるほどの迫力が、この男にはあった。

「まず、質問に答えろ。――ここで何をしていた」

一も二もない。私は逡巡することなくその質問に応えた。

「朝倉君に、会えるかと、思って……」

「……アサクラクン、だと……？」

わずかに男の殺気が薄まり、剣が震えたような気がした。

「……次だ。アサクラクン、とは誰だ。貴様との関係は？」

「朝倉、隆雄、君です。彼と私は幼馴染で……本当です！」

当初は驚愕が先立って自覚していなかったが、少しずつ、死の恐怖が全身を駆け回りはじめた。

この危機を脱する手は、ある。あの”力”を使えば、この男を怯ませることぐらいはできるはずだ。

だが、それだけだ。

そのまま戦闘に持ち込むにせよ、逃亡するにせよ、この男に太刀打ちできるとは思えない。それが、分かる。

例えるならば――オーラキア帝国の三大騎士団、《白の騎士団》、《紅の騎士団》、《蒼の騎士団》の団長。彼らとほぼ同等の、底知れぬ実力をこの男からも感じ取れるのだから。

勝ち目は、万に一つも、ない。

「――これが最後の質問だ。貴様の生まれは、どこだ。”正直に”、”正確に”、答えろ」

その質問に正直に応えることは、少々躊躇われた。正確に回答したところで、相手が理解できるとは思えない。それに、質問の意図するところもよく分からない。

だが、今の私はただ従うしかない。

「……日本――地球の、日本という国です」

「ッ！！　……そうか、やはり。”そういうことなんだな”」

男の表情が何故か驚愕に染まった直後、急速に殺気が薄れていった。同時に、大剣もまた、私の首筋から離れていく。

……助かった、ということなのだろうか。

「――すまない、楽にしてくれ。どうやら私の早とちりだったようだ」

男は剣を納め、軽く頭を下げた。

早とちりもなにも――と怒るよりも先に、腰が抜けた。地面に崩れるように座り込み、いつのまにか全身から吹き出ている冷や汗を自覚する。

「早とちり、ですか……？」

「いや、すまなかった。誰も訪れるはずのない彼の家に客が来ているというんでな、もしや《焔》ではないかと思って過剰に警戒してしまったようだ」

立ち上がろうとする私に、男は優しく手をかしてくれた。よく見れば、男は全身黒尽くめの服装だった。黒のロングコートに黒のズボン、おまけに黒の剣と、よほど黒い装飾にこだわりがあるらしい。灰色交じりの髪に、皺の見え隠れする顔。その柔和な表情は、殺気に満ち溢れた先ほどとは打って変わり、見る者を安心させる雰囲気があった。

男は自らをユリウス・アイスラーと名乗ると、再び神妙な顔つきに戻る。

「改めて、聞かせてくれ。……君は、もしかして」

「はい？」

「もしかして――……君が、今村響子さん、なのか？」

何故か、朝倉君へと続く道筋に少しだけ光がさしたような気がした――。

第１２話　潜伏する仮勇者

勇者様が召喚された、という噂を始めて耳にしたのはいったいいつの頃だったろう。

人々は口々にこれで世界が救われると、魔物の脅威に怯えなくてすむと、魔王は滅ぼされるのだと話した。そこにはわずかながらの疑いもない、絶対的な確信があった。

この世界の人間なら知らぬ者はいないとも言える、昔からの伝承。すなわち、光の勇者が異世界より召喚され、魔王が討ち滅ぼされるという話。

この話のとおり、世界は動いているといってもいいのだろう。次は光の勇者の活躍によって王は討たれる、というわけだ。

魔物の侵攻は急速に進んでいる。誰しもが、自らの住む都市がかのガルト事件のような惨事になることを恐れている。そんなことになる前に、きっと勇者様が世界を救ってくれる。そんな期待を抱くのは、ある種当然のことだ。

だが――そんな勇者への期待を、この耳にするたびに、俺は複雑な気分にさせられていた。

勇者が召喚された――……では、同じく《勇者召喚》で召喚された俺は――なんだ？

☆　☆　☆

「ハンス・アグリールさんですね」

「は？」

オーラキア帝国、帝都オーケルン。常時人通りの多いこの市街の大通りで、俺はいきなり1人の男に呼び止められた。

ダークグレーのスーツを完璧に着こなした、頭の先から踵の先まできっちりと身なりを整えた男。サングラスをかけているので双眸は分からないが、堅物の雰囲気をぷんぷんと匂わせている。

「えっと……確かに俺はハンスだがね。あんたは？」

「これは失礼。私、こういうものです」

そう言って、男はその一つ一つが丁寧な動作で懐から四角く小さな紙を取り出し、俺に差し出した。見慣れないものに一瞬戸惑ったが、どうやらこれが噂に聞く、名刺、というやつらしい。

受け取った名刺には『ギルド本部　広域運営連絡調整員兼機動調査員　グレイ・ダイクス』……と、なんとも長たらしい、一読しただけでは意味不明な肩書きとともに名前が書かれていた。

「不躾でたいへん恐縮なのですが、ハンスさん、貴方にギルドから直接依頼したいことがあって、こうしてお訪ねした次第です」

「……はぁ？」

極まれにだが、個々の傭兵に対してギルドが直接依頼をすることがある。

基本、このようなことはありえないことだ。日々、人々からギルドに持ち込まれる依頼は、傭兵が自ら選択して受けるもの。ギルドからいわば押し付けられるような形で依頼を処理することはない。

だが、非常に処理困難な依頼であるとか、依頼者が特殊な地位にある者である場合――このような依頼は特別管理任務とも呼ばれるが――ギルドが傭兵を選ぶ。

紹介とは言うが、実情は強制に近い。その依頼を受けるか否か、適正に処理できたかどうかが、今後の傭兵としての査定を左右するからだ。

こういった依頼を断ったばかりに、傭兵ランクを下げられた者もいると聞く……上がることはあっても、下がることはないと言われる傭兵ランクだ。下位ランクに落ちるなど、傭兵として不名誉の極み、侮蔑の対象である。まぁ、わざわざそんなリスクを侵して依頼を断る奇特な輩はそうそういないだろう。

「では、お受けいただけるのですね？」

「ま、見返りもいいしな。断る理由もないさ」

大通りから場所を変え、路地裏の場末の酒場。客の入りも少なく、昼間でも非常に薄暗く狭い酒場で、俺はグレイに依頼の説明を受けていた。

結論としてだが、俺はほぼ即断でその依頼を受けることを伝えた。なんといっても、提示された報酬が破格すぎた。……男1人、当面は遊んで暮らせる額だ。

「それは良かった。いやはや、今回の任務は少々特殊でして……ハ

ンス・アグリールさん、あなたのような腕の立つ傭兵が何人も必要なんですよ」

「特殊だから、ギルドが直接依頼するんだろ。まぁ褒めてもらえるのはありがたいがね」

これは失礼、とグレイはずれたサングラスを直すような仕草をした。どうにも慇懃無礼な感じがして、いい印象がない。

「で、だ。そろそろ依頼の中身を詳しく教えてくれてもいいんじゃあないのか？」

「そうですね、概略だけでも先にお伝えしておきましょう。詳細な中身については、後日、全員が揃ってからお話しさせていただきますので」

曰く、今回の依頼はこのオーラキア帝国で誘拐された帝国のとある要人を救出すること、らしい。

どうもこの要人というのが高度に政治的な問題を孕む存在のようで、帝国が前面に立って解決することができないらしく、水面下で処理を――すなわち形式上はどこの国家にも属さないギルドに協力を依頼して解決することになった、とのことだ。

で、ギルドは腕利きの傭兵を集め、救出作戦を行うことになった、ということなのだが……。

「無論ですが、これは極秘事項です。そのため、この要人というのが誰なのかについては、作戦決行の直前までは伏せさせていただきますので、ご了承ください」

……こう言ってはなんだが、非常にキナ臭い、と思う。

つまるところ、世界屈指の強国であるオーラキア帝国が国内で起こした不祥事を、ギルドの傭兵を使って解決してしまおう、ということだ。

その要人というのが、いかなる存在なのか分からないが、水面下で解決しなければならないような人間など、そうはいない。

極端な発想かもしれないが、帝国が表立って動けば――国家間レベルでの戦争が勃発しかねない問題、ということだって考えられる。

……まぁ、そこは俺のような現場の傭兵が考えることじゃあないかね。せっかく、法外な報酬にありつくことができるんだ。これを断る馬鹿はいないだろうね。

「今回の依頼には俺以外に何人が参加するんだ？　それだけの案件なんだ、相当数が参加するんじゃないのか？」

「いえいえ、量より質、頭数がいればいいというものでもありませんので、今回は少数精鋭で行うつもりです。少数の方が、作戦上、いろいろと都合が良いものでして……」

少数の方が都合が良い、ねぇ。作戦そのものも、どうやら相当にやばそうな感じがするな、これは。

「そうそう、実はお一人連れてきているんですよ。一応、紹介しておきましょうか」

そう言うや、グレイは立ち上がって酒場の出入り口に向かった。酒場の外に誰かを待たせていたのか、外に手招きすると、1人の男が酒場へと足を踏み入れた。

「……ッ！？」

入ってきたのは、目鼻立ちが異様なほどに整った長身の男だった。腰まで届きそうな長い金髪は首筋あたりで結われ、まるでしっぽのように揺れている。腰に提げられた二本の長剣だけでも威圧感がある。

だが、それ以上に男から圧倒的な存在感が感じられた。ただ酒場の中に足を踏み入れただけだというのに、まるでこの空間すべてが男に制圧されたかのような、そんな感触。ただ、その青い双眸に野蛮なものは見られない。あるのは、ただただ静けさだ。

俺は自分でも気づかないうちに、懐の杖を握っていた。

そんな中、グレイだけが悠然と男に歩み寄る。

「紹介いたしましょう。彼の名は、ルーファス・ロウ。《閃光のルーファス》、といったほうが分かりやすいでしょうか」

「！　ＳＳ級――か！？」

まさか、こんなところでお目にかかれるとは思わなかった。

傭兵の最上位、ランクＳＳ。ランクＳ以上の傭兵は二つ名を与えられ、その名前は世界中の傭兵にとって畏敬の的だ。

中でも、《閃光のルーファス》といえば、だ。

ギルド史上を見ても、最強の冠を与えるにふさわしいとも言われている傭兵だ。その凄まじい剣技はオーラキアの三大騎士団の団長たちすら凌駕すると噂される。

驚愕する俺をよそに、グレイはあくまでも淡々と説明を続ける。

「なにしろ、今回の作戦は非常に重要なものでしてね。その成否は、我がギルドとオーラキア帝国の今後の関係にも重大な影響を及ぼす可能性すらあるものです。そのために、当ギルドとしても考えうる限りの人員を選出した、というわけです」

「フン、よく言う。たまたま俺が依頼を抱え込んでいなかったから

だろう」

ルーファスの声は、まるで鋼のように硬質感あるものだった。意識しなければ素通りするだけのことなのだが、意識するとその一言一言が身体全体に重くのしかかってくる。

なるほど……これがＳＳ級ってぇわけか。闘うところを見たわけでもないってのに……。

「いえいえ、適材適所、ということです。ルーファスさんにはルーファスさんの、ハンスさんにはハンスさんの、この作戦での役割がありますので。傭兵のランクはこの際、問題とはしていません」

そうは言われても、俺からすればＳＳ級など雲の上の存在である。足手まといにしかなりそうもないのだが……。

どうにも人選がよく分からん。

「ギルドのランク付けなど何の印にもならん。かえって先入観を抱かせるだけだ。貴様らギルドのエージェントの手前勝手な物差しで見定められても、いい迷惑というものだ」

「手厳しいご意見ですが、そう無益なものでもないんですよ？　依頼する側、される側、やはり一定の基準は必要ですから」

「その基準を作るのが貴様らエージェントだというのが気に入らん、

と俺は言っているんだ。所詮、貴様らは戦士ではない。だから、あの”アサクラ”のような的外れなランクをつけられた者を生む」

……ちょっと待った。今、聞き捨てならない名前が出てきた気がする。

「アサクラ、だって……？」

突然口を挟んだ俺に、グレイとルーファス双方の視線が一斉に向けられる。そんな名前の奴、この世界でそうそういるもんじゃない……。

「ひょっとしてその”アサクラ”ってのは――」

「ああ、そういえばハンスさんはサンエストルのギルドが振り出しでしたね。だったら、彼のことも知っていて当然ですか。お察しのとおり、”アサクラ・タカオ”さんのことですよ。彼も今回の作戦には参加予定なんです」

なんとまぁ。

あの野郎、どこをほっつき歩いているのかと思ったら……。

☆
☆
☆

アサクラ・タカオという人間は、ホムレウス・オルノアンによって召喚された。あの憎たらしい爺によれば、召喚した方法は《勇者召喚》という魔法だ。

このたび召喚されたという勇者様は、オーラキア帝国の宮廷魔術師によって召喚された。伝承によれば、これもまた《勇者召喚》という魔法による。

どう考えても、この二者にさしたる違いはない。あるのは、《勇者召喚》魔法を行使した主体が異なるだけだ。

そして重要なのは、《勇者召喚》は帝国の宮廷魔術師にのみ伝えられてきたということ。

それを何故、ホムレウスが使えたのかは分からない。今もって行方不明だが、いずれは見つけ出して問い詰める必要があるだろう。

それはともかく、おそらく、ホムレウスによる《勇者召喚》はイレギュラーなのだ。

本来は、帝国が召喚した勇者達が、まことに正しい勇者なのだろう。

とすれば、イレギュラーな事態によって召喚された異世界人である俺も、また同様にイレギュラーな存在――ということになる。

俺こそが真の勇者だ、という発想は残念ながら無理がある。そもそも俺が召喚されてからというもの2年以上が経つが、俺に伝承のとおり光の勇者の力が発現する傾向はまったくないのだから。

ならば、俺はいったいなんだ？

手違いで召喚されたのか？　それとも、万が一のときのための予備か？

「――アサクラ様」

「……あ？」

答えの出るはずのない思索の海から俺を引っ張りあげたのは、無機質な女性の声だった。

目を開けて見回すと、とある王国の騎士団の制服を着こなした女が立っていた。黒褐色の髪をシンプルなバレッタで留めた、妙齢の美女だ。

「ああ、カレンか。交代の時間か？」

「いえ、随分とお疲れのご様子ですので、寝室でお眠りになられてはと思いまして」

どうやら軽く考え事をするつもりが、ドツボにはまっていたらしい。遠慮しておく、と丁重に断りつつ、俺はようようと椅子から立ち上がった。

「先ほど、ギルドから連絡がありました。今回の作戦遂行にあたってのメンバー全員の選定が終了したそうです。今頃エージェントが各傭兵を勧誘しているかと」

「それじゃあ、後はヴァルゴアン王国とドラングース王国の回答待ちか」

はい、と女性――カレンはあくまでも事務的に受け答えした。知り

合ってから随分と経つが、まったく愛想というものがない。

もう半月ほどになるか、ようやく住み慣れてきたこの部屋。窓際に近づいて厚いカーテンを開けると、白銀の光景が広がっていた。

キルクハイム王国王都ガリバール。

この国において一年で最も降雪の多いこの時節、俺はこの国にいた。

俺の目の前で拉致された――クリスティアナ・バーグマンを救出するために。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1960l/

勇者進化論

2011年9月23日21時47分発行